

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第一刷
昭和五十八年九月二十五日 印刷
昭和五十八年十月一日発行 (毎月一日発行)
創刊大正十三年 通卷六七七号



日川協加盟

No. 677

58年度二賞発表

十月号

58年度 同人総会と

二賞発表句会

日時 昭和58年10月2日（日）午後一時開場
会場 なにわ会館

地下鉄谷町9丁目・近鉄上本町下車南

電話 06・772・1441番

▼同人総会 午後2時～3時30分

。司会・西田柳宏子／開会の辞・河内天笑／挨拶・西尾某

〔議事〕①会計報告・高杉鬼遊 ②事業経過報告・

輕谷寿馬 ③質疑応答／閉会の辞・宮口笛

生

▼二賞発表句会 午後5時30分から

おはなし

路郎賞・川柳塔賞表彰

兼題

〔髪〕

〔礼〕

〔舞〕

〔富〕

席題 当日二題

会費 五百円

各題三句

西尾 梨

小出 智子 選

西田 柳宏子 選

若柳 潮花 選

橘高 薫風 選

川柳塔社

路郎門の老雄が

奇しくも同じ日に

■山陰で

尼緑之助句文集

生かされて

定価 二千円

〔送料本社負担〕

発行所 川柳塔社

—昭和五十年九月二十五日—

■北陸で

伊藤 茶仏 句集

道祖神

非売品

発行所 こまつ川柳社

鮎雑炊

西尾 栗

今年の大陸川柳同窓会は、八月二十七、八の二日間、愛知県の形原温泉で開催された。二十八日の正午、岡崎駅解散というスケジュールであったので、この機会を利用して憧憬の郡上八幡へ行くことにした。それは、東野大八先生が美濃加茂市に居られるのを幸い、ご案内の労を煩わした。おかげさまで、岡崎から八幡までの経路は名鉄、国鉄高山線、越美南線とややこしい乗換をいともスムーズにはかどって目的地八幡駅へ四時三十一分に着いた。この線は赤字線で廃線となると噂の線である。大八先生はじめ薫風、鬼遊夫妻岳人、僕と六人乗った位では赤字解消にならないが、せめて何とかなるだろうと、山又山へ入って行く越美南線の窓から、鮎釣りで賑わう吉田川を過って行つた。

駅には赤や青で彩った郡上おどりと書いた提灯が一行にぶら下っていて、有名な郡上おどりの町へ来たという感情が湧いてきた。

今夜の宿は、新町通りにある中島屋であった。玄関に入つて廊下を行くと新畳の香りが鼻をついた。一同はその香りに感激の声を発

した。この宿は小作りではあるが家族的な宿で、京都の四条流の板場さんが居る料理旅館というので特にこの宿を選んだ。

一浴後の夕食の膳には、吉田川の天然の鮎の塩焼、鮎の魚田、鮎雑炊と仲々乙な料理がついていて、皆な満悦だった。

七時半になると、打合せ通り翠柳会の会長青木惜春氏が見えて、今夜の歓迎会場へ案内された。鮎で満腹の一同は久しぶりに履いた下駄の音を立てて萬助寿司の会場へ着いた。会場にはフルコースの会席膳が出ていて、一同は目を見張った。歓迎して下さったのは、惜春氏の外男一人、女四人計六名の方だった。こちらの六名に合わされたようであった。

郡上おどりは昨日で打ち切りで来る九月三日が最後のおどりであったので、翠柳会の六人は郡上節の素晴らしい咽喉で、いとも鮮やかなおどりを心ゆくまで見せて下さった。ご婦人の一人に、立枕よし子さんという変わった名前の方がおられたのが印象的であった。

帰りに銀河テレビ小説「旅びと」がこの町が舞台になつていて、ヒロインになった湯舟あや（浅利香津代）が、よく飲みに来た飲み屋が「棟梁」という名の店であることを教えられたので、のぞいて見たが、満腹のため、のぞいただけで表通りに出て、宮ヶ瀬橋から積翠城を眺めて川風で酔いをさました。

朝食をすまして一ぷくしていると、惜春さんが色紙を一箱もつて来て皆に所望された。

大八先生は

惚れている女癖はどこにありますの
という句を揮毫された。

薫風氏は惜春氏の名にふさわしく旧作であるがと断つて、

惜春の音の一つに昼の三味

鬼遊君は

弁当をしつかり抱いたまま別れ

岳人君は、昨日の大陸川柳会で天の天をとつて、トロフィーを手にした句

狸には化かされやすい父の靴

僕は即席ながら惜春氏の名に因んで

星一つ積翠城に春惜しむ

を書いて責任を果たした。そして宿に御礼にと中島屋畳の香り夏座敷

を書いて渡した。帰りの玄関で女将さんから

何遍も何遍もお礼をいわれたのには恐縮した。それから、朝の珈琲を「門」という喫茶店

で賞味して、積翠城へ登って、十三時四十五

分発の列車で郡上八幡をあとにした。

赤と青の一行に並んで「郡上おどり」の提灯がもう秋を思わす風にゆれていた。

この度の旅行で、東野先生並に翠柳会会長青木氏はじめ皆々様到大変お世話になりました。篤く御礼申し上げます。

そうそう、昭和六十年の四月の第三日曜日

には翠柳会の十周年記念川柳大会を開催されるとききました。御盛会をお祈りすると共に

是非出席する心算であります。

座右の句

滝の白雨は斜めに降りかわり

(薫風)

私の句

特訓へ母の大きなにぎりめし

高橋幸代

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

鮎雑炊

西尾 葉……(1)

“おこべ”さん

野村太茂津……(2)

川柳塔 (同人吟)

西尾 葉選……(4)

自選集

東野 大八……(32)

■川柳太平記(65) 《川柳の群像》西田当百

東野 大八……(32)

■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (十三丁)

東野 大八……(32)

58年度路郎賞・川柳塔賞決まる

東野 大八……(32)

水煙抄

黒川紫香選……(40)

秀句鑑賞

同人吟

金井文秋……(29)

水煙抄

中村ゆきを……(53)

“おこべ”さん

野村 太茂津

大阪歴史の散歩川柳吟行会に二・三度参加して、よし／郷土も見直そう、と思ひ、忙しい川柳活動の合間を盗んで調べている。

その一端をご紹介します。

国鉄紀勢西線海南駅の北東約二キロ、小野坂の脇に「くも池」がある。その名は昔、神武天皇がこの池で名草戸畔の軍勢と戦い、土蜘蛛を討ち取ったことに由来するという。

また別の伝えでは、名草戸畔の亡骸を三つに分断、頭部はくも池から北東三キロ、高倉山の麓に俗称「おこべさん」という宇賀部神社(フイリピンから戦後三十年を経て復員した小野田元少尉の実家)に祀られ、腹部はそこから東南一キロの通称「お腹さん」と呼ばれる杉尾神社に祀られたとされる。

さらに足はそこから西南一キロ「足神さん」の千種神社に祀られたと伝えられる。

小野坂の道は「小栗街道」で、坂を南下するにつれて、松代王子址や祓戸王子址がありその手前に、俗に「日限地藏さん」の浄土寺がある。境内左手の高台には、源義経の墓を中心に置き、左に亀井六郎、右に鈴木三郎の墓が並んで建っている。

愛染帖

橋高薰風選

(54)

「よめやうたえや川柳天国」

T2スタジオから(板尾岳人) T3スタジオから(西出楓楽)

(58)

さよなら伏見茂美さん

藤井一二三

(60)

伏見茂見さんを悼む

高橋千万子

(61)

「支え」

松川杜的選

(62)

一路集「命令」

川竹松風選

(62)

「宝」

川端柳子選

(63)

初歩教室

本田恵二朗

(64)

柳界展望

本社九月句会

(66)

各地柳壇(佳句地10選/森井菁居)

編集後記

(72)

編集後記

薫風・酔々・鬼遊・史好

(83)

座右の句

菊活けてひととき欲を忘れたり

(白柳)

私の句

釘箱の釘に悩みを持たさない

清水健司

さらに小栗街道を六〇〇メートル南下すると、右手に全国の鈴木姓の総本家と言われる「鈴木屋敷」がある。神武東征のとき稲を積み重ねたものを「すすき」と称するところから、鈴木姓を授けられたという。

その入口近くに「義経弓立ての松」がある。源義経が熊野参詣の往復には必ずこの屋敷に滞在し、鈴木三郎重家や、亀井六郎重清らと山野に遊んだという。

屋敷には、かつて徳川氏から奉納されたという「子授け大黒」が安置されていた。ある夜、盗人が忍び込んだところ、闇の中からゲラゲラ笑う声が出て、この大黒さんの姿が浮きあがってきた。盗人は薄気味悪くなつて逃げ出そうとしたが、どうにも足が動かず、ついに捕らわれたという。

それ以来、雨戸を閉めなくとも、盗人の入らない屋敷として知られるようになった。そして脚氣の人がこの庭を踏むと治ると信じられている。

この鈴木屋敷から小栗街道を隔てた斜め前に藤白神社、境内に藤白王子址、藤白坂にさしかかると、椿の太木の近くに、十一面観音像が掘り出されたと伝承されていた有間の皇子の埋葬地がある。

藤白坂はここから登る。紀州の伝説散歩はこれからが面白い。

万葉の恋へ幽痒し羨まし



西尾 葉選

大阪市 西森花村

サヨナラに病人よそごとばかり言い

孫が増え子犬も増えて眠られず

大学を出ても未だに浪人科

鶏は動物園にも鳴いていず

地下鉄を上れば北浜枯葉舞う

横穴遺跡ビジネスホテルの跡ですな

定年まで私も平です仁王さん

松原市 谷垣史好

逝く夏を惜しむ河鹿と電機屋と

女逞しじゃがいもを食い恋を食い

おしん見ぬ奴この指とーまれ

波がしら白く髑髏の歯ぎしりか

建売りを買うて地主になりました

町内の日蔭に傘の張り替え屋

秋三日べーブマットの香が残り

大阪市 本間満津子

偉そうなこと言うやないかと自問自答

老化です人並ですと居直った

待っていたようにお次の悩みごと

遠雷は他所ごと貰い風涼し

難しいメロンの皮の残しよう

卯の花がおいしく炒れて亡母しのぶ

横笛が似合う優しいお月様

和歌山市 若宮武雄

八月の今日は平和に溺れまい

ゴキブリの態度盆でも叩かれる

一本でこれこの通りおらが酒

合掌のあと算盤のはじき方

履歴書は運命線をあざ笑う

背信の痛みは酔うて尚つのり

自販器のボタンが好きで人嫌い

岸和田市

高橋操子

愚痴こぼす私に意見するわたし

ハンドルは横ぎる亀を待っている

休耕田利用ひょうたん作りに村活気

血のなせる業なり日糸二世の意気

此の暑さ耐えると月の秋が来る

十五夜の月うれしさに久米田池

倉敷市

野田素身郎

たかが野球されど野球の夏来たる

すこし手前の日蔭で信号待つ炎暑

無理をして喋り誤解の種を播き

靴をよく間違う一番後に出る

いつの間にかバス待つ影も伸びて秋

風邪ひきそうな肩書のない名刺

八尾市

高杉鬼遊

十月のあいさつ高き天を指し

夕焼けを食べて色づく唐辛子

凡々と歳を数えるめし茶碗

決算の数字が合わぬ熱帯夜

菊人形ひだりもみぎもなかりけり

恋も秋雑木林も絵になりぬ

大阪市

小出智子

秋風や身のすみずみを繕いぬ

おそろしや寿命が延びたと言うことも

ベランダへときどきわたしを捨てに出る

うちの娘も隣の猫も過保護とか

ローズ色は使い果たした絵具箱

暑かった夏を見送る峠茶屋

宝塚市

傍島静馬

子を叱る母の眼元が笑ってる

普段着のたくまぬ姿が美しい

こまわりは利くが大事を任せれず

予定時間におくれて焦らす恋心

毒舌が消えて病状革まり

清掃の直後へ吸殻捨てかねる

桜井市

岩本雀踊子

貧しさに負けない父の顔が好き

鬼あざみトゲ持つ女の意地を見た

嘘つきの最後の嘘は抱いて逝き

どん底を見て来た男の縄ばしこ

親しい受話器に軽く母が病む

共同墓地情をもらう無縁仏

大阪市

川口弘生

年頃は島を抜け出す虹の夢

計算に弱い女の撒く噂

年輪という名が哀し背の丸み

齢の功太い字だけで用を足し

夏バテで割引きをする自己批判

お気のすむ迄とお世辞を聞き流し

奈良県

香川酔々

切り狂言終わり役者に蛙鳴く

螢火をともしかよわい指の先

桜島地鳴りし酒ずし食べ頃

モナリザの微笑が消える蚊に刺され
神将に護られ安眠する仏

一合の晩酌愛す哲学者

松原市 玉置重人

かくれんばやさしい先生もういない

お父さんどうしたの此の頃やさしすぎ

資本家の好きな真面目なロボットで

祭り笛けだるく聞いている造花

ジャンケンポン妻にはいつも負けておく

嫁の里息子いごこちいいらしい

大阪市 中川滋雀

てのひらを運命線が先走る

てのひらをこぼれて逃げる水の恩

てのひらのビタミン剤に顔があり

少年のてのひらをひよこ知っている

てのひらの汗が騒いだラブシーン

腹立てて帰れば妻はテレビのメロドラマ

島根県 小砂白汀

バス停の夜霧は人を慕わしむ

加減乗除ただそれだけの生きざまか

囑託の位置で残飯もらうよう

好きなもの食べさせなさいが処方箋

ゲートボール石屋も大工も年をとり
塩壺をいつしか充たしておくも母

愚かさを炎天に立っている自虐

白旗の表も裏も白である

身に余る話で詩にはしてくれず

老化現象でかたづけられて薬多々

うつむいた時人の心がうれしくて

ずるい年輪だなど思う笑顔

倉吉市 奥谷弘朗

人様にものを教えるむつかしさ

ばてるから打ち込むものを一つ持ち

真相はうやむやにする政治力

アンテナと呼ばれ奥さんよく出掛け

夏バテに老人ボケまで加勢する

わざわざいの口が仲々ふさがれず

岡山市 時末一灯

人間のすることじゃないが人間だ

窮鼠には逃げ道ひとつ空けておく

目薬をさす時開ける口なのか

磨かれて休みたい日を朝の靴

夢ひとつ入れた抽斗鍵がない

ガン腫ではなかった抜けるような空

松江市 舟木与根一

殺された真実法は未決にし

日本は平和がいっぱい自動ドア
強烈に八月六日の雲の峰

富田林市 岩田美代

泣きに來る場所でなかつた夏の海
可愛くて孫の尻っぽは見ない振り
風変りな息子が一人理数系

松江市 小林 孤呂二

政治家と握手政治を知らぬ人
にんげんに戻る水車の音と居る
スナックで猫より優しい声をきく
クラーの真下でピエロに似た眠り
小賢しく宣誓うらぎる小役人
捨て石の妙味を次男よくつかい

奈良県 村上 春巳

にわか雨友とのれんがそこにある
ゴキブリの住居は梅田一番地
原爆を知らぬ若さの原爆忌
下駄さげて宿のゆかたの白良浜
三流の宿で夫婦の灯をともし
サファリーへ老妻は子供になつてゐる

堺市 高橋 千万子

朝顔の明日を数えて庶民なり
爪たてて蟬のぬけがら誰を待つ
銀のサジメロンをもらうキリギリス
土用波ブル育ちを馬鹿にする
体力も食欲も子に負けて夏
出来心でもよし善意に背伸びする

吹田市 藤村 女

たつた一度の情事を知つて揺れる橋
ポケットに男はみんな嘘を持ち
仕事着の似合う男で頼母しい
お歴々呼び捨て出来るバーのママ
夏の恋は握手して終り
無意識に相槌打つて罪作る

和歌山市 西山 幸

わたしから抜け出すために乗る電車
一日の報酬で購う傷薬
だるまの眼まだまだ味方してくれぬ
孤り居る泣かず笑わず喋らずに
強がりの素顔を亡父母に見てもらふ
ロボットの記憶違いを笑えるか

奈良市 宮口 笛生

朝からの酒も病氣の一つなり
肩書の無い花道の美しい
どっちでも転ぶ末席の顔でいる
畦草を刈る後継ぎの無い田圃
旅一人隣の訛りよく喋り
気まぐれな愛のかけらを拾う旅

島根県 堀江 正朗

今をすぐ忘れて今を繰返す
思い出す景色みんなの輪の中で
念を押されると重たい耳になり
ぶつかった壁から勘を取りもどし

盲人の目にも流れる汗が沁み
幸せを聞く耳があり欲を描く

島根県

堀江芳子

幸せはくるくる独楽の芯に似て
水害にくじけないでと荷を作る
そつと瞳を閉じてむなしさ飲みおろす
白紙にも裏あり掌信じたし
言い馴れて聞きなれて無事差し向い
正直すぎる夫でときどき慌てさせ

岡山県

嘉数兆代賀

悔ゆることのみ多し庭を掃く
風は秋いくたび目まいしたことか
いくたびの放心あの日の貨車がい
言訳はしないと決めた茨道
馬鹿になりとおせた日々落日よ
風よ騒ぐな私はわたしの道をいく

鳥取県

林露杖

ハマユウの花が咲いていた海女の恋
手と足の演技でみせるベッドシー
柔肌に触れしは夢の熱帯夜
熱帯魚妬心ちらつと向き変える
くすぶるも燃ゆるも嫉妬女舞
再審で無罪迷宮入りができ

大阪府

河井庸佑

お先にどうぞ窓際だんだん近くなる

率先垂範好きやからやったはる
年寄りの話題になってきた同期会
敵にだけ回したくないのがひとり
うんうんと聞くからよけいつけあが
ふとある日香車真横に走りたく

寝屋川市

江口度

電柱の短かいかげでバスを待つ
脱皮するたんびに虫はたくましく
役に立つうちは人間生かされる
人ひとりきらねばならぬ重い口
境界に見えないやじろべえがある
灯台が見えると船長眠くなる

豊中市

安藤寿美子

初盆の骨壺少し重くなる
夏瘦を知らぬまんまで生きている
昼寝覚めゼリー固ってるかしら
短夜を司馬遼太郎にホレている
駅の灯のとどこかぬ所で待っている
還暦のワインカラーに凝って見る

島根県

錦織文子

三代目迄は士族のご先祖で
口なしの白き愁も他人めき
ちぎれ雲故郷に父と母が居る
雑草は踏まれたままで花をつけ
年だなと思われる日の鏡拭く

朝鮮の文字忘れ得ぬ過去が在り

大阪市 江城修史

原爆忌夾竹桃と夏雲と

労りの言葉にもろい日の自嘲

半生は闘病夢が消え残る

ぎりぎりの暮しに嘘も出し尽し

心の灯いつまで胸に会者定離

セールスへ後姿の友ばかり

大阪市 津守柳伸

みだしなみ独り暮らしの熱帯夜

浮き草の肩寄せあったしたたかさ

サンマ焼く女ひとりのセレナーデ

婦したくない彼を刺すのは細い月

中流の意識で明日の米を研ぐ

お互いが我を殺してる縄電車

八尾市 宮西弥生

仏さま帰る日なり邪心脱ぐ

手を合わすころ八月十五日

飛びこんで行こうか男の胸無言

身の上を明かす酔いではない花火

極楽の風貴船に來て出合う

愚痴っても涙は見せぬ日の墓参

海南市 牛尾緑良

生命線愛を燃したこのあたり

小細工をせぬ父の背についてゆく

中年のピアノは演歌など奏で

恋だから既に自分は捨てている

どちらでも良いけど妻の意見聞く

波紋もつ小石は私の手から出た

兵庫県 辻文平

喪があげて火の粉を一つずつ払う

流れ星女が肩をよせて来る

団欒の輪からはみ出す老いの耳

下駄箱の中は仲の良い同居

堕ちてゆく女がさがる桐箆箆

盾にする何一つないふところ手

宇部市 平田実男

蔭で糸引いているのは見逃され

植物人間医学の進歩を喜べず

酒の味変になるのがまた唄う

相手より前評判へ倒される

嫁にやる費用を自慢げに愚痴り

あなたって善い人ねーと惚れていす

大阪市 北勝美

慣れた目に終戦記念日遠くなり

国守る言うから言葉に角が立ち

平和を守るそんな言葉を甘くみる

鉄屑の安値続いている平和

ロスを見るパーセンテージにある誤算

医者へ行く人と遊びに行く人と

八尾市 高橋 夕花

あやとりの糸をたぐって亡母に会う

自販機で非行少年よく育ち
まりなげをして日本中湧きに湧き
飲み足らぬから相棒へ酌いでやり

わたくしにすこし短い亡母の帯
朝の鏡まだまだ亡母に追いつけぬ

唐津市 久保 正敏

夫の胸の広さにすこし腹をたて

西瓜冷えだあれも来ない午後三時

コスモスの芯の強さに負けていく

堺市 大道 美乙女

わらすべにすぎる思いが易を訪う

命日へ記憶の糸を手繰りよせ

母子家庭悩みの影にあるドラマ

嘘一つカバーするのにうそがいる

蛇口からポトリ女の愚痴が落ち

腕白も日陰で遊ぶ土用照り

寝屋川市 稲葉 冬葉

秘策はないが死ぬる気にもなれず

裁かれる策ねっている風見どり

とても逢いたい日リズムは狂いだす

ひそかに賛美ライバルの足跡よ

情報を売った男の縄のれん

遠花火悪夢を思い出さぬよう

唐津市 浜本 義美

南瓜まだ生きているのか花をつけ

気に喰わぬマネキンの眼と髪の色

朝市の客は訛も買うてゆき

片方の耳はお世辞聞きたがる
虫売りを子等の笑顔がとり囲む
愛を聞く耳の一番うれしい日
歯が痛むときはきまって休診日
歯がたたぬ相手と知っておよび腰
虚栄心がゆれる耳かざりがゆれる
親離れた子を想う遠花火
夕涼み戦さの話止めて置こ
脇役でいたい私を攻めに来る
いつの日かひとりと思う肩寒し
祭笛古里愛す友が寄り
少年の本棚にある立志伝

東大阪市 崎山 美子

西宮市 妹尾 春江

守口市 野呂 右近

過疎は良し価値千金の水が湧く

美人薄命他人事として笑う妻

来世迄添うかと聞くを野暮と言う

老い二人今日も0対0で暮れ

人生に切取線は無い筈だ

ほころびを見過されないので女

和歌山市 福本英子

口笛に乗って伴せ運ばれる

トラブルの種を上手に蒔く女

炎えつきたらしい家出の娘が帰る

クワガタの死骸を入れる玉手箱

御先祖の好きなビールが生ぬるい

サボテンの針がチクリと亡父かえる

和歌山市 堀端三男

逃げ道のないまま親の仮面着る

俺よりも勝手知ってる集金人

ライバルだから慇懃に酌を受け

これからという人だった通夜の席

高言を吐いて揚げ足掬われる

寄進する瓦に旅の無事祈る

大阪市 橋元美恵

母と居た年月姑と共に過ぎ

娘が恋を静かに老いを感じてる

口止めをされて小さな罪背負う

貧血に低血圧という美人

立秋の空に燃え付く百日紅
蟬時雨眠ってしまえば帰れない

西宮市 奥田みつ子

泰山木の白より白い夏の恋

花火消え闇深くなる一周忌

白木槿今日の命をいとおしむ

熱帯夜浴衣でチンと坐る姑

身の上をしんみり聞かす宿の箸

別れ行く越路に淡きねむの花

尼崎市 春城年代

ご先祖の艶聞法事なごませる

遠い日のまつりの風に逢いにゆく

宮水を守る婚家の白い壁

愛届く距離に娘も孫もいる

山寺の和尚手古摺る猫の恋

恋をしてまつりばやしの裏にいる

兵庫県 遠山可住

籠を出た小鳥大空もてあまし

夕立ちを特急電車走り抜け

専務さんが留守番をして盆休み

気軽うに取り持つ裏の道を知り

家族みな城へ戻ったお盆の灯

伊丹市 慳谷寿馬

事務的なやりとりを待つ救急車

心電図思わぬ若さ画き出す

麻酔から覚め卑怯でなかったかと思ふ

胆石コロロ憎みきれない丸い音

病院の坂を夫婦で降りてゆく

米子市

八木千代

身売ってから乾きだすボールペン

終りのない布を一途に織っている

金銀の鱗で隠す鯉の傷

少し傾いた羅漢に逢いにゆく

真実をせんじつめると指の紋

米子市

林瑞枝

眠くなるとババの胸では落ち着かぬ

引き潮へ悟り切れないかけ茶碗

ゆで卵自己分析の殻を剥ぐ

淋しくて月へダイヤル回す指

潮騒は笑い上手な水の精

八尾市

大路美幸

闇ぬくし精霊流しの灯が揺れる

一度だけその広がり大きさよ

炎になれぬ男を裁く花時計

思い出の中に風船割れた音

さよならをもう一度いう骨納め

鳥取県

川崎秋女

する事がいっぱい幸せだと思ふ

一つ年上の女をさがす旅に出る

ありがたい話は両の掌で受ける

両の手でたたく拍手なら貸そう
里がえり両手あずけている昼寝

出雲市

原独仙

ビール腹パンツの紐がまた伸びた

愚痴るにはあらず甘えの老い二人

ブルが来て潰すよあの丘恋の丘

あの素振りアウトラインを越した仲

夏やせと別だ芽出たい嫁の痩せ

米子市

小西雄々

喝采はなくても妻とフルコース

年上の妻羽繕い忘れない

麻糸へ畳職人主義を持つ

雨雲へコンピューターの指示を待つ

自画像を汚す妥協へ気がとがめ

藤井寺市

児島与呂志

三年三カ月の戦歴は私だけのもの

八月十五日はジャズを聞いてたなと思ふ

語り部になれる苦悩はたかが知れ

意地悪い言葉は善人素通りし

他人の目を気にすることは気にしてる

倉敷市

小幡里風

ファミリィでヌードを競う熱帯夜

熱帯夜妻の黒子を見つけたり

太陽の真下を歩く影を踏む

降りそうでふらない空の模様替え

野良猫が裏から素足で通り抜け

島根県

西村 早苗

竹原市 小島 蘭幸

義理という粹にはまって動けない

あと押しが居るらし示談又もめる

嬉し泣き背なに嫉妬の眼を感じ

まだ別な貌をかくした初対面

体操を休む生徒にある秘密

鳥取県

鈴木 村諷子

今治市 越智 一水

神経のあんまり細いふしあわせ

手を執って嘘がまことを連れてくる

子の声も混じる夕餉のスタレ越し

ある女ある日哀しいフォームにし

ホーセン花少年学のなりがたし

松江市

柳 楽鶴丸

平田市 久家 代仕男

炎暑猛暑酷暑熱暑言葉がない

日本海大波小波のライندگانス

ゼニにならぬ肩書ばかりふえ

ストレスが沈澱して手術

熱暑の中で蟬のラブコール

松江市

恒松 町紅

鳥取市 小林 由多香

風までも味方につけて海怒る

肩こりが癒ると腰が疼きだす

女っ気がないと悲劇を生む畳

炎天に冷房からのピアノ音

盆すぎて嫁に移った主導権

倉敷市 稲田 豊作

世界新その肉体の美しき
甲子園みな寝転んで見てはりま

ピーポーピーポーピーポー熱帯夜が続く

子が描いた私の鼻の明るさよ

ペアルックある日突然妻が言う

夕仕度おくれる妻に趣味があり

ガタが来た身体を夫婦笑い合い

膝枕満足と言う風をうけ

恋知って嘘がころころと出る

生きのびた喜びそこに秋の風

人生の峠を越した遠花火

昼顔や犬の墓にも三年忌

仕出し鞆買うほど出して柄替する

土用波風いとおしむ月見草

雷鳴が近く投げ出す草刈機

すねた子が二階へこもり夜となる

エプロンのポッケで輪ゴムすねている

ジンクスはどうあれファイトだけで押す

金で買えない友情をぬくめ合う

ひからびた風へ癌だと父気づく

ちやほやと嫁が私を掌に乗せる

ご機嫌で笑い袋を閉め忘れ

節約の余地ありません妻のみことのり

子は別居老いの積木は崩れ落つ

自分より下を探して安堵する

京都市 都倉求芽

山門を共鳴させて蟬しぐれ

雑音しきりラジオへ雷の咳ばらい

職人の余技が好事家を走らせる

そよ風のこは二人の花の園

山陰線京の田舎を乗せて発つ

岡山県 直原七面山

橋山の昔話を子から聞き

鈍刀で渡り合ってる老夫婦

上役の不興を買った正義感

捻子巻いて今日も夫を送り出し

闘病記の中で育って行くマリモ

美祿市 安平次弘道

科学者の仮説兵器は見逃さず

二人三脚いつしか妻に引きずられ

未来図をずたずたにした子の非行

曲り角夫婦のネジがゆるんでる

泥舟ではしゃぐ女の愛一途

香川県 岡田拳法

自分だけ被爆はいやで核を持ち

平和です数字遊びの防衛論

補助だらけ農家も納税少しする

再審や同じ証拠で無罪とは

死刑廃止妻子殺されても言うか

大田市 藤田軒太楼

趣味問えば仕事とうそぶく気障な奴

石磨く道楽孤老の背が丸い

記念とは戦傷痛む胸の傷

戦友会握手する手がまたも減り

こじらせて置いて都合を聞きに来る

倉敷市 藤井春日

女として泣いては居れぬ夜を泳ぎ

幸福は自分で掴むものを知る

しとど降る雨に過去がうずき出し

占いに頼る女の夜の街

亭主関白会社じゃ只の召使い

神戸市 中村ゆきを

いつになく怒りあらわし知恵おくれ

シンポジウム学者はらかなことを言う

人妻を誘うて帰る流れ星

ロボットに職奪われて赤とんぼ

目高だつて絆で泳ぐよ見てごらん

大阪市 天正千梢

その乾き癒すだけでないコヒー

角度を替えて己に勝たんとす

淋しい日富士山ちよつと見たくなり
寂しさを秘めて笑いこけている
六十年ぬりつぶす絵具選る

東大阪市

斉藤 三十四

肚割って話す男に酒が要る
来世も夫婦になろうね妻が言う
戦後派をさすと時代違います
大学の帽子案山子と応援団
老眼は孫と漫画と仲がよい

笠岡市

松本 忠三

逆さまに歩いてみたい時もあり
世間体がどうのこうのと萩の花
平坦な道で脇見の蹴躓き
あの人がまさかであつて記事となり
見ただけの判で許可したものでない

藤井寺市

吉岡 美房

冗談を団扇で叩く盆おどり
夏休みボブラ並木は風の中
夏休み三日坊主は親ゆずり
反核も竹槍持ったのも世論
日本の夏原爆靖国甲子園

鳥取市

清水 一保

朝露を踏んで見つけた蛙の死
秒針が今日は憎くてならぬ宵
囚われの身となり慌てぬカブト虫

つばめにも親を困らす子が一羽
真直ぐに生きても腋芽は摘み取られ

綾瀬市

大山と金

投票に迷い自民党に入れ

新聞の値上げ新聞書き立てず

大衆化すればゴルフも下卑てくる

一停留所歩いて二十円だけ儲け

梅雨明けや日傘雨傘折りたたみ

柳井市

弘津柳慶

孫膝にお寺さんの御教聞き

故郷を捨てこれからを賭けて見る

愛情の裂け目を孫が埋めてくれ

逆境へ火花となつて燃えている

反省もなく無言のまんまにらみ合い

八尾市

飯田悦郎

高圧に触れたニュースは奴風

鉄塔があつて島には人が居ず

スイッチを開いて見たがすぐ閉める

調節が出来ず命は枯れてゆく

ネオンの中に居るから絵にもなる女

和泉市

西岡洛醉

精いっぱい尺取虫にある気概

定年のそれから駈けまい転ぶまい

昼チャイム鳴つて話の腰が折れ

年金の暮しの明日へそと居る

窓明り洩れて庶民の高笑い

京都市 松川 杜 的

膝一つ崩さず真夏日をお地藏さん

空白の日誌仕合せなのかもしれぬ

本心は赤が着たい六十路かも

肩書だけは立派な先生で

朝顔展チチロ朝蟬聞きながら

竹原市 森 井 菁 居

ベナントの誇りは札束では買えぬ

こつこつと歩けば伸びる棒グラフ

打開策無いまま思惟の旅疲れ

熟年の意地を知ってる縄梯子

セールスをスタート台に戻す朝

大阪市 神夏磯 道 子

今日だけを咲く朝顔に教えられ

弱点を潤滑油として生きる

有難屋三人寄った昼下り

着飾って世辞をまともに受けている

言うことはおまへんやろと他人言う

喜屋川市 宮 尾 あいき

亡子が笑う亡父が笑う蓮の花

口笛へ娘が跳んで行く犬も行く

失恋の余波を愛猫もろに受け

五割引になるまで待とう夏バーゲン

どう割り引いても息子より嫁上位

岡山市 川 端 柳 子

一番を健康と知る不健康

孫にだけ許す呼名のおばあちゃん

凸凹の道にも積木を積む自由

すばらしい足し算産声あげた孫

形見分け亡母の指紋はゆずれない

喜屋川市 柴 田 英壬子

狂い咲き意地悪したくなる白さ

悟りたい心を乱すフーリング

マンションで去就するほど若くなし

送り火やベントツ停っている館

八坂裏万灯ろうに身を正し

東大阪市 竹 中 綾 珠

ここだけの話さつきに聞きました

カレンダーに印をつけて見ずじまい

似顔絵が似過ぎて笑い湧いて来ず

退屈退屈点滴中は寝るとする

此のままで死ねたらなあと思ひ

島根県 神 原 秀 子

かき立てる詩情へ返す波の音

精一杯生きているのに名無草

朝顔よお前はなんで左巻き

誕生石も似合わぬ年となるルビー

石けりの石は不覚にはみ出され

奈良市 森 田 カズエ

まっ先に編集後記読むならい
ゴシップヘスターの妻の無表情

ゴシップに馴れてスターにのしあがり
子にかける夢信号は赤つづく
会長と呼ばれ返事をしおくれる

島根県 大森孝華

絵葉書へ倅せのせて旅日記

真ん中の道を選んで虹を踏む
蟬はいま土用を知らず風の中
洪水になりそう夜の窓たたく
煮つもらぬ話煮つめて夕暮れる

大阪市 西出楓楽

身に合った穴掘れないままに秋
ほどほどでよいとは淋しい言葉だな
未来図の私は元気でお金持ち
ひとごととは劇中劇をみるように
現代の落人かくれ里がない

吹田市 西川景子

新妻の香りはじらういろは坂
藪蚊など目じやないおあつい二人です
白檀の香りに似合うしぐさする
親展はおだやかならぬ女文字
ホディコロン一夜の恋のかくれ蓑

京都市 山本規不風

睡蓮に誘われている慕情

胡瓜もみにある企みは知らぬまま
甲虫威風堂々立派な死

細道に來てから女に逃げられる
二号から見れば本妻価値がない

兵庫縣 河原みのる

人事院同んじ穴のムジナでしょ

一切の米役人よ退いてんか

山みんな針葉樹にしてもて余し

一日に何ンべん阿呆になれば済む

丸潰しにしたかて知れた面目さ

岸和田市 植山武助

いとはんの恋を邪魔しているのれん

先に寝ろ寝ろと軒をかく男

泣き声になるから黙って肩を抱く

せめて賢沢八月の電気代

暇潰しに呼んで麻雀又負ける

岸和田市 島崎富志子

迎え火の子はいつまでも幼なくて

子の夢を叱った心が落ちつかず

涙 泪 涙女の武器は泪

引出しにしまうに惜しい過去と居る

愚痴が出る昏だから閉じておく

岸和田市 原さよ子

カンナ咲く路をパートのペダル踏む
指の怪我十指使える有難さ

小さいことくよくよするなと雲の峰

知恵遅れの親子に好かれ行く炎天

ぼちぼちで結構ですと気をそがれ

岸和田市

芳村狸村

向日葵もお辞儀しているこの暑さ

鰻めし東と西で名が違い

責任を持たない口は軽くなる

建立の墓も大安選ばれる

丑満が過ぎててもくらしある都会

岸和田市

吉水照江

七十を越しても五十肩と言う

油蟬短き生涯泣き続け

仏壇の掃除もすまし蓮の軸

孤独には負けずに生きる老いの坂

ようように朝夕の日ざし秋めいて

岸和田市

古野ひで

句の話になって電話長くなり

脇役を一途に生きてそれでよし

旅衣ぬげばもともとひとりぼち

お金では買えぬ心を友が呉れ

ひとり住居仏の顔をしげしげと

岸和田市

清野こう

人に背を向けて哀しい人ざらい

邪魔になる子がチョコマカとお手伝い

白良浜埋めてピーチの傘の花

共稼ぎ、帰れば犬の甘え声

憧れた都会で墜ちて行く女

和歌山市

内芝登志代

生きているうちは花だと競い合う

デザインより履きよい靴を選るも歳

いたずらな風が運んできた噂

お見舞を積んで酷暑を病んでいる

ゴキブリは嫌われ者とは思ってず

和歌山市

坂口公子

憶病へ四つ切り西瓜を買って来る

嬉しさへ不本意な約束してしまふ

口惜しさも極限に在り戦争展

湯上がりへ窓のレースが揺れ過ぎる

茶柱が立つて老骨ねじを巻く

米子市

石垣花子

半分の胃袋満たす玉子とじ

病室のニュース売店から仕入れ

両の手に幸握って呱呱の声

青空へ心許せぬ山男

まことらしい嘘を聞いているメロン皿

米子市

政岡日枝子

アリ地獄というわながある都市砂漠

波から貰う広い愛の物語

波の塔女のさんげ積み上げる

青空の画布に核の絵描かせない

高級な白粉女多弁なり

米子市 桑原伊都

米子市 青戸田鶴

さい銭の小銭底つく観光地

太棹の語りといきの合うた芸

わら灰のままで火鉢が眠ってる

人の波さけてシーズンオフの旅

さくら貝波がはこんだメッセージ

米子市 寺沢みどり

地図にない国から盆の船が着く

ひまわりの首が傾く原爆忌

傾けてやっと掬えた甕の水

静けさが恋しく留守を買って出る

仕送りの梓でビールの腕も上げ

米子市 野坂なみ

柳にはもう飛びつけぬ古蛙

掌を合やす心に月が満ちて来る

泡一つ水に流して業を積む

年輪へ母美しい老いとなり

道しるべ守り続けて老いの地図

米子市 菅井とも子

母の影踏んで乙女は脱皮する

洗濯の泡がひとつの罪を吸う

子の脚に追われて若さとり戻し

坂道をころがるだけの毯である

灰の中から平和の灯が生れ

老いの砦いつまでもつか波がしら

傾いてみたい気ままな夏の雲

窓際も開きなあった意見出す

しきたりへ語り部の祖母背をのばす

トンボめがね女の年がよみきれぬ

米子市 雑賀美世

水を背に今日も砂漠の旅続く

人柄へ押しつけられたまとめ役

旅立ちへ老母がまとめた荷の重さ

ちようちんの紋まで眠る倉の中

冷房の椅子でホットな二人連れ
町田市 竹内紫鏑

審判が優しく大差にはならず

電卓を出しかたい随想

祝う定年銀行が来る

働き中毒六十路も宿題

半世に沿い切らさぬ誌代

大阪市 黒田真砂

髪染めて夫も明日へかける夢

遠花火想い出巡る母の忌に

同じうそ聞く時心ぬける風

ミニのひざ野良犬にも異様なり

我が影も心の影も孤独なり

大阪市 欄蘭

お気軽にと入ったサラ金の悲劇

補聴器へ世の煩わしさが聞こえて来

頑固さはこうと信じて疑わず

うかつにも高血圧の落し穴

役人の欠伸へ庶民の眼がきびし

大阪市

岡田ふみ

冷夏などと言うた予報官の顔見たい

早起きの朝は一人の時間です

インタビュ―愚問ばかりで腹が立つ

ブラジャーを買う時の姑ほはえまし

妖婦めく鈴虫のメス捨てようか

兵庫県

大江秋月

あげ底の下の空気も買うて来る

里近し一夜泊りの欲しい距離

けちんぼにならざるを得ぬ物価高

風呂へまで喧嘩のつづき持つて孫

受付は美人の方が混んでいた

仙台市

川村映輝

美しく死ぬより生きるむずかしさ

浮動票で当選をして頼りなし

親切に応対して税をとり

悼みながら羨む声もある急死

屑籠は分を弁え隅にあり

守口市

羽原静歩

笹竹に迷う心を見抜かれる

石仏の心に一つの嘘もなし

その若さ零対零が投げている

看板の彩に男が騙される

巣の中の異端者核を抱いている

桜井市

河合茂雄

青い夢抱いて老兵まだ去れず

殿軍をとつて男の名を飾る

憶病な男に飛んだ流れ弾

職安の平の椅子にも職がある

求人のはら配ってる職もある

西宮市

林はつ絵

何げなく母系に続き石当る

化粧してもとじこめきれぬ貧しさよ

指の傷夕方までのきつね雨

風に向くおとこいのちの彩となる

善人は知らない森の魑魅魍魎

西宮市

杉浦婦美子

借衣装汗を気にしてかしこまる

書いて消す波の裁きか砂の文字

賽銭も用意年金だけの旅

やわ肌のおくばに一家支えられ

ひと言が支えとなった気の弱り

松山市

谷真風

上げ底の上に並んだ優越感

冷や奴冷やしそうめん老いの無事

余命まだ祈ることなら出来そうな

鳴く鳥酸素吸入の患者あり

空家へ帰宅仏壇へ水供えとき

諫早市

原田明春

のぞき読みすれば新聞裏返し

行革は大きく善意は隅に二、三行

短所ばかり長所を課長見てくれず

だまされてあげる亭主の下手な嘘

天守閣ないが二DKはわが居城

大阪市

藤田頂留子

道ばたで産地直売ぶどう売る

アメリカの不作捨てられぬパンの耳

ドラマまだ今も昔も色と欲

捨て猫の箱参拝客の見えるとこ

老化などまだまだ般若心経とちらない

新宮市

川上溪水

札束を積みば消えてく罪もある

へソクリがこつそり逃げる大掃除

追い抜いてからはライバルから外し

冷汗の汗は季節を問わずかき

マイペース誰に遠慮のないペース

倉吉市

渡辺独歩

正論の一つを潰す十重二十重

生むときの潮は胸元までみちる

潮騒に愛のむさぼり深くなる

我が家にも時限立法酒煙草

白昼夢地球は小さなシャボン玉

渡辺苦句

蚊に眉間噛まれし貌でいる鏡

扇風機古いぬれでもよく動き

熟女として食べられる水蜜桃

白玉の四角三角吉備団子

勾玉として白玉の茹であがり

鳥神市

森田熊生

子に話す童話は僕の夢も入れ

やわらかい言葉で謎をかけてみる

妻僕に何かいいたいビール抜く

そう言えば私にもある秋の詩

それもそうだがと名案はつとかれ

松江市

梅本登美也

逢えぬ夜のまあるい月がうらめしい

お馴染みの顔と朝顔市で会い

長寿村苦しい寺の台どころ

日傘ふと傾け逢ってはならぬ人

ひと夏のロマンを秘めるパンガロー

出雲市

板垣夢酔

エンゲージリング妻にしてから取り上げる

退社後の飲む約束に励まされ

梅壺を抱いて妻の座安らぎぬ

白足袋の汚れを隠す罪一つ

婿が寝る布団の柄を妻が選る

榎原市

岩井 本蔭棒

三段壁飛び込む僕ととめる僕

国宝の壁でイニシャル傘をさし

戦場の渴きよ今も水の恩

故郷の家いまもかしこし御真影

千年の昔も同じ蟬しぐれ

島根県

梅 みどり

思い出の指輪まわして迎え盆

夕涼み線香花火に膝をよせ

あぶらぜみ鳴いて終戦の日をしのぶ

夕暮れの墓参山鳩ククと鳴く

新盆へ亡父の噂で灯りゆれ

貝塚市

行 天 千 代

形見の帯亡姉と私をつなぐ橋

一年を七日の命蟬の声

檀山へ近し私の砂時計

美しく地に帰りたい髪を梳く

福引でお米当って持て余し

鳥取県

森 田 布 堂

同権の妻にもビール酌いでやり

筆立てに桃のあき缶恥とせず

本店は赤字支店は黒字なり

土俵ぎわ八百長でない足をかけ

片道の仕度で送る霊柩車

倉吉市

野 中 御 前

灯を消せば引き潮らしい高軒

娘の恋は電話線までピンク色

コンタクト鱗のような宝物

うやむやに出来ぬ検査に身が細り

教えないのれんの味を盗む舌

高知県

松 岡 三 吉

猿知恵が生きて平和と申し兼ね

肩書のない人が言う正義論

低姿勢こんな無難な事はない

風鈴は黙って愚痴を聞いている

ママさんに嫌われている夏休み

高知県

赤 川 菊 野

分裂のかけに私欲のうずが巻き

逃げ足のはやい男の標準語

ワイングラス酔えないわけが一つあり

背信を朝の鏡にのぞかれる

バーゲンをあさる女にない個性

浜田市

中 川 幸 一

薄命の相と言われて今年古稀

英雄が居らぬお蔭で平和です

捨て犬に仏心を試される

水道が掘って埋めたらガスが掘る

呆けてからホントの事を口にする

唐津市

仁 部 四 郎

スランプの鍵は小さな虚栄心

スランプに不意打ちをくう妻の留守

自棄酒と知らずに刺身買って待ち

向い風少年辞書を楯にする

病院の廊下一円拾われる

唐津市

田口虹汀

突然に軍歌を歌う妻がいる

月詣で送り迎へは蟬がする

まむしなど喰べて浪花の客となり

一ミリの虫六尺の肌を射る

持国天広目天と迎え塗る

唐津市

浜本久仁於

仏なり神なり八月十五日

同棲を余儀なくされる小鳥籠

落城の色にも染まる天守閣(唐津城)

空耳の風がのこしてゆく旅愁

望郷は少年の日の山囃子

唐津市

木塚素石

爺婆に川の恵みを聞くはたご

恍惚もまた良しとする年になり

朝の膳カラーで話す孫の夢

十五日花火の音と送り火と

水不足蟬の声だけ張りがあり

大阪市

横地雅風

釣竿に魚売っている遊園地

掌に乗る鉢生きねばならぬ花

肩書は無職今年の暑さかな

寝返りは寝酒がほてる熱帯夜

魂胆を知らず降りればラブホテル

島根県

藤原鈴江

大物がねむりこけてた倉の中

友よりのシュロ竹夏の風を入れ

紅い陽が落ちる戦死の亡夫想う

四十年未亡人として根を張り枝を張り

主導権渡して小さく小さくいる

島根県

松本はるみ

身をふせてニヒルな草やおじぎ草

あの人の桔梗に寄せる花ことば

ロボットが戦争ごっこで死に急ぐ

ホワイトカラー夏の女をもてあます

押し花の朝顔に想い沈めしか

大阪市

長谷川春蘭

揚羽蝶君の前身毛虫とか

華麗なる装い金魚にあるなやみ

下っぱにしてやられたり黒田節

今日も亦昨日と変らない鏡

一点の重さ一点の泣き笑い

藤井寺市

中原比呂志

絵日記にトンボクワガタ姿消し

引き受ける盆の留守番マイホーム

好かれてる顔を家では作らない
色眼鏡かけた世間を信じ込み
強気でもトランペットはすぐ吹けぬ

西宮市

藤村宏子

慢心が生んだ失敗だと悟る
人恋うる眸と弥勒さまむすぶ糸
背景に城山のある揚花火
海風いで心バランスくずしけり
どの人も尊重したいわだかまり

兵庫県

中田白李

CMを口に孫は箸をとる
みな同じ使用注意の薬のむ
終着がまだまだ見えぬ古稀の声
今日遭った人と長い電話する
なぜこうも女は喪服が似合うのか

枚方市

栗林光夫

うつし絵のはがれぬままの昼寝顔
あてもんをめくる心はずませて
リリアンの編ひもながくながく出る
みずからの噴水に濡れ鶴と亀
ミサイルを割箸鉄砲で撃ち落とせ

八尾市

山下みつる

ふりしぼる汗へ悪魔は寄り付けず
竹刀だこ親にないもの作り出し
古代から招かれ御陵めぐりする

ごますりが適当にいる宮づかえ
張り変えた襖へ孫の手がのびる

大阪市

鈴木節子

ふるさとに絆深める墓掃除
他人行儀に送金してる子が帰る
息子やっぱり教育パパになつてい
へそくりは結局子供が持つてゆき
夫離れもある日のためしておこつ

島根県

岸本輝水

仲人が来て家中が耳になり
愚痴だけは達者で涙もろい老母
親切を借りたまんまで俄雨
老眼鏡糸が合わない針の穴
能面のような女で地獄耳

尼崎市

奥山美智子

風涼し過去には触れぬことにする
やるせないもろい殻にこもりきり
アリとキリギリスわたしはどちらかと思
い般若面うだる暑さにずれてくる
星くずの数ほど夢を抱いている

大阪市

杉本智慧子

北アルプス（五句）

御来光連続写真の腕振
九時消灯高所の動悸静まらぬ
こまくさよお前に会いに遙々と

帰り途自信家もバスタ貼っている
雲入れて山の写真が出来上り

東大阪市

奥山 弥山人

スクラムで赤字を防ぐ夫婦独楽

虫干しの今でも地味と母は言う

義太夫のさわり前歯がゆるぎ出し

職安で写したメモをたどる汗

歯の痛みせめてと母の肩をもみ

富田林市

中村 優

病院のナースの白衣に慈母の彩

病院に社長の威厳通じない

もう世辞は通用しない三年目

竹光の斬れ味斬られ役になってやる

一票が次第にやせた社会主義

富田林市

藤田 泰子

封筒の忘れな草が甦る

夕立が過ぎて聞こえる祭笛

遠ざかる後姿の母を追う

とび出した蛙が探す水溜り

お見舞は黙って傍に居てあげる

羽咋市

三宅 ろ亭

農繁を前にのど自慢に踊り自慢

のど自慢先ず町会長が指名され

稗取りの暑さへ鳶の高く舞う

コシヒカリ味変わらずに端境期

盆帰省西瓜とりまく大きな輪

浜田市

佐々木 裕

アメダスが吐いた山陰豪雨の禍

命日の亡父に捧げる酒の唄

人生にふるさと遠き罪と罰

妻の背いかり残して花を分け

ハンドルを妻に託した幸に乗る

出雲市

園山 多賀子

百日紅勲章のない墓洗う

紫陽花の移り気不倫を意識する

彩のない影絵は哀しい詩になる

月昇るラストダンスを踊ろうか

肩寄せて生きる倅せだつてある

出雲市

吉岡 きみえ

髪染めて女に虚偽の愛つづく

水がめを伏せて老母の世が終る

SOS実家の母に打ちたがり

日ぐらしが殊更悲しい災害地

漁り火が遠く届かぬ片便り

境港市

細木 歳栄

鳥の影さえ静止池の面

隠居した日から白髪が増えたよう

新調の着物が外出せきたてる

ハミングで貧乏神を追い返えす

肘張ってまだまだ邪魔をするつもり

大阪府 大野 武太

透き通る生命を見かけてメダカ孵化

傘寿なる恩師に身体気遣われ

元氣かや恩師の声のあたたかし

悪性じやおまへん半歳医者通い

割りきるとぶつつり悩み消えていた

大阪府 山根 いつを

にべもなくキップ器械に検べられ

賑やかな祭淋しい人も住む

ふり向くとこんもり丸い恋の山

末の娘をおいしい惜しいでとうを立て

慈雨しきり何のうちではバケツ受け

羽曳野市 佐野 白水

もろてみて成る程五百円貨邪魔になり

ごまかしの出来ぬ二二ンが四の人生

万福寺の鐘に驚きトンボ翔び

働きの良い順に鶴匠綱を解き

孫の旅炎暑の我が家へ雪だより

河内長野市 井上 喜醉

反骨を忘れた男庭いじり

人間の虫干し砂丘の日向ぼこ

井池で値切って夫婦で笑われる

鉢植に当たった子供のホームラン

スイスイと行かず目高に笑われる

島根県 木村 はじめ

老妻が教育勅語丸暗記

老いて尚生甲斐趣味のある暮し

福祉後退余生プランを立て直し

一円玉昨日のままでの洗面所

ブライドは捨ててきました老いの旅

長野県 藤後 実男

特徴はホクロの位置を妻が知り

北向きと言っておれない船の旅

妻に似てだんだん不安になって来る

それでもと見れば阪神勝っていた

定年へ金にならない役が来る

七尾市 松高 秀峰

階段の足音忍者のような姑

ほどほどの刺激があつて今日の地位

袖の下知らぬ課長で左遷され

貧乏神ノックもなしに入り込み

内職の妻セールの紅をつけ

岡山県 岩道 博友

未来像描かぬまに老いの坂

帰る事辛抱に耐え山降りる

旅の留守株価が下げたまま置かれ

夫婦独楽一票別々持って舞い

負け犬で帰ってシャワー浴びている

岡山県 井上 柳五郎

力感が漲るソテツ若葉伸ぶ

また蚊に生血施す墓掃除

桔梗咲くここの妻女はカンナなり

きようはまた鬼女の面妻はつけ

偏差値を孫の通知表から覚え

尼崎市 西村 かすみ

恍惚の父にもあつた光る過去

子をひとり亡くしてからの花が好き

逆らわぬ妻で小さな秘密持つ

ハイミスの迷いグラスでほしきれず

社説など読まぬ女と無事に住み

尼崎市 伊藤 春子

ゆつくりと迷いがさめた団扇風

社内のざわめき人事異動があるらしい

適齢期占いにこる親がいる

貸し借りへ思い違いのわだかまり

荒れる子の心の底は泣いている

尼崎市 角野 かず子

祝福をされた前途が揺れてくる

つぶやきの聞こえる手紙底に置く

鍵っ子が鉛筆の先とがらせる

縦のもの横にもせずにお年頃

姐が許してやれとくり返す

大阪市 中西 兼治郎

右左飛んでも屋根で会う雀

命まだ二年は持つという定期

やかましい程よく稼ぐパチンコ屋
サラ金の悲劇無心の子に及び

兵庫県 梅鈴庵 朝不酔改め翁

冷や麦で鼻の頭を叩かれた

もう言うな言うたらうそが皆はげる

悪口も冗談冗談と右手上げ

二次会の言い訳友になすりつけ

神戸市 仲 どんたく

ツメあとを残して千秋楽の梅雨

逆らわぬ主義の夫で外で飲み

古稀の坂安心立命まだ見えず

草木染べんがら格子に添うて佇ち

姫路市 大原 葉香

もう値上げにも慣れ節煙ゆるみかけ

病窓の蟬健康を鳴き誇り

冷房の適温病室有難し

譲る席断わられたる目のやり場

高槻市 田崎 あき子

稲妻を怖がる女に停電し

大家族の愚痴を羨む核家族

病床の胸に浸み入る子の情け

追憶の海に漂う好きな人

大阪市 鍛原 千里

水中花虹のしずくを待っている

逃げ道を先に女は探しとく

鶴千羽折っても願いはただひとつ
台風のきざしか夫無口なる

交野市

山本 テルミ

給料前有り金出しあう共稼ぎ
八時間とにかく眠る自己管理
その艶がとてほしいさくらんぼ
はあちゃんの方がもう眠い童話

枚方市

稲葉 星斗

健康に感謝し残暑生ビール
歌劇見る女しばし夢を追い
宝塚男につらい招待券
夏ばてに三十五度がつづく日々

島根県

松本文子

ダンボールに善意をつめて送り出し
水害の瓦礫の中をへりが飛ぶ
地藏さん花を貰うた日も笑顔
四十の女心は傷だらけ

島根県

堀江 百代

湯上りの硝子にうつるシルエット
早起きで三文以上の得もらう
夏の夜にきれいな星にする願い
羽目はずす機会のあるも夏休み

米子市

沢田 千春

白桃が一つこがる暗い部屋
けしごむの私語が聞える層の中

週末も休めぬ靴をはいて出る
過去捨てて焼いた手紙の灰の色

兵庫県

奥野 テル

夢だけで終った恋の古日記
働ける幸せ老いを忘れさせ
流行を追う金策が生む悲劇
迎え火に孫も虫がご開け放し

和泉市

岡井 やすお

臨調へ素直になったり無視したり
麻酔科で金の感覚麻痺し出す
この猛暑はくそ笑んでる人も居る
底力最後に逆転して見せる

豊中市

田中正坊

俄雨赤信号が長過ぎる
軍拡論君が鉄砲かつぐのか
亡妻恋いし北国の宿ひとり居て
無神論者妻の遺骨に香を炷く

加賀市

細呂木 魯木

在りし日の部屋に入って独り言
稲穂波リズムにのつてる日本の美
遠ざかり近づく町をつなぐ汽車

奈良県

宮川 古都路

そよ風に浜の銀波は月砕く
一喜一憂林間学校へ空模様
いたずらに上げた拳のやりどころ

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

金井文秋

コマーシャルの洪水溺れてなるものか

西出楓楽

みざる、きかざるといふわけにはいきませ
んから、選択の目を養つて居ります。

幸か不幸か後記を先に読むという

谷垣史好

書くのに気が重い時もありますが、フアン
がいると言ふことは有難いことです。

じれったい時計と思う妻の留守

堀江正朗

夕飯までには帰りますと出て行つた妻が、
仲々帰らない。この時計止つてゐるのかな。

道草と言ふまい青春は子等のもの

榎本吐来

物事に熱中する。それが出世への遠回りだ
あつてもいいではないか。いい思い出がいっ
までも残るんだ。

あさがおの朝の素顔を羨めり

西山幸

すがすがしい朝顔の素顔。わたしもこんな
気分でもない居たいと思ふ。

満腹の果て社会面狂いだす

時末一灯

物があふ余つて居るのだが、肝心なところ
が足りないんですな。

妥協して自画像汚してはならず

小西雄々

どんな条件を出して来ようが、妥協などす
るものか。俺の男がすたるよ。

ステテコへ簀から漏れた冷奴

久家代仕男

身辺に起こるどんなささいなことでも、句
になると言ふ見本のような句だ。

正直に生きて投票票のらす

舟木与根一

政治の腐敗をいやという程見せつけられ
ば、誰に投票しても同じだという氣になりま
すよ。

案内状なまの温みをつけ加え

天正千梢

印刷した案内状であつても、ちよつとした
主催者の添え書が、どんなに心を和ますもの
か、ひとをそらさぬ氣くばりが必要ですね。

老夫婦とんちんかんでめでたけれ

松本忠三

もの忘れもひどくなり、耳も大分遠くなつ
た。時々とんちんかんの問答もあるようだ
が、金婚も無事に済ませました。

似合つても似合わなくともダイヤです

植山武助

高価な品を持つてゐるというだけで満足感
があるようです。

嫁起きるまでを我慢の床の中

清野こう

嫁に氣をつかう。時代も変りました。
幸は少し欠けてる方がよい

垂井千尋子

おみくじも大吉より末吉の方がよいそつで
す。満つるは欠けるの元でござからね。
争つて得た椅子ときどきささるとげ

平田実男

ライバルの怨念かも知れませんが。氣弱にな
つたら落とされますよ。

いつ封を切ります棚のナポレオン

松岡三吉

結婚記念日にでも封を切りますか。
合格と思う普通の夫婦仲

川上溪水

たいして出世も出来ぬ夫。空氣のように思
われていても不満もない妻。それでいいの
ではないですか。

老人会色とりどりの葉のみ

松高秀峰

磯の香に寿命が延びる街育ち

玉置重人

結果論ばかりが母をかきたてる
忍従の女が練つてゐる謀反

高橋操子
渡辺独歩

自選集

山内静水

新岡回天子

四十年あきも飽かれず回す独楽
畠で喰う二番生りの味
拍手バラバラ何が多数決
がん首を揃え急援押しかける
ご無沙汰を詫びれば直ちに來る手紙

金井文秋

月原宵明

コマーシャルの暗示にかかり買わされる
知ってることを知らんふりして聞いてあげ
目覚し時計の替りがやれる齡になる
植木が嫌う雑草のたくましさ
ごみ箱にある情報 of 落ちこぼれ

市場没食子

本田恵二郎

悔いのない余生へボケのさあきざし
未来図も頭も禿げて淋し酒
背も鼻も寸詰りだが老妻達者
病院へ行くので朝をざわつかせ
不良という僕にもあった少年期

西欧の土産は買いたないアンカレジ
真白なアラスカテレビに出る寒さ
突き上げるように氷山峰つづき
見えぬ世界飛行機飛んでいるのかな
白がいがいクマは寒暖計等我知らず
ある視界から盗まれているサイン
慌てて裸を想いベルに佇つ
くちなしの白よ仏の齡をよむ
定年へ昭和一桁あわて出す
好き勝手言えば夫婦も元他人
役一つ終えたら次が待ち構え
老骨の肩にめり込むほどの役
重い役さも軽そうな顔作り
七十の手習い我流を押し通す
もしも無重力になれたら楽しから

黒川 紫 香

美しい花あり僕は名も知らず
まだ歩けますかと互いに歳かばう
目玉くるくる出番となった雨蛙
加茂川で比叡の暮れを見て過す
みようとにはなれぬ二人で酒を酌む

正 本 水 客

他人どうし見込違いを大声に
男の子まっすぐ道を歩かない
ひとりの夜意外なところへ雨が洩り
喪の家の水飲みにきた台所
優越感押さえて返事待っている

若 柳 潮 花

お茶漬けの昼が済んだらごろ寝する
山百合へ霧の雫が降りてくる
すだれ巻く指がきれいな紗の単衣
名刀が冴えたら女近寄らぬ
三度目という正直が図にあたる

尼 緑 之 助

象牙の塔地獄の沙汰も試験済
雑草に助けは要らぬ大水害
審美眼本音は不変裸婦の像
亡妻の小物今更捨てられず
亡父に似て来たなお盆の合掌に

河 村 日 満

入 院

まぼろしの病にやせる十余キロ
真夜中の蘇生に妻の顔がある
秒を読みきったひと夜が明けかかり
声かけてわかつてもらう面変り
死にかけていてもジョークは忘れない

工 藤 甲 吉

参議院曲学阿世当選し
明治からみると普通でない普通
幸福を結局逃がす二心
モノローのヒップのような西瓜抱く
芸術的に芸術的にストーリーップ

大 矢 十 郎

日本名何故つけられぬ日本製
姿まで写る鏡で尚怖い
一人だけ死んで戴き度い次点
税金のかからぬ徳のありがたさ
耳鼻眼科小指の爪の使い道

野 村 太 茂 津

一ぬけた奴は窮鳥かも知れぬ
日高川も渡りかねない火の女
如意棒は一本でよいペン惑う
人間丸出しやと男を取り戻す
完敗や偏差値ばかり考える

川柳太平記 (65)

川柳の群像

西田 当 百

東 野 大 八

岸本水府の恩師であり、「番傘」の産みの親でもある西田当百は、明治四年二月福井県小浜市の魚商牧野作兵衛三男嘉吉として生れた。家業不振のため京都に移り住み、小学校を了えると木綿問屋の丁稚奉公を手始めに印刷工、番傘屋や背負呉服の行商などを経て二十歳の頃、堂島の大阪毎日新聞社の校正係となった。

二十六歳の時、堺市の染物商西田家の養子となったが、川柳に関心を持ったのは新聞校正の仕事で柳樽に行きあったためという。時に三十五歳（明治39年）とあるから川柳人としては遅い方だ。修業は各新聞柳壇への投稿——笈摺で出るは涙の渴れた頃——当百が処女作の部類に入るが、つぎの句も同じ

——鞍替は深み深みへ落ちて行き 当百
新聞社の校正というのは、ペンや筆、鉛筆で書かれた生原稿を活字にしたのと引き合せ誤字脱字、用語の不備を正すことなのだが、大正二年一月「番傘」を創刊した頃は、校正部副部長だったさうだから、柳誌の発行にはうってつけで、同僚に番傘同人となる馬場緑天がいたことも幸いだった。

ともあれ当百にとっては、年少から世間へ出て苦労したこと、校正係として文章や文字に成熟し、その活字の底から新たな世相や政治、経済等の実相にふれる余徳等もプラスして、彼の川柳作品は老成にして軽妙な、いわゆる当百調を生み出す基盤が形づくられたと考えてもよさそうだ。

当百とは俗称天保銭のことで、当百の刻印のあるこの穴あき銭は、百文のつもりで世に出ながら八十文の価値しかない。よって少々足りない人間の俗称にも用いられた。当百とは随って人間西田嘉吉の処世観が、柳味を帯びて自嘲するといった諷意にもとれる。もともともこの頃の当百の身辺には、川柳人の六厘坊、七厘坊（日車）、三厘坊（半文銭）がいたことも故なしとしない。

明治四十二年夏、今井卯木が大阪へ来住したのを機に花岡百樹、渡辺虹衣を語らい、当百、卯木とともに同年九月関西川柳社を創立した。この設立は岐阜の川柳誌「青柳」（田中蛙骨主宰）の編集を引受けたのが動機とみられる（本稿58回参照）今井卯木著の「川柳江戸砂子」（明治44年刊）の編集校訂はすべて当百が担当したことは有名である。しかし柳誌「青柳」の廃刊で、有名無実となった関西川柳社は、かくて自ずと在阪川柳人の意向に副っての川柳誌「番傘」の発刊となった。

川柳誌「番傘」の創刊は大正二年一月十五日付であるが、右に記したようなムードの発刊だけに、発刊の辞もなければ、祝辞もなく同人名も記されておらず、非売品ただ代表格の当百が小さい横つづりの裏表紙に

「こんなものを出すことにした ト百」

とあるだけである。そして断り書にこうある

▽番傘は二カ月に一度出すやら二度出すやらハッキリせず氣に向いた時に出す

▽番傘は川柳家に進呈する雑誌也

▽番傘に寄付金でもしてやろうとの篤志家があれば喜んでおうける

確たる同人名がないので出句者を並べると

当百、五葉、半文銭、蚊象、水府、力好、常坊、緑天その他を入れて十四名である。その冒頭の一句が

——上欄屋へいへいへいと逆らはず 当百

堀口堯人の番傘創刊に関する名解説を借りるまでもなく、この当百の巻頭の一句がよく

産ぶ声をあげた非売品の番傘第一号誌の性格を遺憾なく示している。

——上欄屋酌ぐのではなく盛るの也 当百

「へいへいへいは、その接客態度の描写であるが、姿を写して心に至り、さらに店の雰囲気まで句わせる表現力をもつ一句である。

これが我々の大阪の川柳であり、「番傘」はこんな句風でいくことを巻頭に表示した一句でもあった。」（ふあうすと）明治川柳考の三

明治当百調・堀口堯人

「西田当百は『大阪に於て大阪を詠わん』

との方針の下に『こんなものを出すことにし

た』『番傘』であつた。彼にはことさらな川

柳論の持ち合せはなかつたようであるが「句をもつて尊しと成す」のが、彼の川柳論ではなかつたであらうか。それは「番傘」という

よりも関西川柳界の感觸であり、そのことが

日本現代川柳の黎明を告げる声でもあつたのである。」（構造社刊川柳全集・西田当百・堀

口堯人著）

作句第一主義の当百の作品は、なめらか調のなかに多分にロマン溢れる物語性をその句

の底に秘めていた。

——まだ見えた頃の話で肩をもみ 当百

——

——搦手の闇へ落ちゆく蓑二つ 当百

——

——ばくち場へ探しあぐんだ母がくる 当百

——

——そうかと思うと当百の柳界引退後の大正十五年に出た輝文館刊の明治大正時事絵川柳（絵勝平・鳩甫）の当百時事吟にしても

——

——日比谷から蟻殻町へ髯の客 当百

——

——雨声会文士晝間の態たらく 当百

——

（雨声会は明治期の文士の団体で、時の西園寺首相が招待した（明治44年）の風刺吟）などは東京側の剣花坊、久良伎とて、なめらか調の当百吟に対し、はるかに夾雜物が多か

つたし、よみが浅いと堯人は指摘する。

昭和三年二月定価八十銭の「川柳当百集」

が番傘から発刊された。単行本としての個人句集は番傘川柳社の処女出版である。選句は

水府だが、その自序に当百はこう記す――

「少年にして名を成すことの不幸なる如く私は周囲の空氣、時の狀態から僥倖的に實質以上になを得たもので、自分自身の為にもこ

れは決して幸福事ではなかつた。（中略）こ

の句集若し何等の価値なく、川柳界より当百の名を抹消し去らるるとも少しも遺憾はない」

大正五年当百は川柳界からの引退を宣言した。そして昭和十九年六月三十日享年七三で

病没するまでの二十八年間、謡曲宝生流の師匠として氣ままに過した。

師も語らず、弟子も語らず、大いなる明治・大正期の川柳界の実力者が、なぜ未練氣もなく川柳を捨て去つたのか、それは今もって

謎である。

★次回は「松村柳珍堂」

誹風柳多留廿六篇研究 (十三丁)

小野 真孝・本多 正範・石田 成佳
大屋 六郎・八木 敬一・鈴木 黄
石田 晋一・南 得二・多田 光

故岡田 甫

201 古今武綴の建立ハ九品仏

小野〓九品仏は、九品山浄真寺にあり、『江戸名所図会』によれば、珂願上人が十八歳の折、深川霊岸寺の傍に庵室を設けて念仏修行をはじめ、その後寛文四年より七年に至る四年間に九品の阿弥陀如来九体を彫り上げた。各座像にして一丈六尺あり、霊岸寺に安置してあったが洪波のために破られ、後延宝六年に現在の地（奥沢村）に移されたという。つまり、この九品仏は古は下総に、今は武蔵に安置してあり、これを古今無双にかけて詠んだもの。

六道を真直に行く九品ぶつ

六七・30

石田成〓賛。古今無双の秀句。
多田〓賛。
岡田〓同。

202 古近江としらす弾てるひんのよさ

小野〓古近江は、『川柳大辞典』によれば、「三味線打の名人石村源左衛門の作った三味線の総称……」とあり、三味線の名器であり、相当高価なものであったらしい。
普通の人なら

古近江をかりては来たが気がつまり

安元梅

で、うっかり弾きもならぬが、良家に育つて名器といわれる三味線を常に身近に備えてい

れば、古近江だとして臆することもあるまい。或いは弾き手は次の如くか？

古近江で岡崎をひく御ひめさま

一一・30

八木〓賛。ストラディバリウス級。

多田〓賛。三味線が「古近江」というだけでなく、茶碗は「井戸茶碗」というように、すべて名器ばかり使っているという境遇の人であらう。

岡田〓お姫様のたぐい。

203 奥様と車座に居るおつれく

小野〓奥様、おつれづれと敬称がつけてあるからには、高貴のことを詠んだものと思われ

る。とすれば、姫路城主榊原候のこととしてよからう。

播州姫路十五万石の城主、榊原式部大輔は吉原に通いつめ、三浦屋のお職十代目高尾を身請け、この事が幕府の耳に入り越後高田に移封させられたという。

この故事を詠んだ句と考えるが。

南〓御公務繁多で、或いはいつもまばかりにいらつしやる殿様が、「おつれづれ」に奥様と車座で団らんの、つまりのんびりして居られるのではないでしょうか。

多田〓南説賛。

岡田〓大名邸の奥御殿、徒然のまま奥様を上座に奥女中らを集めて車座になり、よもやま話に花を咲かせてるのである。殿様は加わらず。殿様が列座では笑いも出来ぬ。

204 国家老わつちかおもふまゝにせず

小野〓国家老の句、本篇二丁に多出。殿様の御寵愛を笠に着るお妾の思ふままにはさせぬのは、国家老ならではであらう。

国家老べんべこべんを先ッおさへ

八木〓賛。「わつち」でお妾の素性を暗示している。

屋敷中わつちが思ふままにする 一五・30

南〓賛。

政道にわつちが有つて国がもめ

四九・6

御国迄わつちくがひびく也

五四・7

多田〓賛。

岡田〓同。

205 さよ衣つれくとした返事也

小野〓「さなきだに重きが上のさよ衣わかつまならぬつまな重ねそ」の歌で、顔世御前が高師直の横恋慕を退けたのを詠んだもの。

尚「つれく草」は兼好法師の著わすところであり、法師は師直の艶文の代筆をしたという説もあり、そのつれくにもかけてある。さよころもやつとはんじてはらを立

二二・9

本多〓『太平記』巻二十一に兼好に代書させたことが見えてゐる。本句は『太平記』より詠まれた句と言えよう。

多田〓太平記説賛。

岡田〓句の「つれく」は兼好筆の艶書代筆をきかせ、つれない意をふくめてある。

206 七月の節句ハ酒が無銘也

小野〓節句〓節日、即ち人日（一月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕

（七月七日）、重陽（九月九日）などの式日。ここに挙げたものを五節句という。

上巳は桃の酒、端午は菖蒲酒、重陽は菊酒とそれぞれの節句に用いる酒には銘があり、効能もあるが、七月の酒には特別の呼び名はない。理詰め御説ごもつともみたくない句である。

多田〓賛。

岡田〓同。

〈季刊古川柳〉創刊十周年

記念会員募集

当会は、江戸の川柳や文芸及び風俗を研究する団体です。この度、〈季刊古川柳〉創刊十周年を記念して、新に同好の士を求めることにしました。現代川柳に興味をお持ちの方には、そのルーツを、入会御希望の方は、左記に御連絡下さい。年会費は四千円です。

〒419-03 静岡県富士郡芝川町西山

一四一七一二

川柳雑俳研究会

振替口座・横浜三十七四五九番
電話（〇五四四六五）〇二六四番



歳月や

ゆるし合うより他はなし

和歌山市 西山 幸

路郎賞進優秀作第一席

水甕があふれて朝を疑わぬ

米子市 八木 千代

同第二席

馴染客犬へも土産買って来る

大阪市 川口 弘生

路郎賞候補作品

正本 水客

一流でないから皆んな寄ってくる

妹尾 春江

乳呑児は横目で母とにらみ合う

樫谷 寿馬

辞書を繰るたんびアカサタナハマヤラワ

松川 杜的

冷たさをこよなく愛す冬の天

錦織 文子

思考ゼロ雪しんと降りつみぬ

高杉 鬼遊

善人になるのは明日からでよい

高橋 夕花

西山 幸 略歴

昭和50年3月頃より新聞柳壇に投句
選者野村太茂津先生から手ほどきを受
け、6月「川柳わかやま」に入会。併
せて、和歌山七面句会で西尾栗先生の
ご指導を受ける。

昭和52年度川柳塔賞受賞。53年1月
菊沢小松園、川村好郎先生のご推薦で
川柳塔社同人となり現在に至る。
和歌山市美園町2-1 21

西尾 栗

今年は殊の外残暑きびしい9月1日
常任理事会において緊張の内に路郎賞
並に川柳塔賞の決定をみた。五人の選
者の内2人の選者が今回の路郎賞に当
る句を最高に推していたから文句はな
かったが、それでも色々討議を重ねら
れて路郎賞が決定されたのだから、お
めでたい。

受賞句は、わが川柳塔が指向する思
師路郎の人間陶冶の詩に一步も二歩も
近づいている句であると思う。嘗て恩
師のよめる「寝転べば畳一帖ふさぐの
み」が思い出される。作者はこの両親を
亡くされ、孤独な生活をしていられる
と聞く。ご精進あらんことを祈る。

髪切つてわけは何もないと言う
村上山鶴子
良慶さんも男 妻子がいてはった

《推薦句》

歲月やゆるし合うより他はなし 西山 幸

橋高 薫風

エリートがコーヒーを飲む冷たい眼

笛太鼓だんだん高く月を上げ 飯田 悦郎
ふんふんと聞かれて嘘が重くなる 木塚 素石

時末 一灯

これからも

西山 幸

受賞の朗報を亡父母に報告、静かに喜びを噛みしめています。独り生きる柵のなかで、意気地の無い毎日の繰り返しの私を温かく支え続け、叱り励まして下さる太茂津先生はじめ、皆々様に心からお礼申し上げます。

もう川柳から逃げられなくなりました。今日から、また、新しい一步を踏み出そうとの思いへ、これからも御指導、御鞭撻を賜わります様。

有難うございました。

患者さん待たせておいて句の話 原 さよ子
似合わないかも知れないがVサイン

芯までは炎になれぬいちごです 植山 武助
隠し芸派手に左遷とは見せず 松原 寿子
愚痴こぼすかわりに妻はしげさ節 小林由多香

《推薦句》

馴染客犬へも土産買って来る 堀江 正朗

若 柳 潮 花

美しい奥さんたつぷり昼寝して 高橋 夕花
腕を組むことで始まる十二月 小出 智子
青春の夢を化石にして尼僧 飯田 悦郎
秒針が余命を刻む田を描く 太田 亀甲
職人が鉋を研いだ雨の午後 清水 健司
千羽目の鶴折る指が疼きたす 西山 幸
俸のまん中へんで欠伸する 高杉 鬼遊
芯までは炎になれぬいちごです 松原 寿子
三つ目の辻で迷いが深くなる 谷垣 史好

《推薦句》

水甕があふれて朝を疑わぬ 八木 千代

黒 川 紫 香

もうあかん社長印鑑持って逃げ 中村ゆきを
愛のない女が紙幣の皺伸はす 園山多賀子
箸紙が喋りつづける旅の夢 福本 英子

父の座に父が座っている安堵 川崎 秋女
秒針はいじわる側にいたいのに 松原 寿子
嫁ぐ娘に喧嘩の仕方教えとく 安藤寿美子
自動ドアすこし機転がききすぎる

薬屋でうんこのかたさなど申し 西山 幸
猫のひげ何かいたずらする気だな 高杉 鬼遊

《推薦句》

いつとなく目あてを決めたかたつむり 谷垣 史好

野村 太茂津

カンナ炎ゆ私も朱い服を着る 宮尾あいき
仲間意識一人のユダが突き出せぬ

内堀に女のいくさ埋めてある 川口 弘生
犯罪の陰の部分には僕もある 浦野 和子
恍惚の顔でアンパン食うてみる 森脇 善太
時折りは悔いがないようになまけてる 中川 幸一
帰したくないので喋りつづけている 福本 英子

後向きになると本当が話せそう 小出 智子
俸のまん中へんで欠伸する 岩本雀踊子
高杉 鬼遊

《推薦句》

歲月やゆるし合うより他はなし 西山 幸



渡し舟

みんないい顔して渡る

米子市 澤田千春

澤田千春 柳歴
昭和56年2月 キヤラ木川柳会一員と
してスタート
昭和56年4月 川柳塔誌友
昭和58年9月より同人
米子市富士見町六五 主婦

川柳塔賞準優秀作第一席

春夏秋冬 草の匂いの母でいる

和歌山県 寺田裕美

川柳塔賞候補作品

香川 酔々

知るまいな女が酒を酌む心 赤木 和子

二度咲きの花が幸せくれそうて 日阪 秋子

口にする不幸が嘘のような指 片上 明水

目玉焼今朝は目玉が片寄って 葛 幸子

罪なこと書いて女は返事待つ 春城 年代

年ですぬ薬出すには出しますが 山田 保蔵

うつらうつらと昔駿馬であった夢 藤井 高子

〈準推薦句〉

待ち呆け私の汽車は又来ない

林 荒介

〈準推薦句〉

花言葉持たない花を摘んでいる

有働 芳仙

〈推薦句〉

花氷女の墓標かも知れぬ

竹内花代子

高杉 鬼遊

こだわりを捨ててダルマは起き上がる

同第二席

竹原市 石原淑子

なんぼでも入る堪忍袋縫う

原田凡太郎

保険屋の粘り夫を死なす気か

羽津川公乃

勲八等以下同文のモーニング

赤木 和子

葬式は生きてる人のためにゆく

松下 蕉露

はがき一葉人恋う胸に灯をともす

森脇 和子

母のやさしさ父のきびしさ海が好き

伊藤 春子

続柄にすべてをあずけ妻と書く 西口いわる

影ぼうしお前はシャンとして歩け

浜本 ちよ

〈準備薦句〉

取れたボタンと何処にでもある話する

市川 鱈魚

喜びのことは

澤田 千春

柳歴も浅く未熟な私が川柳塔賞をいただく等、全く予期していませんでした。

賞の報らせを早速川柳の師、八木千代さんに報告し『立派な賞をおめでと〜』

と喜んでいただき涙、涙の感激、あふれる涙をとめることができませんでした。

この賞は、くじけそうな私を見離すことなく、何時も川柳の心を教え続けて下さった八木千代さんはじめ、米子キアラ木

川柳会の皆様、よき友のお蔭と感謝の気持ちで一杯です。本当に有難うございました。

〈推薦句〉

裏方の最後の釘で幕があき

椎尾 公子

西田 柳宏子

仕合せな余韻で白い菊活けるとび出してみても我家と同じ壁

紀市 郁栄

満々の自信助走を怠らす

藤田 泰子

雑音に惑わぬ妻の坐りタコ

寺田 裕美

そっとしておこう泣虫の母だから

高杉 千歩

貧しさに十本の指みな使う

中尾まゆみ

呱呱の声聞いてお茶漬欲しくなる

林 荒介

母たちの絵具にいくさの色はない

〈推薦句〉

すばらしい出会いを神様からもらう

森脇 和子

谷垣 史好

春夏秋冬 草の匂いの母でいる

田中 晴子

〈推薦句〉

寺田 裕美

添い寝して子と同じだけ眠りこけ

上鈴木春枝

再軍備今は宛名のないハガキ

田中 叶

持ち物がひとつ増えたの定期券

中尾まゆみ

素っ裸さらしたような布団干す

松本はるみ

断水の蛇口おんなは眠くなり

中原 颯人

誤字あて字言いたい事はみんな言う

越村 枯梢

〈推薦句〉

渡し舟みんないい顔して渡る

澤田 千春

〈推薦句〉

河内 天笑

抽出しの上から順に好きなもの

片上 明水

出墨の夫へ妻のバント策

矢野 佳雲

心もち会釈で通る露地の幅

日坂 秋子

夕西やさしくなっていく仁王

高杉 千歩

かな便りその行間に母がいる

西村かすみ

寺田 裕美

藤井 高子

手を洗うように心も洗いたい

浜本 ちよ

なりゆきの嘘にだんだん責められる

春城 年代

〈推薦句〉

こだわりを捨ててダルマは起き上がる

石原 淑子

水煙抄

黒川 紫香 選

尼崎市 田中 晴子

海沿いの雑貨屋花も売っている
繰り言を素直にきけるいわし雲
久闊へ一オクターブ高い声
文机夢二のポーズで肘をつく
走らねば主役の座から降ろされる

藤井寺市 赤木 和子

ささやかな幸せ目と目が合っただけ
そばに居るだけで弾んでいる心
冗談のなかへ本音を置いてくる
その笑顔いつか私のものにする
秋日和しつべ返しを企てる

八尾市 高杉 千歩

年金の軽さすんなり瘦せて秋
朝顔の数も日記に夏果てる
お料理の上手な嫁をまちわびる
縄電車親のない子が曳いて来る
死ぬときは孤り笑顔で飴を噛む

西宮市 紀市 郁栄

貧しくて米をていねいに洗う
等身大の鏡に憶病が映る
賽銭の小銭を女からもらう
いざというときの科白を溜めている
竹割った気性で人がついてくる

尼崎市 丹下 玉子

散歩道野良犬悲しい目をむける
人を揶揄我が貧しさを考えず
安楽椅子かけて老母は不満もつ
ビールなら少しと女遠慮せず
売れっ子の弟子が届ける見舞金

尼崎市 吉永 伊三郎

消しゴムで消して又書く恋病い
肩の荷をやつと下ろして足袋を脱ぐ
孫抱いて同じ星なる戦友偲ぶ
文化包丁手始めに新世帯
あれこれと無い無いずしが夢を持ち

弘前市 田 中 叶

自転車であいて少女に振り返り

パチンコ屋出れば季節の顔となり

甲虫電池が切れて捨てられる

反核のデモ終え夜の生ビール

社長来ぬ事務所女と扇風機

名古屋市 藤 井 高 子

カタカナのカード私の分身か

ハンカチを少うし汚す役どころ

北を指すことしか知らず磁石古い

自意識にトンボは目玉うら返す

繰り言をばそぼ鬼の角が折れ

東予市 小 山 悠 泉

嫁った娘のピアノ月賦がまだ残り

先生をPTAが振り回し

ホステスの野心笑顔を絶やさない

魚屋も弱気おまけがつく日暮れ

せせらぎで洗いキャンプの飯が炊け

西条市 片 上 明 水

眉の幅変えて女が移るまち

孫がくる瓦せんべい提げて来る

ドアに鍵かけて女房に話すこと

雑巾が白い子供のいない家

補聴器を外して路地を抜ける風

今治市 矢 野 佳 雲

金魚売りかつげる程の水にする

一人だけ本気に聞いて笑われる

地下足袋を穿くと踏み絵が苦にならず

鼻唄で出て行く先を危なかり

タバコ屋は角と子供の頃おぼえ

熊本市 有 働 芳 仙

眼鏡拭くしかないメダカはメダカ

啄木の蟹を探しにきた浜辺

披露宴へ悪友が寄る温かさ

秒刻むそんな歩調で鞆持ち

月の出を待つ居れない月見草

尼崎市 関 口 幸 子

手を触れただけで弾ける鳳仙花

高軒テレビを消せば見ていたと

中元が届いて義理がひとつふえ

主婦業をしばし忘れた耳飾り

住んで居る場所で人間値踏みされ

宝塚市 丸 山 よし津

お早うの良い声の出る機嫌良さ

献血車受付事務は灼ける中

西瓜二個厨に転がし帰省待つ

三度目に札のみこんだ販売機

ひとの金数える指の美しさ

和歌山市 中 尾 まゆみ

たこ焼きのひとつあるい夢を抱く

振り向かぬ背なで少女は耐えている

りんどうのうす紫は恋の色

メルヘンへ詩情もとめる切符買う
美しい言葉夕陽へちりばめる

高槻市 竹内 花代子

出世した順に出て来ぬクラス会
鍵に鈴つけて一日持ち歩き
愛情の裂け目つくろうテープ貼る
サラ金はガスの匂いを知ってるか
絆切る鉋は錆びてる方がよい

京都市 松川 芳子

帯低う結んで母の丸い背な
無駄口は叩くが本音言えぬ口
老いて子に従う術のない老後
お昼寝の時間ですよと母が先

富山市 舟渡 杏花

ロボットに命令される日も近い
ねじれ釘叩いておこすつむじ風
源はひとつ次男の型破り
万華鏡ひとの心を覗くよな

松原市 佐藤 藤子

スタミナをごちゃごちゃにしてフライパン
おぼろ月高速道路ついてくる
清流を包む夜霧は神話めき
朝もやが一点晴れぬ峰がある

和歌山市 福井 桂子

ピカドンは永久に許さじカンナ燃ゆ
断りは明日へ延ばそう受話機おく

主婦にだけたつぷり時間くれる午後
風鈴も人恋しいか鳴りやまず

熊本市 宇野 昭代

オンザロック今夜は素敵に酔えそうな
お話は種切れ孫は寝てくれず
泣き声もまじり原っぱもめている
まだ好きと言えず握手をして別れ

尼崎市 山田 保藏

バーの棚イキなコップの背くらべ
ピカソ展分らぬままに疲れきる
老妻も浴衣を着せれば女なり
おみこしをかついで見たい老いふたり

吹田市 井上 照子

職辞して主婦専業のけだるい日
また今日も箸一ゼんの夜が来る
ひとり酒好きで女は夜ふけ飲む
栄進の妻は孤独にじっと堪え

西宮市 松本 一郎

古傷を妻の日記が抱いている
寝たきりの母にあやまることがある
いい汗をかいて麦茶が涼をよび
山峡の駅で求めた鮎の寿司

大阪市 板東 倫子

赤ちゃんも不快指数の顔になる
思惑が夫婦で違う盆休み
帖尻が合わないままの盆休み

縁遠い娘が持つて来る御中元

名古屋市

越村 枯梢

止り木にせめて法螺でも置いてくる
モナリザも怒ってみたいときもある
五線譜を飛び出す街のピエロたち
病院へ死の予備軍の登録に

守口市

森川 まさお

したたかな女酢蛸が好きという
笛吹けば魔法使いの顔になり
西瓜喰う甘いけれども一人なり
お願いがあるのと這入る勝手口

西宮市

津山 冬子

結納の日から夫は貝になる
だますよりだまされた子が叱れない
真直ぐに伸びる杉にも手を加え
青柿がむなしく落ちて夜静か

島根県

北川 民子

大粒の雨に蛙も軒を借り
雨の夜孫の浴衣もある衣桁
夏うれし藍の匂いと下駄の音
孫が来て冷蔵庫休ませぬ休ませぬ

西宮市

西口 いわゑ

洗い髪夕顔いくつ咲いたやら
流れ星天にもあった落ちこぼれ
思ひ出を星に話している女
浴衣ぐらい一人で着よと駄する

伊丹市 榎谷 郁子

病院の二時ギブりに足音が
ハーレムを地でゆくような回診日
隣室の鶴が私にも語りかけ
蟬しぐれ負けん気でいる裸の子

岐阜市 市川 鱈魚

よその事などは気にせぬ母の得
息切れの坂で冷い妻を知る
ばんざいが続く花屋の思うつば
天に星父のきらいな風見鶏

熊本県 大川 幸子

常備薬禁酒する気はさらさない
満月を惜しみカーテン夜を明かす
ほどほどの捻子巻く妻に逆わぬ
母の顔作って娘が孫とくる

熊本市 高野 宵草

参禅をしようか素養の補いに
ムシャクシャを匂にぶちまけて笑み戻る
違反金払ってルールひとつ知り
もどおり縮めば輪ゴム素直なり

寝屋川市 岸 野あやめ

ほんとうは添いたかったと墓に言い
爺様の昼寝仏の貌になる
これ以上薄着出来ない夏が来る
孫帰り又茄子半分ずつ漬ける

寝屋川市 平松 かすみ

ふとある日退職すると驚かされ
アンケート無職無職と得意気に
待ちぼうけ居眠りしてる歩道橋
繕うて落穂を拾う母の籠

寝屋川市 立床晴風

開窓に振り回されている蛙
暑がりのくせに冷房いやだとさ
冷房とワサビ効かせている寿司屋
こんな時近所が欲しい一軒家

岡山県 土居耕花

吊り革の女の肌を透視する
何か着て唄いなさいよ雨蛙
ドングリが落ちたと波が騒ぎ立て
鮎っこの恋が小さな波を立て

高槻市 笠嶋恵美子

さよならを言うのはよそう今日は雨
雨と聞く祇園祭りのコンチキチン
のら猫も暑かろ冷えたミルクやる
男と女のまじめな話喰い違う

枚方市 二宮山久

追伸の手紙へ切手貼り添える
中流の暮しへ並ぶ皿の数
目玉商品妻にお伴を頼まれる
宅急便母の心が届けられ

豊中市 満仲きく子

真実は一つしかない梅雨明ける

ふる里は矢張りよいもの盆踊り
もう一度聴きたい曲でフィナーレ
秋を待つこころいい汗かいておく

吹田市 栗谷春子

蜘蛛の子を踏むまいとして捻挫する
親と子の鼓動は一致していない
前の御礼その前の礼も言い忘れ
螢かご空になっても匂つてる

尼崎市 矢萩貞子

体操の列を乱して仔猫なく
川柳が支えとなつて白い杖
末の子は猫に命令かけている
七日盆お墓も我が家草を引く

和歌山市 後藤正子

オムレツが少し不出来な月曜日
火曜日のあなた無口な靴を履く
きつちりと奇数で届くお裾分け
市場菟深刻そうな立話

松原市 本多洋子

草笛は疎開の夏のひとり言
晩年は良いと占い夢持たせ
閑になつたら何もせず時が過ぎ
さり気なく乳癌切つたと言うて来る

大阪市 萩谷まさ

朝顔に朝の眠気を覚まされる
おすましの朝顔に忘れず誉めてやり

真夏日にヒマワリの花歌い出す
冷害に泣くふるさとの声届く

泉佐野市

大工 静子

目の前の友の名前が口に出ず
体臭のする夫のカバー洗う

くれたビラ折鶴にしてホームにおく
初登山凜凜しく二〇K背負う

羽曳野市

麻野 幽玄

出先でも家でも鰻土用丑

蚊が寄って来て立話や々と散り

クーラー車西陽が背中温める

和歌山市

桜井 千秀

千三つの三つに愛を賭けてみる

スタミナで負けてセンスで差をつける

自販機の酒がちよいと呼び止める

兵庫県

森脇 和子

肩に来るインコに挨拶教えとく

精進のよい人がいて旅晴れる

物真似が上手でいつも人気者

吹田市

茂見 よ志子

冷蔵庫満杯にして帰省待つ

里帰り近くする子の布団干し

気のおけぬ客は茶の間に案内し

藤井寺市

前山 美恵子

おいしさの匂を知らない嫁若い

赤飯の湯気を囲める安堵感

梅干しのすっぱさ頭をツンと抜け

鳥取県

林 荒介

悪役に何時でもなれる指がある

指切りをしてから女眠りだし

木洩れ日に風の開いたページ読む

守口市

岸野 キミ

祇園さんコンチキチンと百万人

風鈴が風を呼んでる子守唄

夏休み四十日の計画表

新潟県

高野 不二

カラオケの評価任地へもう届き

巨人が勝っただけで上機嫌

嫁の言いなりになって帰って来

唐津市

浜本 ちよ

よたよたと回り続ける母の独楽

役所にも前例破る温かい人

野仏も衣更えして人に逢う

竹原市

佐藤 令子

むき出しの好意が肩を重くする

ありきたりの会話に女飽いてくる

振り向くもアスファルトとは味気なし

富田林市

植松 慶子

不安感まぎらすようによく食べる

朝寝して窓より蟬に起こされる

これが芸術かいなとピカソ見る

鳥取市

野沢 大漁

親と子の理想がもめて養老院
薄給をばやしコーヒー日課にす
水虫であろうと美人の妻が良い

尼崎市 春城 武庫坊

酒を飲む妻らしくない妻に惚れ

あの波は浦島太郎の帰る道

昼と夜つかいわけする顔を持ち

出雲市 竹治 ちかし

故里を捨てるその日の青い空

災害地もう草笛は聞こえない

子に読書勧める妻が読む慢画

尼崎市 佐藤 美代子

子殺しを動物達は笑ってる

過密都市御先祖様もお引越し

子の宝ベランダには虫一ぱい

水戸市 上鈴木 春枝

お隣が留守思いきり窓を開け

冷や奴供え亡父にも扇風機

どさくさに言うた本音が支持をされ

高石市 浅野 房子

許す気の鰯を一折さげて行く

柳会に出かける背へ蟬しぐれ

羽根よりも軽い年金当にする

熊本市 北川 一進

丹精の植木が枯れた日の日記

合格に呼鈴元氣な音でなり
箸だけが先に並んだご宴会

鳥取県 福田 あや子

夏ばてを昼寝ゆっくり充電し

桃太郎のキビダンゴでは従いてこず

仕入桶もろみの泡が唄いだす

八尾市 椎尾 公子

家計簿を中に明日を生き抜こう

落日へ順序不同の明日がある

梅雨晴間髪のかた変え爪を切る

弘前市 真喜内 實

ひまわりにおはよう言ってみたい朝

宵祭ほたるが座敷に待っていた

蟬鳴いて暑さが村中行きわたる

尼崎市 児玉 歌子

合鍵を返して今は過去の女

強がりを言ってる姑へ定期便

投げられて割れたコップににらまれる

芦屋市 上田 佳秋

涙もろい男の涙はすぐ乾き

秋の蚊が叩かんでくれとんでいる

赤トンボお前も陸橋渡るのか

尼崎市 大江 かね子

うれしい日愛情こめて包丁研ぐ

泣き声に待ってましたと祖母が抱く

飯場には寄つて出て来る国訛り

西宮市

朝山千世子

島根県 森山英子

剃髪した気持で亡師一周忌

ラムネで一とき明治女が蘇える

ミニの娘と浴衣の母が連れだつて

愛媛県

八塚三五島

岡山県 池田半仙

自動でない扉を押すと書いてある

若い頃のホームベースは此処だった

祇園太鼓時にはサンバのリズムに似

箕面市

坪田紅葉

大阪府 稲本凡子

ぐち話言い合ういつもの喫茶店

わさびづけ求めて旅もおわりけり

祇園街京おんなの帯の位置

岡山市

山本玉恵

羽曳野市 田中隆二

心變りの罪はきくまい自由席

妬心みな愛の裏返しかも知れぬ

何故か今宵亡夫の愛がほしくなる

鳥取県

石谷忠良

竹原市 岩本笑子

後援会萎れたバラを持ち歩き

シーソーの支点で福の神迷い

ダルマの目利権の墨も入れられる

大阪市

宮川不々

守口市 結城君子

着て歩くあてないシャツを買つて来る

じじばに笑うて見せる歯のない児

3LDK大きすぎたるシャンデリア

瀬戸の旅と白桃の味忘れかね

南瓜の黄を引き立てて盛りつける

御自慢は浅漬茄子の色の冴え

鳥取市 武田帆雀

招かざる人のおしゃべり長過ぎる

入院十日

用心をしたい男がメロン提げ
看護婦の一人声帯荒れている

指宿市 渡 辺 伊津志

ほつといてくれとはまだまだ甘えてる
写真屋は笑ったあとを撮るつもり
歓喜天煙にむせる日が続き

寝屋川市 堀 江 光 子

地下街に緑日が出る夏休み
呼んでいる様な気のする山の風
天下睨む顔で蛙が空見てる

和歌山県 寺 田 裕 美

逢ってきた余熱を責める扇風機
若竹に空がそこまで降りてくる
麦わら帽子墓に披せて草むしる

泉南市 坂 根 流 水

亡妻の墓建てて故郷が一つふえ
蒔かぬ種庭に鶏頭咲きみだれ
雷のような軒に孫娘らにげ

西宮市 草 刈 墮 駄

枕辺に本の散らかる熱帯夜
火花たく暮れるを待てず孫達は
縄張りを頑固に守り鮎釣られ

姫路市 人 見 翠 記

恋人を待つ心地して趣味の本
愚痴話娘はフンフン聞いてくれ
子や孫とスプーンで食べるお献立

大阪市 北 山 悟 郎

子離れに我家の旗はたれた儘
子守唄軍歌の他は知らぬ父
孫入院石切さんへとんで行く

大阪市 堀 口 欣 一

髪長き女と生れスクーター
東京はさすがきんぴら午夢の味
足軽の家柄という憚らず

高知県 曾 我 部 裕

平等に陛下も歳を召す安堵
遅刻した主賓拍手で迎えられ
パンクしたバイクを押してゆく猛暑

高知市 北 川 竹 萌

週一日健康希い自家菜園
熱帯夜祖母の寝返り行儀よい
夜の窓に見えぬ火花の音かぞえ

滋賀県 安 田 志 津

別れぎわ見上げた星も泣いていた
万歩計歩行規制の役に立ち
肩書を見てから一寸改まり

吹田市 園 田 文 子

太っ腹世辞はなくともいいおかみ

どっさりと本つみ上げて趣味に生き
ピカピカの顔まで映る掃除好き

米子市

本吉宗則

マイコンにやがて奴隷にされる日が
アメリカを頼る減反飢える日が
及び腰ではタイムリーまず打てず

大阪市

平井露芳

梅雨明けを待ってましたと梅干され
十円で人の心も買う電話

記念煙草表紙が変っただけの事

青森県

波ただお

列島全土流してる昼下がり
念仏が有難すぎて睡くなる

車庫が出来わが家にお城できた感

河内長野市

糸谷春草

豪雨禍に泥泥泥の家となり

瞑想をしてストレスを取る職場
栄養にスッポン料理すすめられ

大阪市

古川美津枝

主なくもせめてたしなみ薄化粧
夏祭り郷土競うて暑気はらう
借金がや々と終れば稼ぎ減る

大和高田市

岸本豊平次

やりくりの妻の財布の一円貨
夜の道出るにも女はコンバクト

夕立が去って家中窓を開け

大阪市

今西静子

兎小屋どこへ逃げてもこの暑さ
家具の位置かえても心はずまない
鹿の角こわごわ撫でてはしゃいでる

島根県

岩田三和

とてもこわい街の灯の下ひとりぼっち
まぶたから八月六日消えぬ雲

桃の店お尻をみせて買わせる気

泉佐野市

真崎浪速子

ささやかな善意都会に出合う幸

男ならボスになったと思う妻
同病の友が名簿を消えて行く

八尾市

松下蕉露

今年の鶴おしんという名でしこかれる

母の死を天寿でしたと人は言う

甲子園土と葛をば持ち帰り

近江八幡市

前川千賀子

誰が為の赤いネクタイだろう父

一応はかしこで締めて金釘流
四季巡る花の言葉に流される

豊中市

小林一夫

緊張へわざと欠伸をしてみせる
母へ出す手紙は強きことばかり
夢多き男の酒は許される

初恋の火も遙かなり大文字
滴りを一滴留める瑠璃鸚

旧友と墓参の途中の立話
竹踏みのリズムコトコト朝の音

パートする老妻に詫びたい暑さかな
主導権わたした後の秋の風

危険率低い子供を蚊が狙い
引越しの記念に貰う不要品

どこからか出てくる書類にボクの名が
この隅の席で静かに待つ定年

うなだれてご免ごめんと午前様
屋上に提灯揺れて涼を呼ぶ

仏壇の鉦のさえる日さえざる日
扇風機かけっぱなしで風邪をひく

鳩が水あびるしぶきに虹の湧く
来客へあわてふためきシャツを着る

大阪市 塩田 新一郎

島根県 東原 福子

東大阪市 小林 勇人

唐津市 前田 広幸

橿原市 西本 保夫

吹田市 西岡 豊

和歌山県 北浜 二郎

高知県 山下 登舟

千葉県 中村 有人

愛人を裏返したらお婆さん
しゃしゃり出るのは何時も女なり

先月のこたつの場所に扇風機
寄り添うと仲よく見える老夫婦

一列横隊陸橋の鳩雨やどり
甲子園汗も涙も土にあり

夏のギャル胸膨らせて風を切り
美人の娘はやらぬ飲み屋守り立てる

年金で食べて貯金は義理が食う
病む妻よ愚痴も小言も言うてくれ

川底に差す日が小石を輝かせ
朝の日を刻んでポプラの葉が踊る

いい娘だと一応はめておく写真
風化した脳ミソ友の名みな忘れ

猫の毛に昨夜の妻を思い出す
即席で父さんの味つくりあげ

当りそうな気がして今日もくじを買い

島根県 大浦 ふみ

大阪市 大塚 節子

大阪市 服部 頼一

大阪市 長岡 周太

藤井寺市 前山 とみえ

島根県 藤原 秀穂

高知県 小沢 幸泉

大阪市 野村 八重

倅せは心支える孫が居り

鳴門市 八木芳水

毎朝のジョギング孫を連れて出る

残雪が高原の花見て消える
冷蔵庫開いて暑さを凌ぐ孫

守口市 長谷川 司

矢印が消えて途方に暮れる寡婦

益田市 里本 たかし

堂々と娘が婿と風呂に入る

口ごたえだけが達者な児が育ち
赤字線いつまで走ってくれるやら

島根県 田中 ヒデ子

一向に折り返さない妻の愚痴

大和郡山市 岡田 すみれ

何してもすぐ疲れるは歳かいな

今もめている事のあり遠花火
町内のバザーおしゃべりも味につけ

大阪市 渡部 里美

おしん見て娘に逢える思い持つ

島根県 岩佐 富子

ご先祖とひねもす暮らす盆の老母
下町の血が野良犬に味方する

大阪市 日阪 秋子

子宝が母さんたらい回しにし
暑かったね労わりながら花に水

鳥取県 羽津川 公乃

八尾市 葛 幸子

チマチマと団地サイズの家具調度

お姉さんですかとママを喜ばせ

八尾市 宮崎 シマ子

さるすべり秋呼ぶ色で咲きみだれ

石一つ載せて地蔵へ願をかけ

東大阪市 三宅 旭

ひよこひよこことじいちゃんみたいラクダちゃん

月光に宿を貸してる芋の露

愛知県 国分 甲子郎

みやげ物君の心の中に住む
人生の転機は残る悔いばかり

広島市 望月 晴彦

大阪市 山本 炬斉

さわやかに庭の木ゆする夏の風
今年もう半ばをすぎている暑さ

米子市 宮本 佳女男

冷房を出て暖房の人通り
考えを変えて青空南風

残照の傾き徐々に闇に入り

朝釣りに余生のスタートきる平和

大阪市 権田達一郎

茫然と見送る球は外野席

若者を支えていたのは夢だった

鳥取県 若林一止

負け振りのよさも拍手の国技館

良薬を偽りの無い顔で飲み

大阪市 山脇正之

仏塔も力学的に支えられ

思い出に今なお続く祖谷の橋

大阪市 上田柳影

これからの虹無さそうな老夫婦

よろめきもこの辺までと線を引く

山口県 高崎雀声

娘の家出帰ってみれば戻ってる

新聞は高校野球にのつとられ

岡山県 藤瀬比沙子

趣味に生き美味しく食べて老い嬉し

私にもおしんはあった堪えし日々

島根県 園山世似

銀行がボーナス無い家目もくれず

父の日に遅れ小包小さく着き

兵庫県 脇田米朝

いさかいの種火煽いでいる他人

折り返し点から夫婦の人生譜

大阪市 松本ただし

ロボットの腕曲げたまま夏休み

歴史観時々変える古墳群

竹原市 石原淑子

ジリジリと太陽私を試してる

夏休み子の食欲に追われてる

大阪市 小野風童

絵日記は花火を囲みみんないる

火にかけた鍋が気になる長電話

八戸市 島田昭治

雑草が耐えよ耐えよと諭してる

安い靴買うに五回も履かせられ

藤井寺市 楠昭子

野仏に番させ無人の野菜売り

拓本に好かれ野仏たたかれる

高槻市 芦田静江

一度着てあきらめ付いた試着室

明日の夢広げて生きる老いの坂

大阪市 吐田公一

命令を守りロボット出世せず

命令の中に温もり苦勞人

岡山県 吉末謹太郎

お役所は善処しますと言う返事

武者人形武装解除もなく威張る

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から—

中村 ゆきを

すぐれた句とはどんな意味をもつのでしようか。作者が作者の個性と戦い、苦悩しながら句のモチーフを探りしていくことは、句作りの上での必須条件でしょう。先ずなによりも作者の主張が明瞭であること。加えて表現方法（技法）を洗練すること。格調あるモチーフも技法が拙劣であると、折角の材料を生かされない。不完全燃焼のままであったり、饒舌だけが空転したりします。作者の訴えがぐいぐい伝わってくる手答えのある句は、一種の清涼感さえもなつて感応します。そんな句を探してみました。

旅に出て乳房に似てる山と会う

藤田 泰子

旅とは、出会い、再発見、人生そのものでしょうね。万葉集歌を連想させる良質の句で、おおらかにうたつて、限りなく豊かな稜線、母なる山なみの暖さが伝わってきます。家中が寿司の匂いになる祭り

角野かず子

祭礼の日の女達は、はりがあり甲斐々々しい。まめまめしく動く姿態は一そう華やかであり、あでやかである。料理に腕をふるう女達。遠離子が風に乗り、宵宮のさんざめきと期待感が寿司の匂いの中から漂ってきます。切り札を捨てた女の一人旅

西村かすみ

愛に傷つき、愛に飢え、今また愛との訣別。そして新しい旅路を求めて行く。健気で思いあふれる女の情念が底に暗く沈殿しています。然しそれは生きている一条の光。句の骨組もしっかりしています。

倅せな指で涙はまだしらぬ

伊藤 春子

ナイーブな指よ、乙女心よ、永遠に倅せであれと祈りたいですね。リリックな句ですが感傷に流れず、下五に余韻があります。釣り人もやんまも夕日に溶けてゆく

佐藤 藤子

美しい題材を見つけても、それを鏡のように写し出すには、すぐれた技法を必要とします。夏の夕暮れ、永遠の中の一瞬を見事に捉えています。

船溜り大声で海の荒れた事

宮崎シマ子

短編小説の味がします。スケールが大きく、事象が具体的にあり、なによりも良いことは、この句には人間と自然との戦いを明確に表現しようとする作者の意図がはっきり汲みとれるところにあります。

まゆ置いて蝶はどこかへ行つたらしい

東原 福子

この句に出会い、ドキッとさせられました。このデフォルメは罪の意識でしようか。幻想の蝶は何時の間に、時間の壁の向うに姿を消してしまふ。まゆは少しづつ動き出し、蝶に生れては、やがてまゆを残して姿を消して行く。レトリックの鮮かさ、人生のそこはかない無常感を美しい手法で描いています。

梅雨明けて髪を短かくカットする

日阪 秋子

簡潔な手法を用いて、爽快感を表現。リズムカルでハレルヤが聞こえてきそう。梅雨明けの素適なサンデーの午前でしようか。

ラムネで一刻明治生れが蘇える

朝山千世子

明治は遠く、レモネードに秘めし郷愁。蘇る一刻に数々の思い出が通りゆく。詩情あり格調のある句と思います。

すらすらと句が出来るかと思うと、食欲がなくなる程一句に苦しむことがあります。自己の内部表現を一句に仕立てるには、多作と多読、少し肩の力を抜く事も必要でしょう。終点で甘い話が消えていた

滑り易いことばを一夜練つておく

片上 明水

ライバルにちよつと日傘で身をかばい

舟渡 杏花

だまされてみよう仮面をつけたまま

津山 冬子

森脇 和子

愛染帖

橘高薫風選

今治市 月原 宵明

入道雲五百羅漢の貌がある
洗濯をするうち欲求不満消え
神様も面会時間求めたし

八尾市 高橋 夕花

密約のようにしぐれが追ってくる

煩惱から逃げろにげろと秋の水
白い鶴折り溜めるほど淋しくて

藤井市 赤木 和子

女から貰う情けはてのひらに
男から貰う情けはみぞおちに

青森市 工藤 甲吉

精霊婦来茄子とキユウリの背にゆられ
この家も仏があつて鳴る木魚

和歌山市 若宮 武雄

目を閉じて拝むからには鬼でない
もつと酒飲めたら天下を奪れたかも

羽曳野市 田中 隆二

ロボットが段々群をなしてくる
入道雲破れ太鼓の父思ふ

島根県 堀江 正朗

やる気さえ出せば軍靴を履いた足
揚げ花火記憶の音を咲かす音

笠岡市 木山 遠二

あつ過ぎて暑中見舞も碌に来ず

扇風機暑い空気を掻き回し

今治市 矢野 佳雲

ボウフラが身の振り方を考える
蟻の列誰かが声を掛けている

大阪市 小出 智子

もはや少年ではない髯を剃り
それにしてもゆうべの夢の懐かしさ

和歌山市 西山 幸

ちちははを憂る汚れた掌よ
消えそうな白線をまた引きなます

富田林市 藤田 泰子

海岸で波乗り下手の彼という
大切なことは喋らぬ青リンゴ

高知県 松岡 三吉

日にちまで定めてならぬ子言者よ
片想いだつたと日記に書けますか

町田市 竹内 紫鏑

ございます調で終戦を語り合い
SP盤以来茶の間の方もよい

松原市 佐藤 藤子

りんどうの花には優しき阿蘇の峰
ミニの娘も藍の浴衣がよく似合う

海南市 牛尾 緑良

ほほえみを添える女の果し状
通りゃんせ心でつくる輪の中を

羽曳野市 吉川 寿美

熟年がシックになったルーフトアイ

ひとり居の女に弾ける遠花火

東大阪市 竹中 綾珠

先生も患者も半減したお盆

あの世から帰った耳へ蟬時雨

羽曳野市 麻野 幽玄

年金の暮しへ違反金払う
八月の歌舞伎座涼しく広く居る

尼崎市 伊藤 春子

青写真花火を上げる筈だった
正確な時計を悪い奴が持つ

西条市 片上 明水

小川サラサラ君の意見もあるだろに

岡山市 川端 柳子

週末のバスから降りる共犯者

米子市 八木 千代

食欲がなくても鬼は靴をはく

米子市 政岡 日枝子

哀愁の夢二の暗き風景画

豊中市 田中正坊

点滴を九千五百まで数え

兵庫県 榎谷 寿馬

蟬しぐれ今を生きている声で鳴く

富田林市 植松 慶子

はじけ飛ぶ想いを友が突いてくる

和歌山市 中尾 まゆみ

輪を抜けるみにくいアヒルかもしれぬ

近江八幡市 前川 千賀子

道草を見て道草をした昔

高知県 曾我部 裕

病院の廊下人間万華鏡

殺屋川市 岸野 あやめ

富田林市 岩田美代

欲深い男で先に死にたがる
唐津市 田口虹汀

親だから出来る紙積の愛であり
尼崎市 春城年代

おしろいの花とおませな白昼夢
弘前市 真喜内實

ひとりごと聞いてた花がぬれていた
名古屋市中区 越村桔梢

山彦にある日反語を期待する
大阪市 神夏磯道子

反省の時を与える貝になる
大阪市 西森花村

鉄道が消えても仁王ふりむかず
和歌山市 福本英子

鈴を振るたびにふえてる願いごと
島根県 堀江芳子

大阪弁の子等うちよろと夏休み
愛媛県 八塚三五島

若者の笑い自分等だけのもの
高知県 山下登舟

紅灯の蔭に屋台の灯を守る
西宮市 奥田みつ子

蚊飛白のゆかた着せたい厚い胸
米子市 野坂なみ

季の行事語り伝えて冷泉家
平田市 久家代仕男

同舟を嫌う男の片手漕ぎ
島根県 鈴木村諷子

黄金の生涯だったなのどほとけ
兵庫県 野々口ゆう也

老いの夢浄土へ幌馬車轟かせ

花々の仲を取り持つカスミ草
大阪市 萩谷まさ

銭湯とたばこに迷う年金者
大阪市 朝倉利義

カナリヤも近頃雛が威張り出し
島根県 松本文子

果を振って蜘蛛の子威嚇してござる
高知市 北川竹萌

うさぎはりんご両手で優しく抱いて食べ
藤井市 前川美恵子

呑む非情吐かせる非情鵜飼舟
島根県 小砂白汀

新しい時が流れるからひとり
鳥取市 森田熊生

一日の命真正面に咲く芙蓉
岩屋川市 宮尾あいき

鶏と蟬と小鳥へ朝まだき
大阪市 坂口公子

靴下の穴から嫁さん捜そうか
兵庫県 脇田米朝

外出着四季折々のぐちをきく
堺市 高橋千万子

小鳥ほど素直に愛を語りたし
名古屋市中区 藤井高子

髪長い青春持たぬ戦中派
岩屋川市 堀江光子

原爆忌黙禱の間の蟬しぐれ
京都府 山本規不風

よい知らせ配達の人にも礼を言い
岸和田市 原さよ子

相合傘だったとも言えず傘たたむ
岡山県 山本玉恵

愚痴るなよボロ雑巾の今日の俺
洲本市 箱石甲子郎

それぞれに日課も分けて老夫婦
兵庫県 奥野テル

罪を抱く膝に懺悔の石を載せ
鳥取県 林露杖

暑がりの亡母さんだった慕洗う
豊中市 満仲きく子

酒好きな埴輪の口がとがってる
吹田市 西川景子

花鉄花の個性を知っている
倉敷市 藤井春日

銅像も脱ぎたいだらう昼下り
岡山県 土居耕花

電話口だから笑いも泣きもする
和泉市 西岡洛醉

揚げ花火空中戦の夜を憶う
唐津市 浜本義美

ゆく末を見詰める亡父の肖像画
米子市 雑賀美世

マンネリを旅のカバンに詰めてゆく
高知県 小沢幸泉

放浪の鼓を背負ったかたつむり
広島市 望月晴彦

ジャンケンには減法強いもやしっ子
唐津市 浜本ちよ

探知機を携帯犯が通り抜け
唐津市 久保正敏

探知機を携帯犯が通り抜け
東大阪市 市場没食子

防犯カメラキチンと責任だけは撮り

大阪市 中西 兼治郎

背のボタン旅で夫の手を借りる

大阪市 澤田 千春

浜木綿が潮の想いを抱いて咲き

大阪市 青戸 田鶴

開かれた世界へ女翺びたがり

岡山市 岩道 博友

上流を望まず友人多く持ち

唐津市 木塚 素石

若者はご苦労さまで疲れとれ

和歌山市 桜井 千秀

断ち切れぬ愛憎しみが増すばかり

唐津市 今里 一竿

花言葉人の心を咲き分ける

宝塚市 吉田 笑女

夏の陽を真赤なバラが跳ね返す

貝塚市 行天 千代

母の机いつも暦を置いてあり

西宮市 津山 冬子

失意の日ふとひまわりに励まされ

東大阪市 三宅 旭

蚊や蚋が老いの身の血を吸いに来る

米子市 寺沢 みど里

雨を乞う花へやさしい暈の月

和泉市 岡井 やすお

進学も野球も都会では私立

唐津市 前田 廣幸

大人等が捨てた暴力子が拾い

枚方市 二宮 山久

甲子園終戦日まじかな夏がくる

米子市 菅井 とも子

澄んだ瞳で少女善人知っている

兵庫県 辻 文平

縁談の答を出した目玉焼

大阪市 稲本 凡子

腹の立つこと続き生きている

笠岡市 松本 忠三

ぎこちない手つきPTAの夜店

高知県 赤川 菊野

こぼれ種土はやさしく抱いてくれ

西宮市 松本 一郎

子をもった息子優しい言葉くれ

鳥取県 林 荒介

地図はこれコンパスつけて解き放す

吹田市 西岡 豊

大ジョッキ明日のいくさは思ふまい

大阪市 北 勝美

蓮入り目玉飛び出る盆の花

兵庫県 仲井 素水

曲り釘たたき伸ばせどまた曲り

大阪市 上江洲 勝子

選手の子に出ない疲れを親にみる

唐津市 仁部 四郎

松一本ます植えてから庭になり

西宮市 草刈 唯駄

すき焼の寺より匂う葬儀の夕

兵庫県 森脇 和子

厄年の娘に還暦を祝われる

堺市 大道 美乙女

雨の日の花の墓情を見てしま

指宿市 渡辺 伊津志

警笛に風振り向いて呉れませす

八尾市 山下 みつる

ねぶた夜話読んでテレビの祭みる

島根県 佐々木 裕

今朝の妻夢見の悪さ押しつける

島根県 木村 はじめ

母の持つ涙の壺は底がない

吹田市 井上 照子

母さんの明治の料理人気呼ぶ

京都市 松川 茂

月光の曲お地蔵さまも御存知で

大阪市 松尾 柳右子

修身の変りにおしん見せており

藤井寺市 楠 昭子

老夫婦大きな家を持て余し

水戸市 上鈴木 春枝

許してはくれないままか父は逝き

★ 豊中市中樫塚三丁目13-15

投稿先 〒560 橋高薫風（ハガキに3句）

NHK川柳募集

課題「本」 選者 森中恵美子

締切10月10日

（ハガキに三句以内）

投稿先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

発表 大阪放送局、老後をたのしく係

10月23日（日）ラジオ等一放送

午前10時から

第7回

寝屋川市民川柳大会

とき 昭和58年11月3日(祝)

午後1時開場

ところ

寝屋川市立総合センター

4階図書館自習室

京阪電車寝屋川駅下車、バスターミナル③乗場より総合センター前下車

おはなし

西尾 栗氏

題と選者

虎の子 丹波三千子選

海外 辻 一弘選

隣 榎本 信治選

悪人 高杉 鬼遊選

もつれる 西田柳宏子選

雑用 伊藤千代磨選

横顔 橋高 薫風選

出句

各題共2句、×切2時
(開会と同時に×切ります)

投句は受け付けません

賞費

千円
秀句には実用的豪華賞品と参加賞

主催

寝屋川市文化会川柳部

後援 寝屋川市教育委員会

豊中市文化祭協賛

豊中市民川柳大会

日時

昭和58年11月27日(日)正午開場

場所

豊中市立螢池公民館

阪急螢池下車西50m四つ辻北20m

お話し

西尾 栗氏

宿題

眉 伊藤 入仙選

乱 尾谷 清風選

裏 金泉 萬葉選

像 高杉 鬼遊選

襷 久保田寿界選

炎 永田 帆船選

他に席題2題

各題2句 ×切午後1時30分

五百円(懇親会はありません)

会費

主催 豊中川柳会

昭和58年度大阪文化祭

第35回川柳大会

日時

昭和58年11月12日(土)11時開場

会場

中央公会堂(中集会室)

地下鉄「淀屋橋」中宮島公園内

宿題

「宝」 永田 帆船選

「時事雑詠」 広瀬 反省選

「砂」 高橋 白兔選

「脈」 森中恵美子選

「友」 西田柳宏子選

「走る」 定金 冬二選

席題 二題 各題2句 締切1時

(出句は出席者に限る)

賞 大阪府知事、大阪市長、大阪府

市教育委員長から「川柳賞」贈呈

会費 五百円(作品集代を含む)

主催 大阪府

大阪市

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会

大阪府教育委員会

大阪市教育委員会



NHK TV 58年8月16日 午後8時

T2スタジオから

板尾 岳人

台風を目にドライアイスを投入すると台風は分裂して小規模な熱帯性低気圧になるそう
な。しかし、台風は雨を伴って来るからどう
しても必要であるそう。そんなことを考え
ながら台風五号が紀伊半島南西二〇〇軒の位

置にある八月十六日午後六時NHKT2ス
タジオに入った。

もつすでに川柳愛好家によって用意された
百五十数席の椅子は満席であった。

すでに秋田、熊本からの映像が正面のモニ
ターに映り出されていた。

桂三枝、露乃五郎両氏の司会によって、よ
めやうたえや川柳天国の大合唱が始まった五
十分間生放送による全国ネットワーク、各地
の仲間が見ているのだと思うとわれわれ川柳
人は安易に仲間うちのマスターベーションで
あつてはいけないという気持が大で緊張の一
瞬であった。そして自分の句を発表する時、
川柳に対する思い入れの深さと踏みこみ方の
強さをNHKによって力強く感じたのは参加
者全員の気持であつたであらう。

電話による二万五千句も投句があつた事実
に私は川柳に対する一般の眼がこれ程に熱を
おびているのだと思うと、自己満足を与える
だけの安易な方式を繰り返してはならないと
反省することしきり、発表句の一句一句にき
らりと光るものがあり、これからの歩みが川
柳の存在価値を世に問う機会を得られたこと
に私は満足感を味わいながら五十分間、川柳、
川柳、川柳に浸ってしまった。

第17回 東大阪市文化祭参加

第11回市民川柳大会

日時 昭和58年10月23日(日)正午開場
会場 東大阪市立青婦会館
(近鉄奈良線水都駅北へ五分
鴨高神社北)

おはなし 「句碑と文学碑について」

磯野いさむ氏

兼題及選者

伝統	西田柳宏子選
欲	中田たつお選
園	定金 冬一選
ひげ	高橋 古啓選
紳士	竹村 紅蕉選
妻	龜山 恭太選
空	西尾 某選
席題	片岡 湖風選
兼、席題共各二句。出句は切	
一時半。出句は出席者に限る	

賞費 千円

主催 東大阪市文化連盟
東大阪市川柳同好会

T3スタジオから

西 出 楓 楽

この番組を見たいと思ってわざとゆっくりやってきました。台風五号の強風の中を、指定の五時半少し前に馬場町のNHK大阪放送局へ着いた。迷路のような建物の中を、交錯した太い電気コードを踏み踏み、四、五百平方米はありそうなT3スタジオへ入った。八

時からの生放送を前にしてスタジオの中はすでに熱気がムンムンしている。雰囲気は圧倒されながら、お仕着せのTシャツに着換える。と「T3スタジオみな仲間」という気分になつてくる。局の人達は部厚い台本片手に、打合せや指示のために右往左往している。「電話ギャル」も「ハリハリマン」も各々の持場で忙しい。

T3スタジオでのわれわれ川柳関係者は投句の選係と、入選句を墨で書く係である。選係は赤鉛筆片手に、メモ用紙に書かれた電話投句を黙々とらんんでいる。書く係はともすれば入選句がたまりがちになるので、懸命に書き続けなければならない。時折いい句が出

ると各々のグループから「ざわめき」が起きる。「本番何分前」の声が段々迫力を増してくると、恵美子・薫風両氏の顔も緊張の度を増す。

いよいよ本番のたのしそうなT2スタジオや各地の様子をモニターでちらちら盗み見しながら、ひたすら選をし、ひたすら書いている間に番組は終了。局の人達のねぎらいの言葉を背に、台風の街を家路についた。

このように緊張と活気の中で番組は終わったわけだが、一つ気になったことに、ほんの僅かなのだが電話投句の受け誤りがある。全ての電話ギャルに川柳の理解を求めるのは無理な相談なのだが、字が不明で句の意味や名前がわからず無駄に終わった投句者があつたのを気の毒に思う。勿論投句する側にも、受ける方の身になっての気くばりが足りなかったせいもあるだろうが……。

誤解され時として冷飯を食わされている川柳であるが、このように全国ネットの大掛りな番組を作ってもらえるのは、NHKの大きな機構なればこそと思う。好みの違いなどで読み上げられた句を云々する人があるかも知れないが、川柳の啓蒙という点では大変なプラスになったのではないだろうか。

また、そうしなければならぬと思ふ。

岸和田市文化祭参加

第33回市民川柳大会

日時 昭和58年10月30日(日)正午開場

会場 岸和田市民会館 地下会議室

おはなし

兼題

軽い 西田 柳宏子
戻る 中田たつお選

吹く 香川 酔々選

流れる 中尾 漢介選

気晴し 榎本 聡夢選

席題 当日2題(選者 藤井一二三・橘高 薫風選)

メ 2時 各題2句 (谷垣史好)

会 費 五〇〇円 大会誌呈

呈 賞 市長賞 市議員賞 教育委員賞 文化協会賞 操子賞

しせん賞

主催 岸和田川柳会

後援 岸和田市教育委員会

岸和田文化協会

連絡先 岸和田市土生町一九八九・八

TEL 〇七二四一二二一〇〇四九 高橋操子

さよなら 伏見茂美さん

藤井 一二三

川柳で結ばれた縁の糸が、暑い夏の盛りに
ブツリと切れた。

「茂美さんが、今日亡くならはりました」
の妻の声を、勤め帰りの汗を拭く背で聞き一
瞬、息をのみ棒立ちになった。八月三日夕方
のことである。茂美さんは本年三月頃から体
の不調を訴えられ、厚生年金病院で精密検査
の後、近くの山口病院で療養、退院も間近と
聞いて柳友一同再起の日を待ち望んでいたの
であった。七十一歳のまだこれからの人生に
対し、神の無慈悲を怨むばかりである。

通夜の席、連日家族交代で付きっきりの看
病をされたにも拘らず、悲しい旅に発たれた
茂美さんを語られるご夫君の目に無念の涙が
光っていた。然し「全然大丈夫に眠るよう
に逝ってくれたことを神に感謝します」と信
心の深さを話された。召天式は四日、和泉市
の和泉キリスト伝道院で、いとも厳粛にとり
行われた。

憶えば今年の堺新年句会でお会いしたのが
茂美さんの笑顔を見る最後になろうとは、神
ならぬ身の知る由もなく手を振って別れたも
のを。

茂美さんは柳歴も古く、昭和四十年、堺市
の成人学校で、故八木摩太郎先生に川柳を学
ばれ、以後堺川柳会、川柳塔社の同人として
作句に励まれ活躍された。静かな物腰の、瘦
形の綺麗なひとであった。句会当日帰宅され
てから、その日の句会風景や、自分の入選句
について、夜の更けるのも忘れてご夫君に語
られたそうである。本日に川柳を友として幸
せな日々であったとか……。

性格も、明治生れの女性だけに、決して他
人の前に立つというタイプではないが、明る
く誰とでも仲よく出来る優しさと、芯の強さ
を持ち合わせた茂美さんであった。ご夫婦
の仲も極めて円満で、「うちのお父さんがな
あ」と仲の良さを物語るアクセントで、話
された茂美さんの、横顔が今も目に浮ぶ。発
表された句も、性格そのまま、派手さはない
が優しさと、その中にキラリとするものを多
数遺されている。

連れ添うて足手まといになっただけ
もう寝たの聞けばくるりと向きをかえ
友情は忘れじ四季の花に添え

第30回八尾市文化祭

市民川柳大会

とき 昭和58年10月9日(日)正午開場
ところ 八尾市商工会議所3階大ホール
近鉄大阪線八尾駅下車南二百m
八尾市役所向い側

会費 千円(作品集・鉢植花呈)
題と選者(順不同)

〔席題〕 広瀬 反省氏

〔草〕 橋高 薫風氏

〔鼻〕 中尾 藻介氏

〔情〕 森中恵美子氏

〔袋〕 小松原爽介氏

〔街〕 去来川巨城氏

〔すし〕 西尾 某氏

締切 午後1時30分・各題2句

但し投句だけの方は左記へ9月25

日迄(郵券500円同封)

〒581(八尾局私書箱第9号)

八尾市清水町1丁目1-6

八尾市立公民館内川柳係

懇親会 三千円(当日受付)

花と寝て花の言葉を聞かされる

燃えつきて見れば女は一人旅

茂美さんが召された天国も、今頃は蟬時雨だろうか。きつとそとに違いない。涼しい樹の陰で「八木先生。一ぺん句会でも聞きまひよか」との茂美さんの明るい声が聞こえてきそうである。茂美さんを偲び人生の儚なさ空しさに思いをはせる時、追悼のベンが濡れてくる（遺骨は大和の名刹長谷寺に葬られた）。茂美さんどうか安らかに眠り下さい。合掌
追憶の句座を涙であけておく 一二三

伏見茂美さんを悼む

高橋 千 万 子

伏見です。電話の声にハッとしました。もう一度お見舞いして思っていた矢先、八月三日遂に帰らぬ人となられました。ご家族の手厚い看護も及ばず安らかな往生を遂げられました。こんなに早く逝かれるとは思いませんでした。再入院を知ってお見舞いに行った時は一抹の不安はあったものの、きつと病いに打ち勝ってよくなれる事を祈ってました。

秋には又旅行に行けるかもと、ご自身の口から言われてましたのに、一月の鳥取行が最後の旅となりました。

故八木先生御夫妻と北海道の旅、また四国一周、ハワイ旅行など思い出はつきません。ほんとに淋しい思いで胸が一ぱいです。通夜の席での娘さんのお話では病名は胃ガンでしたとの事、御家族の心痛如何ばかりかとお察しいたしました。

心からご冥福をお祈りいたします。
もう十年生きてほしい巻線香 千 万 子
伏見茂美句抄

ふと触れし娘の体温の若さかな
目で詫げる夫が少しかわいそう
我慢する別の私が聞いてみる
この歳で少し欠けたる愛のつば
多情仏心今の私はよく眠る
春に告げん元の私に戻ります
もう燃えぬ女が万葉を読むコタツ
もう一度燃えても見たい紅をつけ
神はまだ試練を給う母だから
家裁からババの不馴れな手に抱かれ

堺まつり協賛

第37回 堺市民川柳の会

とき 昭和58年10月16日(日)13時開場
ところ 堺市立勤労会館ホール
堺市南安井町1-1-1
TEL 0722-2213561
(南海バス安井町バス停南西200米)

あいさつ

講演

「老後と川柳」 高木 幸太郎
「蟻」 森中 恵美子
「形見」 黒川 紫香選
「ビデオ」 藤村 乙女選
「根気」 河内 天笑選
「飼う」 奥田 白虎選
「糸」 金泉 萬楽選
「糸」 梶川雄次郎選

席題

一題 当日発表
しめ切り 14時30分 各題2句
欠席投句拝辞

会費

千円(記念品、作品集呈)

賞

各題秀句に市長賞他呈賞

懇親会

二千円(当日受付)

連絡先

〒590 堺市櫛屋町東一丁目二二
TEL 0722-210102

梶川雄次郎方 堺番傘川柳会

松川杜的選

支え合う人生でこほこ道にかり
自画像の裏へ支える妻を画く
名リーター支点のつばを心得る
浮草のような人氣に支えられ
糟糠の支え身に滲む年令となり
いつの日も支えてくれた十の指
泥線で支えあつてゐるロンと康
俸せは家族みんなで支え合い
母の掌で支えられなくなる積木
おしんに似ている妻のいる支え
面接の支えに生きてました禪
逆境を互に支える夫婦ごま
盲人の一家支える白い杖
おとなしく妻関白の手綱持つ
ひまわりに支え貰うた靴のひも
定年の支えジョギングの朝があり
生活を支えるパートへ髪を梳く
支えにもなるが重荷と思う日も
まだヒモを支えにしている男運
奴唄支えた糸を切る反旗
つかの間の命を支える蟬しぐれ
ひと言が支えになった気の弱り

克枝
規不風
景子
道子
一止
文子
みつる
泰子
泰子
カズエ
浪速子
寿美
まさ
重人
冬子
洛醉
雄々
求芽
佳雲
静子
テルミ
婦美子

さりげなく支えてくれたバスガイド 達一郎
傷心に支えの紅が濃過ぎる 悟郎
支えにはもうならないが母に聞く 博友
寡婦として老舗支えた掌の温み あやめ
糸電話老いを支えてくれる孫 玉恵
心の支えに母が生きている 与呂志
男あり義士を支えし陰の人 勇人
人育てが支え聖女と讃えられ 伊津志
人という字にも支えがあるように 赤木和子
ひと言の支え大事にあすへ継ぐ 悠也
政権の真の支えは裏にある 山久
十二代支えた初代の処世訓 右近
どの子でも国を支える大事な子 八重
一生を支えて終る貝柱 三吉
倒産に二号の支えはずされる どんたく
一行詩余生を埋める支えとし 多賀子
ひと言の支え辛棒した笑顔 天彦
借金と言わぬローンで支えられ 幸一
後から支えてくれるボスが居り 七面山
佳
根を張ると支えた棒が邪魔になる はつ絵
雑兵の支えにコップ酒がある 里風
客は皆神様ですという支え 虹汀
蜜の味知ると支柱が揺れ動く 明水
筋金が支えた明治遠くなり 公一
人
一言が支えになつて坂登る 勝美
地
黙つてる男が支えになつて 晴彦

命令

天
亡くなってみると大きなボスだった 武水

川竹松風選

命令も素直に聞ける年になり
 命令が無いと動けぬ列にいる
 声よりも笛の命令よくきく子
 妻のメモ持ちデパートへ寄られる
 命令を伝えるだけの鳩時計
 タイマーに命令しといて朝寝する
 命令の口調変らぬままの老父
 命令を鞭で伝える猛獣師
 命令へ横に振る首洗っとく
 命令で素直に動く子沢山
 上司から命令される宮つかえ
 命令に叛いた男辞表書く
 命令をきいているのも生きる術
 命令に背中を向ける天の邪鬼
 命令をするよう寄附の額を決め
 命令も神話となった日の記憶
 上役の夫人の指図目をつむる
 死に行けなどと天皇御言らず
 むつつりと反骨命令聞いている
 命ぜられるままに口ポツとよく動き

キミ
 佳雲
 豊
 重人
 克枝
 慶枝
 春枝
 一止
 満津子
 有すみ
 人
 ちよ
 義美
 晴彦
 柳五郎
 勝美
 頼一
 あやの
 柳影
 八重

命令のとおりにしていって叱られる
組合の命令会社になてをつき
老妻の命令で行く市場籠
命令に背いた報いの辞令出る
命令へお腹の虫が騒がしい
昔此処に大命令のピラミッド
命令を待つ警察犬の耳尖る
命令も素直に聞けぬ日の焦り
絶対の服従だった赤い紙
命令へ日本魂散った過去
ジャングルの中で命令守りぬき
不景気へ命令弾きになる口調
一喝の父の命令温かい
下積みへくる命令がきびし過ぎ
自衛隊に命令がくる災害地
権力の命に殉じた戦没碑
命令は聞きます不発弾抱いて

求 兼治郎
芽 どんたく
素身郎
公子
武水
倫子
洛醉
景子
喜醉
仁於
山久
規不風
明水
三吉
裕
右近

宝

川端柳子選

命令をする様に医者釘をさす
命令の言葉の中に父の愛
命令を出す身になると重いベン
男女平等命令権のないわが家
ワンマンの父に服従の母でした
主導権妻が握っている平和
特訓に命令調が生かされる
身ごもった妻に嬉しく指図され

悟郎
七面山
四郎
幸一
寿美
悠泉
狸村
胡頼子

耐えてきた汗が宝の母子家庭
子宝と言われる様に皆育ち
一言を宝にされてうろたえる
艱難の汗は宝石にも勝り
子宝に恵まれ過ぎて貧乏し
衣食住足ると宝がほしくなり
変らない愛はわたしの宝もの
山の子が海辺で拾った宝物
宝石が似合わぬ妻の手が温い
何よりの宝やさしい心抱く
みる人がみれば宝になるから
顔写真母ですペンダントが宝
握手した手を宝物のように撫で
国宝と言われるまでの血の修業
多数党伝家の宝刀抜きたがり
君のスマイル僕の唯一の宝だよ
国宝は寺の格式だけ支え
宝探し男のロマン果しなく
家宝まで手放し明日に賭けた夢
今日も又人間国宝土いじる
子は宝宝にすねをかじられる
宝には縁ない運命線である

カズエ
ひで
公子
胡頼子
七面山
弘朗
桔梢
正敏
明水
右近
泰子
里風

子宝を重荷と思う反抗期
国宝はやつと拝める距離を持ち
捨て切れぬ夢が買いた宝くじ
善人の心に秘めている宝
大阪の宝太閣今に生き
日本の宝は富士の晴れ姿
故事来歴聞けば宝に見えてくる
思い出があり掛け替えのない宝
親馬鹿と子宝いっしょの檻に住み
初夢の宝の船はまだ着かぬ
国宝の襖に栄耀栄華みる
宝物館わが家の壺と見競べる

佳雲
三五島
裕
与呂志
里美
悠泉
晴彦
素身郎
一止
久仁於
景子
ゆう也

年寄りを内の宝にして平和
家宝から話は素性にまで及び
子宝が泣いて笑って日が暮れる
宝石が好き女にくすり指
宝石の魅力女にある恐さ
百姓に宝肥沃な土があり
宝にも屑にもしたくない金鶏
七人が乗ると絵になる宝船
宝石のおすまし値札の高い順

木魚
博友
重人
寿美
甲子郎
代仕男
久仁於
右近

楽天家夫婦に化ける術おほえ
 年金を楽しみに待つ孫がいる
 初給料かじった脛がなつかしい
 (初月給料かじった脛をなつかしむ)
 楽だけを考へるなと母の言
 (楽よりも苦に負けるなと亡母の言)
 十字路に楽を選べず女立つ
 (まだ楽をつかめず岐路に立つ女)
 楽々と乗れた列車は次駅止め
 (楽々と乗れたわけあり次駅止め)
 楽々と乗れたわけあり次駅止め
 楽々とラッキーゾーンへ高校生
 (楽々とラッキーゾーンへ金属音)
 ゴキブリへ逃げ廻つてる楽天家
 (楽天家ゴキブリだけは苦手らし)
 楽した分弱くなつて腰の線
 (楽をした分だけ腰が弱くなり)
 楽天家今日も一日平和なり
 (楽天家毎日天下泰平です)
 楽隠居出来る伴せ噛みしめる
 私だけ遣して楽に勝手よな
 (わしを遣して楽にとは勝手過ぎ)
 苦と楽を左右に持った人生よ
 (苦と楽を両手にさげて生きる道)
 年金の気楽となりの溝も掃き
 夜汽車空き楽なボーズを試みる
 (夜行の指定席がどうぞお楽にと云う)
 母さんのらくは墓石の下でした
 (亡母の楽園は墓石の下だった)
 税務署は楽に儲けたように取り

同 あや子
 同 久子
 同 やすお
 同 柳右子
 同 キミ
 同 芳水
 同 武水
 同 兼治郎
 同

気楽には装つてゐるが火の車
 (火の車さも気楽そうに曳いている)
 楽にハビリに泣くハビリとおしく
 (ハビリに泣く泣く勝つて書く楽譜)
 楽しみを倍にふやした竹の筒
 楽しみの価値観違ふ老と若
 (楽しみの価値観老若くいちがい)
 楽させて上げると子供の頃は言い
 手を見ても楽にはならぬ我がらし
 (じつと手を見ても楽にはならぬ日々)
 ベレー帽に若さを見せて楽隠居
 楽しさ蒔き散らしてゐるお人好し
 (明るさを蒔き散らしてゐる楽天家)
 楽しさを持つて来た孫が持つて去に
 (楽しさを持つて来て持つて去んだ孫)
 極楽へ母は襪をかけたまま
 流転記を胸に沈めて楽天家
 止り木の気楽さ一人今日を閉じ
 (独り居の気楽さ止り木が温い)
 楽焼に二人署名のハネムーン
 (楽焼に字癖並べたハネムーン)
 楽園に通ずる道を探す日々
 (極楽の近道探す今日もまた)
 助手席で寝言言つてゐる楽天家
 (助手席で船を漕いでゐる楽天家)
 今日西 明日は東と楽隠居
 寝たきりの老父が娯楽とする相撲
 (寝たきりの老父が楽しむ場所相撲)
 楽々のコース選んで誤算知り

紀久子
 同
 勝美
 同
 露芳
 同
 玉恵
 同
 芳枝
 同
 三男
 同
 かすみ
 同
 春枝
 同

(楽コースの方を選んだのが誤算)
 孫に会う楽しさ顔の紐ほどけ
 楽しみは年に一度の里帰り
 伴せのまん中にある楽隠居
 幾星霜の苦楽彩る共白髪
 子に楽をさせよう苦勞に夢をかけ

同 同 同 同 同 同

(恵二朗短信)

私のささやかな句文集が生まれましたよ。初
 対面する日も近いと思います。その節はよろ
 しく。

題 反省 10月20日締切(12月号発表)
 宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四

(七二一) 本田恵二朗

言葉の遺産という点からすれば
 安易な造語を使うことと
 辞書にないからと
 棄ててしまうこととは
 どちらもどちらでは？

寿馬

柳界展望

集録・橋高薫風

★中島生々庵・小石二夫妻は、引き続き自宅療養をなさっているが、厳しい残暑にもかかわらず元気でありつつしやるご様子。また、川村好郎、菊沢小松園両氏もおおい元気をとり戻しておられるとのこと。

★西尾栗主幹をはじめ、野村太茂津、高杉鬼遊夫妻、板尾岳人、大山と金の諸氏と薫風は、八月二十七日から蒲郡の形原温泉での大陸川柳同窓会に出席、岡崎周辺を観光、東野大八氏と久間を叙した。なお、栗、鬼遊夫妻、岳人、薫風らは大八氏の案内で郡上八幡へ足を延ばし、翠柳吟社の青木惜春氏ほか柳人と交歓した。



左から三吉・竹萌・松風・同夫人・菊野

★第三十五回西日本川柳大会は九月四日久米南町の中央公民館で開催され、東京新潟、九州、四国からの柳人を合わせ四百人もの参加で盛会だった。同人の水粉千翁氏は「紋土」の表紙を執筆の功勞により表彰を受け、林瑞枝さんは、句会の成績優秀で津山朝日新聞社賞を受賞された。

★九月二十五日(日)には出雲市と小松市で尼縁之助、伊藤茶仏両参事の句集が出版になる。それぞれ発刊記念大会が催された。句集の紹介は来月号に掲載予定。

★九月二十五日(日)には出雲市と小松市で尼縁之助、伊藤茶仏両参事の句集が出版になる。それぞれ発刊記念大会が催された。句集の紹介は来月号に掲載予定。

★城北川柳会秋の親睦吟行は10月29日大阪駅午前10時17分発列車で近江八幡の国民休暇村へ。長命寺・水郷の観光と句会あり一泊の予定。問い合わせは〒535大阪市旭区中宮二一五―三三、川口弘生へ。

★大江湖月氏(兵庫県)は退職後郷里で川柳教室を開いて五年、ことぶき川柳会「会員が80名の文化活動の一環として十一月には五周年大会を開催される。

本 田 恵 二朗川柳句文集

川柳談話室

頒価 千三百円(送料共)

- ①著書の代表句が二十五句
- ②本誌の初歩教室で初心者に示された助言の数々からの随想
- ③自句との改めでの対話、川柳談話室笑うても泣いても年輪ふえ続けどうせふえ続ける年輪なら、泣くよりも笑うての方が気が楽である。いっそのこと年輪を忘ればたら一層すがすがしいであらう。

丸山弓削平句文集

六 塵

頒価 千七百円(送料三百円)

六塵とは仏教用語で、心を汚がす六識眼・耳・鼻・舌・身・意)の対象となる六つの境界、すなわち六境(色・声・香・味・触・法)のこと。考えて見ると川柳は六塵の文芸といつてよからう。と長谷川紫光氏は紋士誌の巻頭に書いておられる。句・文・詩・歌謡・小説と縦横無尽に筆が活躍する。

★河村日満氏（鳥取市）は八月二日入院、十日に手術をされたが、10疝余りも瘦せられた由。

★竹中綾珠さん（東大阪市）は八月四日八戸ノ里病院に入院、点滴で加療中の由。

九月三日、国鉄王寺駅前の恵王病院に入院、十八日現在脳溢血で意識不明の重態が続いている。お三人の快癒を切にお祈り申し上げる。

★本誌8月号P29下段の句「それぞれにしたいこととする老夫婦」は56年12月の水

新同人紹介

角野 かず子

伊藤 春子

西村 かすみ

以上 薰風・紫香・水客・潮花推薦
春城 年代

奥田 みつ子
以上 薰風・酔々・いつを・春江・はつ絵推薦

藤村 宏子
以上 薰風・酔々・いつを・春江・はつ絵推薦

津山 冬子

以上 薰風・紫香・婦美子・はつ絵・春江推薦
西口 いわゑ

本多 洋子

以上 薰風・文秋・柳安子・史好・智子推薦
佐藤 藤子

柳太・薰風・花梢・美代推薦
藤田 泰子

柳太・薰風・花梢・美代推薦
田形 美緒

与呂志・敏・三十四・笑風・喜醉推薦
岡本 天平

煙抄に入選の句と同じ故に削除します。

★川竹松風氏（高知市）は五月十六日が誕生日、この程高知川柳社の有志に還暦の祝賀会をされ、健康を祝福された。（写真参照）

★傍島静馬氏（宝塚市）はお元気にいらっしゃるが、九月十八日左記へ転居、千599高槻寺谷町五一〇土居一英方。

▽句会案内△

■南大阪川柳会
時・10月19日（水）夕6時
場所・寺田町高松会館

兼題 場所・美点・別居、無礼講

■南海電鉄川柳部

時・10月20日（木）夕6時
場所・南海会館ビル本社地下食堂

兼題 合図・昨日・予備

■駒つなぎ川柳会

時・10月24日（月）夕6時
場所・寺田町高松会館
兼題 証拠・姿・地下街・好み

本社 九月旬会

会場 なにわ会館

七日(水)午後六時

午後、激しい夕立があった。酔々さんを見舞いに行った病院で足止めを食い、黒雲の過ぎ去るのを黙然と眺めていた。脳出血に肺炎を併発、今日あすがヤマという。雨はすぐやんだが、重い気持は旬会場に來ても霽れなかった。

今月のおはなしは薫風氏。8月16日のNHKテレビ全国放送「よめやうたえや川柳天国」は一般に好評だったが、放送の予告と同時に川柳入門書を求める客がふえ、書店によつては売切れになったところもあるという。入選句作品集の申込みは既に一万通を越えており、関心の波紋は予想以上に大きい。この企画に当初からタツチし苦勞もされた薫風氏は「川柳人の中には、いろんな見方があるが、ゴールデンアワーに川柳がとり上げられたことは路郎の志を継ぎ生々庵、好郎と地道にラジオリアを続けてきたこと、それが昨年の近畿エリアのテレビ放送につながり、今回の企画に

なった」と強調、同時にプロデューサーはじめNHK担当者のプロ意識に改めて感じ入った、と。

この後、話は大陸川柳会、郡上八幡観光へと佳境に入る。

初出席は田中隆二、天崎只士(羽曳野市)佐藤藤子(松原市)の三氏。皆さん、それぞれ兼席題の天をとられたのにはびっくり。

今月の月間賞は藤田泰子さん。おめでと。

(史好記)

(受付)与呂志・敏・重人
(進行)天笑、記録・射月芳・健司)

出席者 与呂志・栗・太茂津・健司・勝美
隆一・敏・狸村・紫香・郁榮・凡九郎・万里
兼治郎・潮花・滋雀・水客・喜風・トメ子・
寿馬・白水・鎮彦・寿美・岳人・重人・右近
春江・はつ絵・悦郎・白兎・美智子・只士・
萬的・風童・智子・規不風・楓榮・射月芳・
三男・幸・幸生・度・小路・金太・雀踊子・
木々・洋子・藤子・寿子・薫風・みつ子・山
久・荻露・三十四・柳伸・鬼遊・柳宏子・泰
子・英壬子・史好・天笑・英比古・春蘭・冬
葉・勝晴・柳影・頂留子・月子・赤木和子

席題「畳」

西出楓葉選

ジパンの正座畳が氣遣つて
畳のしめり明日も雨らし磯の宿
団地サイズの畳はみ出す子の育ち
柳宏子

ハネムーン帰れば待つてる青畳
畳替えするも妻の三回忌
うたた寝の顔に畳が描いてある
退院の畳何度も嬉しがり
四畳半の正客末摘花が好き
青畳嫁はじゅうたん敷きたがる
時差呆けをほくしてくる青畳
畳の目を背に描いて熱帯夜
椅子でずか畳ですかとスラックス
青畳わが家の空気入れ変わる
畳替え妻の齡にも触れてくる
畳では死ぬんとホスも知っている
お隣が畳がえしている何かある
畳まだ青くて掃除行き届き
畳の下で睥くろりがねむっている
孝行の和室残して建て替える
新しい畳に蛍光灯も替え
一畳の自由が僕の城にある
瘦身の畳一枚にすら満たず
青畳当分子供は叱られる
畳の部屋にベッドを置いて夏がゆく
死ぬときは畳いちじょうあれば足る
煙草吸いの部屋の座布団動かさぬ
ブタ箱の畳に一夜の悔いがあり
しびれる足を噛うている畳
大の字になると闘志の湧く畳
畳屋が来て目鼻つくマイホーム
青畳思わず正座させられる
夢見るに畳一じょうあれば足る

万里 万 里
滋 雀
藤 子
英壬子
潮 花
紫 香
太茂津
鬼 遊
美智子
智 子
雀 踊子
和 子
雀 踊子
重 人
与呂志
重 人
寿 馬
春 蘭
水 客
郁 榮
度
滋 雀
智 子
柳 伸
右 近
柳 影
はつ絵

カーペットの下で畳のくやし泣き
進まない時計が欲しい四畳半
小笠原流畳と一しよに棄てられる
畳替え妻にもパーマをかけてこい
暑氣払いまではいかぬが畳拭く
いぐさの香木の香ローンは忘れよう

席題「乗り換え」

住田 英比古選

乗り換えても翺びもできずにたそがれる
乗り換えてやっと私鉄の冷房車
乗り換えた駅あたにかい国訛り
乗り換えてもせず鈍行で押し通す
乗り換えて乗り換えて夫唱婦随なり
乗り換えてする時女迷わない
乗り換えて妻の荷物が多すぎる
乗り換えての度に小さくなる会社
乗り換えての苦手な母のバス旅行
熟年の各駅停車に乗り換える
単線のにり換えてから缶ビール
里の母のりかえのりかえやってきた
日先きく男で乗り換えきつぷもつ
乗り換えた故郷のバスがあなたのかい
乗り換えて夫婦せんざい食べにゆく
乗り換えて乗り換えて踏む故郷の土
乗り換えて渡り切れない長い橋
乗りかえたるに失うものばかり
乗り換えてみては試練の風が吹く
乗り換えた頃から空気がくくなる
乗りかえたバスで小さな灯をもらう

頂留子 悦郎 寿馬 頂留子 藤子 楓 小 路 重 人 三 男 水 客 与 呂 志 雀 踊 子 鬼 遊 楓 子 洋 子 天 笑 敏 頂 留 子 岳 人 右 近 春 江 郁 榮 春 江 郁 榮

乗り換えた駅から長い雨になる
乗り換えての駅で小菊にねぎらわれ
乗り換えて動物園へ行く男
乗り換えてよかった花の匂う里
鈍行に乗り換える日がやがて来る
乗り換えて出来ぬ私の時刻表
お喋りな女乗り換え駅にいる
乗り換えてのきぬ切符が二枚ある
人買いが乗り換え駅で待っている
いつの日も乗りかえ切符持っとな
ついておいでよ鈍行に乗り換える
臍甲斐ない男乗り換え駅で待つ
乗り換えたそこからぬくい風に逢う
乗り換えての出来ぬ運命線を行く
秋を探しにのりかえ続く一人旅

兼題「彫る」

齊藤 三十四選

イニシアル彫って静かな愛育つ
どれ位彫れるか鑿が知っている
弱いのが強そうに見せ肌に彫る
宿題の版画を父が来て傷め
石仏に頼る彫りし後影
彫り進む程亡父に似る亡母に似る
ループタイ彫れば善意の血が通い
裸婦を彫る胸の辺りに血が通い
木彫が彫って石屋仏を彫っている
上高地の小屋に二人の名をきざむ
不器用に昨日の続き彫っている

幸 悦郎 岳人 重人 射月芳 雀踊子 健司 美智子 雀踊子 柳伸 太茂津 白兎 美智子 幸 英比古

卒業生トータムボール完成す
石を彫るリズムも軽い太い指
非行の子家庭のひずみ浮彫りに
彫刻の所詮水と上る視聴率
肌を彫る桜で上る視聴率
芋ぱんの質状に個性彫っている
授業中机に彫ったイニシアル
眼を入れた彫刻刀は手になじむ
修練のノミ年輪に逆らわず
本職は床屋で観音彫り続け
職人の腕が泣いてる機械彫り
頭文字鳥居へ彫って出た二人
仏彫るノミで愛の字彫れますか
彫刻刀とひとつになっている無口
彫りあげた面がケラケラ笑いだす
熊を彫るアイヌの温和な眼の動き
物欲の世の空しさに彫る石仏
迷惑な記念を柱へ彫って去に
一念発心余生の限り仏彫る
変骨で一刀彫が生きている
彫った人彷彿とさせる羅漢さん
無の中で彫師がノミを研いでいる
一族の歴史に一揆の名をきざむ
能面の裏に戦さが彫ってある
罪の子も阿弥陀彫る手は嘘でない
般若彫る時は般若の顔になる
羅漢彫る手が知っている過去の傷
彫る時の顔はだれにも見せてない
古都旅愁一刀彫にある記憶

冬 葉 狸 村 楓 兼 治 郎 理 村 洋 子 蕉 露 鎮 彦 重 人 小 路 勝 美 三 男 隆 士 鎮 彦 太 茂 津 勝 晴 太 茂 津 滋 雀 三 男 柳 宏 子 楓 子 雀 踊 子 美 智 子 岳 人 只 士 右 近 只 士 健 司 雀 踊 子

自信作最後に彫刻の眼を入れる
彫刻刀野心はとうに捨ててある
石に彫る名前が一つ見当らぬ
木をささむ本のなかの仏に会いたくて
長崎の平和を彫って天を指す
雀彫るときも彫り師は鷹になる
世事疎く天職として彫りつけ
熊を彫るアイヌの呪文が深くなる
名工の鑿は磨ぐ間が長くなる
阿弥陀彫る十指が更生齋つて
ほめられる木彫り余生をたのしくし

兼題「びっくり」 玉置重人選

悦郎 智子 白兔 水客 風童 寿馬 柳宏子 滋雀 只士 三十四
耕花 英子 満津子 弘生 柳伸 隆二 文秋 郁榮 小路 潮花 美智子 隆二 金太 文秋 敏

生きてられる事にびっくりしましたよ
驚いた顔で喜びかきさない
制服の少女が話す男性論
物指しを換えてびっくりせぬことに
びっくりをさせていのちを狙おうか
びっくりをさせたらあかん倒れます
石橋の死角にびっくり箱がある
クラス会の返信死亡しています
御期待に比べびっくりしてみせる
宝くに当ればびっくりしてやろう
本心はびっくり箱に詰めてある
きつと地蔵もびっくりしたい時がある
縄のれんぐれば孫が飲んでいる
びっくりをしたのはぬすみのほうらしい
妻をびっくりさせるのはたやすいと思
う
コーヒーがびっくりポケットベルが鳴る
びっくりのお陰と作のくせ直る
びっくりしましたと既に許してる
前置きの「びっくりしなや」身構える
倦怠期びっくり箱を買いに行く
千万のワイロにびっくりせぬ怖さ

兼題「汚れ」 児島与呂志選

凡九郎 水客 泰子 楓 白兔 潮花 射月芳 射月芳 敏 泰子 鎮彦 万里 智子 鎮彦 太茂津 風童 水客 楓 隆二 重人 弘生 満津子 墮駄 幸一 耕花 英子

若さがむんむん汚れなど気にしない
真つ先に馬鹿正直の手が汚れ
汚さないように気使う一張羅
汚れてる方が負けている野球
汚れてる方から使っていくお札
お金では洗い落せぬ身の汚れ
落ち目です脱ぎます汚れ役もする
汚しては洗ひ汚しては洗ひ子の育ち
心まで汚れていない私の強さ
汚れもの主婦に果てない数え唄
汚点一つあって値打の出た名画
汚れてる大福帳にある家訓
人並みに汚れ凡々と道歩く
川下に来る程川が汚れ出す
着飾って女の心汚れてる
風鈴も汚れて秋を待っている

58年本社句会全出席者（9月現在）
宮園射月芳・飯田悦郎・北勝美・中西兼
治郎・桑原喜風・山本規不風・高杉鬼遊
橘高薫風・内海幸生・西尾榮・玉置重人
黒川紫香・谷垣史好・岩本雀踊子・長谷
川春蘭・松下蕉露・正本水客・吉川寿美
板尾岳人・若柳潮花・藤田頂留子・稲葉
冬葉・小林トメ子・佐野白水・高橋白兔
林はつ絵・松原寿子・西出楓楽・神谷凡
九郎・西田柳宏子・津守柳伸・江口度

春江 太茂津 文秋 兼治郎 度 勝美 楓 幸生 只士 楓 栗 射月芳 紫香 山久 智子

一年中汚れっぱなしの父の靴
 いちにちの汚れを洗うコップ酒
 洗つてもとれぬ汚れに塗るペンキ
 ハンカチの汚れは知らぬ取立屋
 汚れない心で人の心は掴めない
 賞罰のない履歴書を持つている
 汚れ役に徹して女美しい
 落ちぶれていても汚れた手は持たぬ
 染め替えてみても汚れはそのまま
 山売つて汚れた川が返らない
 人間の欲で汚れたゆく紙幣
 汚してはならない川が埋められる

兼題「浮沈」

野村 太茂津 選

岳人 天笑 泰子 健司 郁栄 雀踊子 みつ子 太茂津 泰子 水客 射月芳 与呂志 耕花 花村 英子 悦郎 紫香 幸 萬的 郁栄 春江 みつ子 寿馬 小路 滋雀 柳影 寿馬

沈みっぱなしそりやおまへんで明日がある
 浮き沈み腹に晒を巻いてある
 木の葉舟浮沈とつくに覚悟する
 浮沈賭け男に勝負の時がある
 浮き沈み人生楽しいものでん
 アルバムが語りはじめる浮き沈み
 過去帳に我が家の浮沈秘めて
 自慢にはならぬ浮沈を子に聞かせ
 ひよつたんの自信浮沈にこだわらず
 浮き沈み眉間のしわが物語る
 故里の便りにもある浮き沈み
 浮沈にはかわりのない歯車だ
 開店の花輪の蔭で閉める店
 大店の浮沈を知っているのれん
 ポーカーフェイスに浮沈を賭けてある
 浮沈はげし従いて来いとは口にせず
 浮き沈みこの人ならば判を捺す
 一生の浮沈貴方にまかせます
 膝まくら世の浮き沈みにはかわらず
 一本杉村の浮沈を見つづけて
 社の浮沈狐と狸生き伸びる
 人間の背中に浮沈書いてある
 浮沈する掟に足をひっぱられ
 浮くことを拒みつづける悪魔たち
 転宅の荷物が知ってる浮沈
 思いよう一つで石も浮きあがる
 浮き沈み語れば秋の風が吹く
 浮き沈みやつと港の灯がみえる
 順風に乘って浮沈に身を委す

凡九郎 智子 凡九郎 射月芳 凡九郎 智子 理村 喜風 楓子 藤子 三男 重人 金太 天笑 水客 春江 潮花 水客 みつ子 柳伸 岳人 風童 白兔 雀踊子 鬼遊 幸 泰子 太茂津

富田林市文化祭

市民川柳大会

日時 昭和58年10月10日(祝)12時開場
 会場 富田林市中央公民館(図書館)
 2階大ホール

兼題

「素足」 河内 月子選
 「悪戯」 高橋 夕花選
 「鬼灯」 高橋 古啓選
 「生姜」 前田美己代選
 「蝸牛」 小出 智子選
 「苔」 岩田 美代選

会費 千円

懇親宴 二千元
 賞 総合20位まで賞呈

主催 富田林市文化連盟
 富田林市教育委員会
 後援 富 柳 会

老地物語

締切毎月末。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

(整理・香川酔々)

川柳やがわ

高田 博泉報

御祝と書く墨丸く丸くする
坂越えた夫婦の対話よく通じ
燈台は海の別離を今日も見
氣にいらぬ話疲れた事にする
対話する労使へ陽気な鳩時計
靴の紐といて疲れがどつと出る
ロボットにまだ見つからぬ作業服
枯山水心を空にして対話
最愛の妻を道具とおもひ居り
好きでない嫌いでもない人と住み
地球儀の尻に南極しかれてる
毒舌との対話に少うし面くらう
肩書を捨てた対話に出る笑い
コンパクト疲れをそつと叩いてる
一服をうながすように耳が鳴る
ロボットは道具のよし悪しと言わぬ
古道具団地サイズで承知せず
灯台は父の光を持つている
年金の暮しつかれは口にせず
嫁入りの道具が値踏みされている

鉦 平 静 江 光 子 山 久 淳 朗 静 歩 紫 香 まさお シマ子 君子 光 夫 眉 水 竟然坊 花 世 かすみ 勝 美 亜 也 子 美 幸 右 近 博 泉

苗鉢を五百並べて疲れてる
疲れなど知らない男の靴ちびる
順風満帆徹夜をしても疲れない
逆うてみたがやつぱり流れてる
あじさいは雨に出会って風情ます
働いて働いて今日定年日
ホロビツツとこが五万か十万か
燈台は親のまなざし守り神
家中を飾り子のない姉夫婦
紫陽花と対話に飽きぬ梅雨暗間
片言の対話に希望燃やす親
どに色に染めても青春よく似合
始めから筋がいのまま対話
ロボットが熟練工を弾き出し
学歴も書かねばならぬアンケート
言訳の道具にされている不況
鬼神戦はるか燈台守の人
人間も道具コンピュータから返事
ライバルの互いに疲れかばい合い
父の日か秋にはおじいちゃんになる
オーエスケール川柳会 大坂 形水報
選手宣誓入道雲へ手をあげる
黒雲のたれてにわとり昼をなく
雨乞いに入道雲がわいてくる
あかね雲明日に何を期待する
雲を追う釣り人の瞳はブルー
おはようの後はゆうべの蚊の話
息抜きに雲の姿を追うてみる
ブツからひよろひよろと晩夏の蚊
タイガースが負けるわ蚊に刺されるわ
ビル暮し雲の動きも縁遠く

麗 水 野 生 度 一 途 まさ乃 柳 歩 定 子 一 笑 幹 子 琴 音 キ ミ てまり 垂 鈍 あやめ 英 壬 子 晴 風 小 路 一 念 柳 宏 子 薫 風 雅 洋 登 度 博 泉 亜 成 一 扇 てまり 聖 地 千 夢 幸 太 郎

垂れこめる雲が親子へ距離をおき
泰山鳴動頂上の雲ちぎれ
雲に乗り童話の国の旅続く
積乱雲が海から伸びる峠茶屋
川柳しんぐう
二枚貝別れることは考えぬ
海に居て海の広さを知らぬ貝
幾星霜貝になりたいたしもあり
蛤の棲める清さを護る義務
反省の時を与える貝になる
杭打って流れを変えてみる夫婦
尼寺に失意の女流れつく
流灯の待ち合っている島の陰
流せない涙を父が持っている
流せたらどんなに軽い心の荷
一本の線がきびしいおにごっこ
いい線をたどる二人を見守る目
一線を引くとあなたが遠くなる
まっすぐでないから曲線面白い
一線を引いて認める子の自立
わからぬなりにまたいて買うスイカ
スイカ切り大さきと比べる孫の顔
スイカにも手入れの届いた味が
あつたりと割つてつまらぬスイカ割り
一人喰うスイカゆつくり種をとり
倉吉川柳会 渡辺 善句報
夏バテをしても居られぬ盆の客
発展の土台にしたい店じまい
胎動の強き夏バテ励まし
機械化の発展就職門せまし
苦心談聞いてやるのも孝のうち

雄 峰 有 一 形 水 入 仙 幸 武 雄 キ ミ 弘 生 道 子 登 紀 夫 金 太 平 城 雀 踊 子 まさ子 真 琴 澄 孝 正 子 富 子 薫 良 昌 子 吉 加 水 十 郎 紫 泉 康 前 御 枝 光 枝 しづえ

苦心する次元がちがう父と子で
苦心さんたん教授の椅子をにり落ち
苦心して咲いて女王の名で呼ばれ
審査員苦心の跡も見逃さず

窯開けて見れば苦心が水の泡
毎日生きる苦心の爪を研ぐ
池田高島監督の教え振り

捨てられた教育勸語芽がふくれ
発展は大きな道が付いただけ
発展の裏に一つの村沈む

新潟の発展陰にある目白
うやむやにさせぬ司直の手が伸びる
うやむやというより外になくて古稀

うやむやで押付けられた発案者
夏バテの息の根止めたきのこ雲
それなりに女夏バテ防止法

教えるに体罰受けたとののしられ
川柳塔からつ
浜本

主来る待つだけ待つて帰る頃
コーシヤルハワイ旅行を餌にする
鷺羽山足にも眼ある相撲とり

またの名で呼ばれて句座の茶になごみ
服装がまちまちになる老いの秋
郷土史のここにも哀話松根油

図太さが眠らず妻の頑丈さ
枕木は声も出さずしじつと耐え
月末の赤字年金に支えられ

娘の家出それでも母は待ち続け
老いの身の依怙地宣言哀しくも
空徳利も一度振って酌いでみる

聴障川柳

稲田

豊作報

松女

あや子

苦句

とめ子

石花菜

寿朗

満春

秋人

弘朗

秋女

かつみ

千秋

柳風

車楽

独歩

宗則

碧水

義美報

虹汀

一竿

素石

久仁於

正敏

四郎

広幸

忠温

一彦

フユ子

ちよ

義美

健やかを君にすめるクコのお茶

一杯の席心もなごむ喜寿の春

お茶好きの客に心が晴れてくる

労資なお遠く冷えた茶をすする

根掘り葉掘り聞きたい玉露入替える

同窓会お茶が昔を掘り起す

安らぎへお茶の心になりました

誤解まだ溶けない茶をすすめ

何よりも先ず一服の茶をすすめ

生甲斐は障友と会う日のお茶の味

湯上りに冷えた麦茶で喉が鳴る

熱い茶を妻より先きに母がくれ

お茶漬の味で続いている夫婦

妙案も浮かばずやたら茶をすする

茶のころ「和敬静寂」額に入れ

手招きで新茶ふるまう農寸暇

冷えた茶を飲んで一気に喋り出す

待たされて焦る心を茶でおさえ

よく売れるお茶が冷えてる冷蔵庫

祖父いと茶の友達に先立たれ

昼の茶房でスパイは子供本を読む

遠い耳今日お茶席で聞きそびれ

お茶漬の味も出て来た病みあがり

川柳塔まつえ

恒松

物干し台身重の妻をふと案じ

億という金を政治家耳打ちし

耳打ちで女の背を値ぶみされ

八月の怒りが天に俯する

熟年の窓辺は天を信じきる

芳枝

嘉寿子

寿美子

叮紅

登根一

与根一

早苗

民恵

千代女

行江

睦美

涙夢

紫葉

三代子

文古

実夫

珍顔

みつる

和江

春一

鼓草

たかお

承平

豊作

高塚

晴野

美乃留

一眺

善玉と悪玉天ははじき出し

色ついたトマトが天のワルツ聴く

天高し禁断の実熟れははじめ

七夕の女神を泣かす雲が湧く

振り向けば黙ってついて来る女神

いつからか台座傾く女神像

マンシオンで夜の女神が米をとぎ

女神誕生夫婦の溝を埋めてくれ

ござんせと海が招くしげき節

津波後の海の懺悔を貝が聞く

満潮がやがて女の夢さう

海風いで帰らぬ亡父のデスマスク

夏休み海も子供の色となり

物干しで隣の匂い嗅いでいる

大阪川柳同好会

齊藤三十四報

さわやかな笑顔添えて席譲り

スクラムを組むと連帯感たえる

政治家のスキヤンダルは立消える

造反にスクラム必死に組み直し

中年のスクラム軍歌に酔いしびれ

スクラムに球追う青春泥まみれ

反核のスクラム地球儀をおおう

スクラムが死刑再審勝ちとりぬ

じぐざぐのスクラム腹が減つただけ

米の値を知らぬスクラム旗をふり

スクラムに老いも出掛け不況風

坊さんもスクラム組んだ京の寺

スクラムに働く唄が汗がある

スクラムの輪の中にいてなご孤独

湖風

柳宏子

金太

度

勝美

喜風

慶三

滋啓

三十四

律子

良京

頂留子

綾珠

千代子

右屯

白屯

孤呂二

昭二

多賀子

逋児

芳吉

舞吉

鉄花人

千代

荒介

正朗

鶴丸

瑞枝

満江

スクラムへしぱりつけてる平等感
弘生

河原みの報

半分切った命をいとおしむ
半分の責めはわたしにある別居
賞品が目当つたらぬ詩を残し
半分に分けたつもりを目で測り

草野
菊風

車には弱い故郷の母を連れ
気がひける話に弱い生返事
まっすぐな男が弱い靴をはく
適当の弱さを持つて嫉糸

飛鳥
巨詩

不意の客今日の日課が番狂い
お隣の日課大きい声も出る
カレンダーは遊ぶ日課の丸ばかり
親子の断絶罪は五分と五分

わがあゆ川柳会
小砂

松風
一人

湿度にお花畑の弱い茎
気の弱い鬼でまわり道して帰る
指切りの指は一番弱い指
年金で暮らして過去の無駄を知る

和友
弘生

夫唱婦随五分五分揃った丸い家
真実は五分五分なのに妻が勝ち
本当の涙ではない他人腹
腹へったへったと替えるユニホーム

人違い同名誤配され
蟬しぐれあれは網の目もれた声
梅酒なら下戸もはろ酔う夢心地
自分だけ読めるあて字で走りメモ

世似
朝子

雷雨去り心安堵の膳につく
稲妻に合せてなつた鳩時計
共学の机架の頭文字
創業の古き菓にした名菓

花代子
如花

腹の立つ袋は姑が繕つて
決めた腹言葉の彩に又迷い
腹違い罪なき罪を背負て生く
虫だつて生きる望みを全力で

飲みめせぬ梅酒造るも妻の趣味
竹の子のずぶとど堀をもぐり越し
網の目を潜り白い粉うずを巻き
さわやかに網が迎える大漁旗

輝水
英子

銀鱗が満ちてる網の息づかい
地引網の中から神にすがる声
ものぐさに梅酒の季節カブリチオ
もがいても天網からは抜けられぬ

武庫坊
紅陽

虫喰いの柱も文化財として残し
川柳高知
ヘルメットきりりと妻も勇ましい
人間の弱さを笑う夏と冬

網刺して漁夫はあしたの星を読む
天網をのがれ狸の空虚なり
蜘蛛の網サターンのたくらみ幾何模様
新緑が溶けて瀬音の露天風呂

民子
清泉

シャボン玉順序不同で割れて行く
手話と手話面白そうにする対話
保育所のリズムに合わぬ娘が一人
無事な顔みせ存分に叱られる

白溪子
森井

選筆戦近所同士にひびが入り
賞品のノート一礼して貰う
賜杯に日本一の顔をする
功罪は半分晩酌抜いてみる

雨や憂し合飲の葉むむ花濡れる
かくし味まねても真似の出来ぬ味
梅雨の晴れ間に郵便箱も風通す
紅すこし平家の流れ自称する

ヒデ子
輝水

よく聞けばとても悲しい弾き語り
アクセルを踏む生甲斐を認めよう
兄としてゴム風船をふくらます
せい一ぱい生きて手相を信じない

度
春江

半分になったグラスの酒の味
幸泉

朱果
青果

孝江
春江

砂山のもらさを知らぬ少女たち
手を打てば何でも揃う不倖せ
多数決曲った橋を渡られ
地球溶かすボタンに鍵が付いてない

千代
公子

竹萌
千鶴

美穂
芳子

じゃが芋をふつくらと煮て独りぼち
よく聞けばとても悲しい弾き語り
アクセルを踏む生甲斐を認めよう
兄としてゴム風船をふくらます

鬼遊
いさむ

登舟
千鳥

紫香
杜的

六竜子
弘生

寿美子
春江

弘生
三吉

求芽
杜的

千代
公子

博友
弘生

松風
八陣

白汀
はるみ

千代
公子

博友
弘生

宗珠
一孟

蔵栄
美栄

千代
公子

博友
弘生

百合子
テル

恵美子
鈴江

千代
公子

博友
弘生

久子
文平

清泉
民子

千代
公子

博友
弘生

法斎
とみ子

輝水
英子

千代
公子

博友
弘生

文平
とみ子

輝水
英子

千代
公子

博友
弘生

法斎
とみ子

輝水
英子

千代
公子

博友
弘生

とみ子
千代子

ヒデ子
輝水

千代
公子

博友
弘生

千代子
米朝

敏明
秀穂

千代
公子

博友
弘生

米朝
ゆう也

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

ゆう也
愛子

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

愛子
ひか平

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

ひか平
素水

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

素水
和子

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

和子
貞子

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

貞子
真子

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

真子
素水

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

素水
ひか平

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

ひか平
愛子

朝子
世似

千代
公子

博友
弘生

佳句地10選 (前月号から)

森井 菁居 選

車には弱い故郷の母を連れ
気がひける話に弱い生返事
まっすぐな男が弱い靴をはく
適当の弱さを持つて嫉糸
湿度にお花畑の弱い茎
気の弱い鬼でまわり道して帰る
指切りの指は一番弱い指
年金で暮らして過去の無駄を知る
無駄骨のわびは冷たい麦茶だけ
雷雨去り心安堵の膳につく
稲妻に合せてなつた鳩時計
共学の机架の頭文字
創業の古き菓にした名菓
川柳たけはら
森井 菁居 報
白溪子
紅陽
武庫坊
花代子
如花
潮花
年花
和友
弘生
明代
巨詩
飛鳥

おつたいおもちやきいになりました
くつあらうスカートべちゃんになったよ
学校でうえたへチマのつるがのび
すいえいにめがあげられてうれしな
お母さんどうして私のお母さん
あついかお菓子はアイスはかり買い
水えいにちようせん僕の夏休み
夏休み希望わくわくカレンダー
もう一度忘れ物はすめがよつて来る
夏らしい出がたつまっているスイカ
だれそつな日曜だからネジを巻く
安らぎは紙と鉛筆置いて寝る
三文の得山畑の露を刈る
酒やめた父あんパンを食べている
夫と子の寢息に今日を安堵せり
心地よき夢水割りの中に溶け
一日をどちらともなく語り合う
子が答出すまで明日を語るまい
過去ふつとゆらぎはじめた水中花
山頂で儲けの話などしな
人間の驕りへ蜚房らない
夜の深さへ人間何をくわだてる
華やかな服華やかな風を連れ
パン屑をかついだ蟻がつぶせない
天に満てノーマアヒロシマ地にも満て
因果な商売休日が忙しい
子等の目の前で夫のホームラン
いつか来た道おふくろの髪におう
打吹川柳会 奥谷 弘朗
親踏みし同じわだちを我れも行く 寿満湖

あきみ はるみ 純平 一華 一美 美保 仁昭 方昭 仁昭 亜貴子 恵子 紀愛 静水 房幸 蘭幸 比呂舟 純舟 洋之祐 令子 淑子 菁居 節夫 笑子 一路 貞子 のばら シゲヨ 年子 かつこ 弘朗 寿満湖

親子でも歩幅の礼儀あの世まで
親馬鹿と言われながらも子をかばい
親子でも金のことでは喧嘩なり
良心を捨てた札束地位狙う
良心に駆られ小嘘も言い兼ねる
温かい処置で良心発芽させ
良心に恥じて打算の愛を抱く
親切に良心添えて店繁盛
タイヤキの尻尾に欠けた良心
良心のとがめられて内証ごと
良心の余る荷物でけつまずき
初孫を亡母に見せたい盆の客
お盆来て友の遺作が語りかけ
迎え火に母は新盆客で来る
迎え火をせめて大きく仏待ち
迎え火をたいて黄泉路の亡母を恋う
お盆には先祖に似た子みな揃い
盆下駄で浴衣着た日を懐かしみ
いずも川柳会 尼 緑之助報
万雷の拍手を浴びて目を入れる
火種抱く女と闇の夜に出会い
鳥肌をたてて悲願の流浴びる
親と子のけじめを越えた反抗期
平等に陽を浴び雑草よく茂り
遺産分けけじめをつける父の筆
看護婦と患者の出会いババとママ
口事件のけじめを睨む目白台
試験管世紀の出会い見届ける
素麺の嫌いな嫁のライスカレー
霊柩車出会った今日の運だめし
国富んで今日悲惨なニュース聞く

みをき いわ子 忠男 文子 笑王 柳風 雄々 志津子 弘生 亮二 孝美 秋草 梅朗 吉朗 高代 康子 節朗 弘朗 勝水 栄一 芳枝 多賀子 久江 正栄 流石 多津老 孝太郎 軒太楼 水煙

あの時の出会いを話すいい機嫌
常識に富む長老に聞く意見
その時の出会いが今日の君と僕
良心がちくり憎悪の目と出会い
はつきりと公私のけじめ金庫番
蒸発で愛のけじめは泥まみれ
けじめまだつかず心に重い雲
米子きやら木川柳会 石垣 花子報
世界地図平和の鐘は鳴り止まぬ
未来地図親子で彩を描き分ける
落日の海に悲しい地図を捨て
世界地図世界の戸籍謄本だ
ハンドルへ妻の地図から指示が出る
汚点一つ白い巨塔の地図につき
悔いのない地図を求めてまだ迷う
地図のない国から盆の船が着く
人間の臭いが地図を変えて行く
地図のない臺中の天地模索する
コピーされた地図がマンネリではないか
廻り道もある橋山の地図を買う
南海電鉄川柳部 広井すえお報
本四橋テープカットは何時の日ぞ
それぞれ思惑秘めてテープカット
胸の差でテープカットまだ余ゆう
決勝に一手手前でテープカット
映画見る関心あるとテープカット
働いた人を後ろにテープカット
祝福の蔭は涙のテープカット
新婚の門出テープカットが晴れてくる
あてやかなテープカットの美女画廊
紅白のリボンがおどるテープカット

正朗 芳子 明朗 代仕男 独仙 緑之助 九二老 花子報 あい子 とも子 千春 晶子 美世 花子 田鶴 みどり 瑞枝 千代 伊都 覚然坊 主水 東雲 いづ枝 信江 雅風 春蘭 花仔 真砂

乗客はつんば機敷のテープカット
テープカットマニアも一役買つてでる
オープンヘテープカットの灯がゆれる
テープカット陸上競技蟬しぐれ

ハワイ川柳ウイロー社 市岡 曉舟報

辛抱が良い格好をさして呉れ
辛抱を仕やれと論じ嫁がせる
辛抱に育てた木だが花咲かず
辛抱も処生の道と父訓し

辛抱してと母は風呂敷かなく締め
辛抱をしたよと夫婦語り合い
辛抱九十四年金の成る木が見つからず
お姑の愚痴に辛抱強い嫁

ラスベガス辛抱強くときさやかれ
辛抱して溜めた財産子がつかい
現代っ子全く辛抱持たぬなり
寢食を忘れた辛抱今日の幸

先輩は辛抱だけに生き抜ける
行き過ぎの辛抱弱さに呆れ果て
辛抱に限度があると激昂し
辛抱に負けて貧乏影を消し

辛くてもじつと辛抱明日に賭け
辛抱の甲斐あり皮の椅子が待ち
辛抱が今宵も枕高く寝せ
辛抱へ万才を聞く嬉しい日

辛抱の二字を宝と子に教え
辛抱が足らず世間を狭くいる
菜の花句会 高杉 鬼遊報

頼る人見つけて猫と住んでいる
三部経途中で子供叱りつけ
子と花火風呂の時間をまたずらす

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

あなたの手信じて渡る丸木橋
故郷を呑んだ湖見る峠
軍歌出て宴を悲壮なものにする
空襲の記憶かすめて行く花火

お百度に頼る姿を見せしう
花火見る一期一会の人の群れ
人生の途中下車だと入院し
故郷の池マシジョンになっている

階段の途中で止まる電話ベル
墓標みな祖国を向いている軍歌
池も減んで試行錯誤をくりかえす
寂しさと暗さを深くする花火

最後には頼りにしてる公益社
花火跡昨夜の母子の声がする
この峠越してもいばらの道が待つ
宴会の途中へ妻の長電話

はしこ酒露宮の歌がはなれない
玉屋鍵屋そして花火は消えました
人生の峠は登りばかりのよう
神仏に頼み努力を忘れてる

孝行と思ひ峠を越えるなり
頼られて重い約束だけ残る
遠花火別居話はまだつづき
悲しみのころがわかる池の月

川柳後集 井上柳五郎報

すえお 勝美 山久 悦郎

沙京 健

蒼生 嗣榮 十吉 天心 拝山 虹 萬里歩 紅 香夢女 雪女 高原 一牛 梨花女 三十四 張賀 三石 三女 公女 妙子 公女 曉舟

度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

悦郎 度 昭子 公女 妙子 三石 三女 張賀 梨花女 一牛 高原 香夢女 雪女 紅 萬里歩 虹 青山 天心 十吉 嗣榮 蒼生 健 沙京

美乙女 三男 右近 勝美 冬葉 醉々 頂留子 柳宏子 シマ子 雀踊子 幸 射月芳 健司 雅風 蕉露 みつる 柳伸 凡九郎 幸生 夕花 鬼遊 糸葉 栗 弥生 青銅 佐加恵 柳五郎 健一 秋月 元一

回り舞台残り絵具で染めてみる
残された余白は私の色で染め
姥桜ブラジャーに若さかけてみる
騙されてブラジャー外した転落詩

ブラジャーをつける間もない子沢山
ブラジャーに滴る女が止めてある
ノープラですこし翔んでみたい夏
組んだ腕放すもんかとハイヒール

靴を脱ぎ裸足で歩く千鳥足
隙のない男の靴はよく磨き
尼崎いくしま川柳会 角野かず子報

宝島子供の時の夢つづく
この島の慟哭赤い花が咲く
上様は女盛りをご存知ない
パーセント降るか降らんかだけの事

母さんがグロップはめてコーチする
メルヘンの島でひよっこり鬼に遭う
石段の数なら八つ好きになる
おせんべい目ざとい鹿に囲まれる

エリート父の冷たい子の瞳
紋日には鹿もせんべい食べ飽きる
牝鹿がふりむき奈良が好きになる
決断へ扇子を少しずつ開く

わが町の歴史は知らず奈良を訪う
奈良にこぼれ絵はがきに夫婦鹿
落ちこぼれ両方の掌で受けとめる
ピカソ展分らぬままに疲れる

双方が白旗持つて仲直り
ニールック乞食ルックの黒い紅
鹿の目は小さな愛をさがしてる
甲子園声の余韻がまだ残り

照路 玉水 紫峰 博友 和夫 草風 定平 桃風 恒洋 玉子 晴子 美代子 幸子 貞子 伊三郎 年子 春子 佳秋 紫香 牧郎 郁榮 美智子 かずみ 保蔵 一郎 静江 君子 すすえ

下町に生まれ祭りに血が騒ぐ
エネルギーこんなにあつたか夏祭り
西瓜割る家族は多いほうがよい
祭り囃子に記憶の中の人という

川柳わかやま

堀端

三男報

あつさり引いた口紅冷めている
腹割ればあつさり糸口解け始め
雲流れ流れて夢に遠く生き
積乱雲におもいことばを聴いている
雲の峰めざす牛歩をしかと踏み
欲捨てて雲の心が解りかけ
鱗雲男一匹背伸びする
夕焼け雲男に生きる明日がある
倅せの約束をする西雲
雲悠々今日も一人で行く覚悟
雲と月逢うて別れてゆく風情
花を追う蝶も心は燃えている
まぼろしを追うて自分を見失い
無常感雲に乗せてる蟬しぐれ
あつさり別れた長い橋がある
日記帖京の慕情が腹を切る
古都めぐり和服が似合う赤床几
住めば都桃くり柿がうまい里
都会から季節を送る宝なし
あこがれた都で足を引っぱられ
追う程の未練はないがもの寂し
追い越してからが本当の試練だろ
返すもの返して未練もう追わぬ
追憶が水面にゆれて精霊会
追うものを持つ楽しみに生かされる
満たされぬ心で虹を追っている

楓 楽 智 慧 子 智 子 節 子 善 太 光 代 登 紀 夫 勇 太 狂 虎 岳 人 白 光 子 英 子 稚 代 武 雄 双 木 山 久 利 德 雀 踊 子 寿 子 信 子 登 志 代 豊 太 庄 平 克 子 太 茂 津 桂 子 規 不 風 照 子

訣れても影を追うてる花時計
トンボ追う眼に出鱈目などはない
頂を追う夢があるかたつむり
また駄目やあつさり何度目かの恋
あつさり切れぬ見えない糸だから
人形の貌してあつさり今日を生きて
あつさりと手を振る背が哭いている
あつさりと折れてはならぬ男の背

川柳大阪

田中

新婚の甘味調理師でも出せず
みつ豆の甘味へ主婦の無駄ばなし
今はまだ歩でよし金になる器
居眠りの舟は美人の方へこぎ
農繁期文明の音鳴り響く
音程も浮かれていないちんどん屋
札束の土地を雑草占拠する
花籠にしゃくやく一輪今日の客
余暇の旅また名簿の一人欠け
年金が選り好みさす二度の職
最終に若いOL飛び乗った
一坪の区画の墓地にある安堵
カタカナの新語に母は追いつけず
寺参り誘うた相手若過ぎた
向い側ホームのあくびうつされる
仲人の返事が喉に引っかかり
長雨にうんざり猫もあくびする
親子でも他人ですよと請求書
本当の涙他人がくれました
剪定は試し切りです花鉢
こんな時他人は金で割り切れる
職場では他人の顔でいる夫婦

笑風報

信 秋 公 子 三 男 凡 九 郎 正 子 千 寿 子 和 子 緑 良 兄 山 伸 子 貴 鷹 醉 花 三 千 雄 六 竜 子 比 呂 志 比 呂 志 君 枝 雅 集 敏 敏 和 世 本 陰 棒 喜 醉 鉄 心 未 坊 洛 醉 笑 風 道 子 金 太

肚割って話す他人が居てくれる
反抗期一人流れに立ち向い
信念の石が流れを変ええるかも
流れ弾飛んで来そうな駅に居る
大難を越えて嬉しい春がある
甘味ある言葉についてい込まれる

岸和田川柳会

植山 武助報

宅便が先に着いてる旅帰り
都会でも頑張り抜いた国訛り
出稼ぎの父が蒸発した都会
ささやかな善意都会で出会う幸
ふるさとを捨てた都会が広すぎる
地下街で寝ても都会に住むという
訛りまだ取れず都会の二人部屋
故郷の月が都会の空に出る
配達へ苦手な犬が吠え立てる
宅配へ土産預けて旅終る
かんたんに咲く小径をバートのペダル踏む
脇役を一途に生きて心満つ
子の夢を叱った心が落ちつかず
一人娘が背負いきれない父母の夢

城北川柳会

神夏磯 道子報

ワープロを安くなるのを待つて居る
達一郎

タレントの暮し支えるコマーシャル

月給日僕を支える玉の汗

出稼ぎの家族支える太い腕

孫の笑いに支えられての夕餉の膳

昔此処に大司令のピラミッド

支えられ支えて登った夫婦坂

捨てるには何とも惜しい組違い

立秋の空に燃えつつ百白紅

命令はせすとも花は四季へ咲く

病人に見せる笑顔を演技する

一人だけ目の笑わない人が居る

思い出に今なお続く祖谷の橋

冷房があるから中流意識する

宝塚男につらい招待券

ライバルの魚拓へ挑むエサを選ぶ

数珠の玉一つ一つにある祈り

フルベース積乱雲が笑うなり

バーゲンのシャツ袖がのびたまま

思惑が夫婦で違う盆休み

母と子の緑の様に路をむき

カタカナが老いの読書をさまたげる

中流の暮しへ並ぶ皿の数

命令を守り続けて居る英霊

むつかしいメロンの皮の残しよう

ロボットの腕曲げたまま夏休み

乾杯のグラス笑顔に支えられ

先生が言ったと言う口答え

やっこさ老いの炎暑も峠越す

ひまわりのこうべいつしか秋に垂れ

東大阪川柳同好会

齊藤三十四報

弥山人

頼一

重彦

公一

すみれ

弘生

晴子

八重

道恵

静子

婦美子

正之

悟郎

星斗

登志代

右近

静歩

テルミ

倫子

新一郎

ふみ

山久

茂樹

満津子

ただし

笑風

午郎

炳齊

志保

草花に囲まれ句碑は永久に生き

通り雨虫の音色が登ってくる

歯科予約済みに救急車も呼べず

すぐ鼻に汗かく人で憎めない

働いた汗に満足感がある

夏祭り楽しい汗をかく子供

汗をかく役は皆んなが逃げ廻り

賜杯と綱を両手に玉の汗

給金を直した汗が光ってる

汗かぬ人が一番よく儲け

奉仕する汗は素直に感謝され

幸せを守るくらしの汗ながす

汗握る場面でテレビ時間切れ

メスを持つ顔に湧き出る玉の汗

いい汗をかこう真夏の陽の下で

このままで終らぬ父の汗を見た

追いかけて来た善人の玉の汗

しきたりとやらの冷汗かき通し

南大阪川柳会

中川

他人にはすらすら出来るアドバイス

他人には言えぬ夫婦にある会話

蹴とばした石が他人にしてくれぬ

寝めとけば間違いないと言う他人

他人こそ今日は多忙な公益社

力では勝てぬ男を眼で殺す

古稀という力を出して薬を打つ

東の間の逢瀬こんなに弾ませる

東の間のドラマに花火師身をけすり

ギャンブルの儲け束の間だった悔い

千代子

度

滋啓

右近

弘生

白屯

みつる

美子

柳影

慶三

喜風

三十四

光水

良京

湖風

雀踊子

孤舟

柳宏子

滋雀報

楓楽

文秋

度

恒明

春蘭

柳郎

悦郎

白兎

久子

頂留子

喜風

蝶になる少女の羽化は束の間に

束の間の命樂しむシャボン玉

社用族束の間だけのよい羽ぶり

店頭にものが溢れている平和

店頭の死角に少年Aの罪

店頭が貴方はタメと言っている

店頭は何時もきれいな寡婦の店

店頭のマネキンだけが似合う服

虚栄心店頭にある落し穴

トップを走る父だと信じたい

トップから落ちると喜ぶヤツがいる

トップから転び根性で走ってる

追いかけられる立場になっている

妻でさえ或る時他人と思われる

力添え出来た自分が助けられ

力にもなれずいつも聞いてあげるだけ

あくびする力は影武者持っている

川柳はびきの

塩満

同性の前ではアハハハと笑う

熟年は健康法を語り合い

死亡欄元中将九十一

家が建つ川の流れを変えてまで

ソロバンはがっちりとはじきあきまへん

ボケ始め過去の栄光追い求め

おどり食い欄んだ箸も踊り出し

地方裁今浦島を発掘す

蚊をたき話振り出しへ又もどり

大物の期待は捨てぬ通信簿

無法松暑さ忘れさす熱演

寿美

喜美子

蘭

勝美

滋雀

凡九郎

覚念坊

三

弘生

雀踊子

眉水

慶三

智子

綾珠

章久

節子

節人

敏報

和子

義一

伴子

隆

美代子

忠二

隆宏

恵美

吐来

喜代子

胡村

湖のはとりにおとぎ話の花一つ
山好きで山の空気を持ち歩く
血の絆時には重い糸ぐるま
頑固さも孫の声には崩される
腹立てても帰りも出来ぬ診療順
むつしか日曜画家の筆うごく
森しすか日曜画家の筆うごく
陵南の森美しき蝶の舞い
影おとす御陵の濠の水深く

にた川柳会

西村

早苗

どう見てもアウトラインを越した仲

独 仙

持たぬのが言葉巧みに誘いかけ

登美也

引き金を手をかけ軍縮話し合い

鉄花人

学資は親の汗旅行は僕のアルバイト

きみえ

追伸に思慕の憶いを深くする

多賀子

一休み一休みして風の坂

幸 一

バーゲンに元マネキンの着たスーツ

栄

一触即発中で平和を論じ合い

夢 醉

残り酒半端でラッパ呑みにされ

花 子

梅雨晴雨カタツムリにもゆく所

景 子

夏バテからおとり出てこぬ券売機

裕

出会ったらソッポを向ける嫉妬心

三 和

夏休み村の化石をさがす指

弘 朗

一徹な一言居士で竹が好き

雀 踊 子

白紙に戻すと負けた事になる

寿 美 子

夏雲の影をひきずり秋となる

雄 々

釣竿のそばで銀鱗はねてみせ

紫 吻

絶筆の綴れなかったホッチキス

早 苗

悲しみの涙は流れるだけ流す

礎 石

川柳化粧

植村客遊子報

職安へあきらめ切った顔ならぶ

礎 石

水郷の父の小舟で嫁にゆく
泣かぬ子を泣かせて祖父は困りはて
黒幕という脇役が恐ろしい
アジサイがやつと元気になった雨
書つかいをつけて互いに年をとり
書を習い読める歌碑に胸赤きの
なぐさめの言葉欲しさに赤きの
欲ばけと言われやつぱり欲呆うけ
なれそののロマンスを語る酒の酔い
到来の新茶を入れて友と居る
錦着て帰る駅まで消えていた
老いの旅内助のことは口にせず
失意の日猫背となりて日に晒す
酔った眼に妻が美人に見えてくる
栄転が続いて故郷遠ざかる
三班に分けて夕食大家族
エンジンの音で港の朝があけ
故郷を捨てさせている都会の灯
姉ちゃんと呼ばせ成る程若づくり

尾浜川柳会

黒川

駅伝で選手笑顔に汗が泣き

客遊子

途中から話がはける長電話

岳 詩

長々と畦道で蛇ひる寝する

秋 月

長すぎる服で少女は非行めく

大 鷹

夏休み子供は旅を計画し

白 李

京の街コンチキチンで梅雨が明け

葉 香

夏みこしギヤルに担がれよく弾む

永 楽

自画像へ髭をつけようかと思ふ

越 山

葉参り居心地よいかと聞いてみる

輝 月

東北に送ってやりたいこの暑さ

み ね 子

悲 子

哲 子

さ と る

由 紀

秋 信

互 伸

実 男

サ ワ 子

輝 月

越 山

葉 香

永 楽

歩には歩のフライド王手かけている
居候茶碗の音で降りてくる
おとなしく聞けば相手の肚が読め
古桶を過ぎ心の鬼もいなくなり
鍵つ子がまた妻になるかくれんぼ
鬼瓦よく似た妻と五十年
寝坊した鬼が目薬さしている
西宮北口川柳会 妹尾 春江報
若本多志志さんを偲ぶ会(一周忌)
星となりタンゴのステッフ軽やかに
星座には怖いさそりも住んでいる
恋人が欲しいと思う星月夜
失意して眺めた星は寒かった
どの星になっているやら原爆忌
火の星の下に生れた吾なのに
左遷の地こうまで星が美しい
流れ星僕に背信せよと言う
父の星流れて歴史一つ消え
満天の星に人の寿命当てて見る
流れ星子はひとりずつ旅立ちぬ
星月夜捨てた男が気にかかる
流れ星易者の肩に落ちてくる
あの星のどれかに戦友が眼つてる
星空が綺麗八月六日の夜
星くずの落ちた女の文となり
海峡の星どちらにも傾かず
死に病抜けたら星が美しい
星の降る夜と覚えてる許り
母の手を放すと星になるだろう
シベリアヘジャワへと若い日の悪夢
マニキュアすれば妖しく若返り
夢之助
よしづく
寧 一
保
佳 秋
かつみ
牧 郎
春江報
み つ 子
敏 信
静 子
貞 吉
清 太
静 歩
半 歩
は の 絵
春 江
伊 升
美 智 子
保 蔵
春 子
唯 駄
眉 水
天 笑
水 客
恵 美 子
花 村
あ ざ 子

真夏陽を若きではじく甲子園
若者に囲まれ老いを深くする
古希過ぎて優待席を譲る朝氣
裸婦を描く一途な若さバレットよ
茶柱を信じぬ若さをよしとする
年寄りが来るとこてなし虹の街
若き日の過ち認知の子が育つ
タクシはバックミラーに話しかけ
歩いたが良いとタクシ断られ
タクシの降りしな好きと云けて去り
タクシに私の香水匂い出す
タクシを呼ぶ日は女連れている
タクシへチツプ外遊ぐせがつき
のし付けて返す女のころざし
立志伝妻の補筆でサマになり
志捨てる勇氣の朝の霞
青雲の闘志ゆるがす都市斜漢
志など持たぬデパートのカフト虫
心得て秘書が受け取る志
紙包みちよとひねった志
奥様が別に握らす志
廻れ右するとき大志捨てている
剃髪した氣持ちで亡師の一因忌
洗ひ髪夕顔いくつ咲いたやら
後髪ひかれ矢切りの舟に乗る
横綱に勝ったうれしい乱れ髪
ロマンスクレイ浮いた噂のない部長
アデランス外すと男眼くなる
夏祭り夜店で買った髪かざり
白髪で時の氏神買って出る
洗ひ髪香油はのかに蟬しぐれ

笑女 鬼遊 日の出 婦美子 杜的 水声 三笑子 紀雄 美津子 右近 年代 潮花 月子 歌子 静馬 文平 園歩 寿馬 百漢子 春蘭 かすみ 紫香 千世子 いわゑ 美幸 しげお 恵 伊三郎 宏子 幽香

昼さがりの愛たしかめた乱れ髪
黒髪がシルバースhirtに座ってる
黒髪は過去修道院にカンナ燃ゆ
狐格子のぞけば意地の納め髪
堺川柳会 河内 天笑報
夫婦でも互いに邪魔な時もある
物干して昔は見え見え大文字
邪魔者が消えるて眠くなってくる
浅い溝埋めるハガキを書いている
しみついた思想が邪魔なまま生きた
絵ハガキでアルフスの雪いだいた
ふらふらの頭に徳利の音が湧え
叱られてるボケツで蟬のなく
邪魔なのが一人混った散歩道
出番待つ善人いつも邪魔にされ
泥酔がわが家の門でしゃんとなり
肩書の一つが邪魔な時もある
酔った女の重みと一緒に歩かされ
火と水の性で夫婦の仲がよい
逆も又真なりとまた抜く鼻毛
八月のハガキに祈りこめてある
まばたきのたんびに邪魔なつけまつげ
屋上へ出ようよ月が美しい
花時計誘う言葉を選っている
金だけが生命誘いの手に負ける
ぎつしりといつも多弁なハガキだ
ふらふらと上った球に運がむき
お誘いをけると冷たい風がふく
富田林富柳会 藤田 泰子報
子守唄入道雲の覗きぐせ
一緒なら流れてみた雲の果て

郁栄 弘生 冬子 栗 金三郎 度 月子 たつお 天笑 東雲 柳伸 夢成 花仔 紀美女 秋風 千万子 笑痴 素灯 甘平 富子 鈴代 郎晴 元紀 春柳 年代 武庫坊 金太 美緒 トシエ

ちぎれ雲ひとつひとつの私語をもつ
雨雲を遣う羽目になる雨女
如雨露手に雲を眺めてあすのこと
都会の子みんな帰っていわし雲
台風が邪魔するデート断られ
断ってやっぱり後悔してゐる恋
断りの子感薄き角封筒
負うた子も一緒に流す汗の遺
蔭の汗見す頂点にあこがれる
琴線に触れたことはも古くなり
若者の会話理解の外で聞く
汗は地に沈んで狼は木に登る
茜雲悔いが無い日のフィナーレ
雲の峰想えば遠き貌をして
断りの出来ぬ心の借りがあ
断つてばかりで溝が深くなる
川柳翠洋会 中西兼治郎報
本星を衝いたもうもう土煙
乙姫の情けが分る亀の背な
濁く咽に山の清水の甘露なり
寄付集め来て夏祭り近くなり
社長椅子座りたくない時もある
稲妻が去って夜更けの風呂浴びる
家計に稲妻一瞬亡母を見る
化計簿に赤字の増えた田の乾き
稲光りさりとかわす妻にな
稲光りいそいで古単にかえらねば
稲妻に思わぬ一面みせた女
生と死の境地にできた情もある
だだこねる胎児の動き撫でてやる
稲妻の様な女の勘恐わし

美代 美津子 恭子 きぬ 憲太郎 森子 章子 幸一郎 美佐子 富美子 勇 冬二 澄子 慶子 花梢 泰子 いつを 酔々 あき子 光子 綾子 よし子 みつ子 照子 美緒 泰子 景子 登志実 風童 兼治郎

● 募 集 ●

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「花道」 川口 弘生 選
「測る」 浜野 奇童 選
「妻」 河内 月子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

一月号発表 (11月15日締切)

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫香 選
愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選
課題吟 (各題5句以内)

「流行」 中村 ゆきを 選
「指定」 小林 孤呂二 選
「決心」 錦織 文子 選

★愛染帖・課題吟へは同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋をこゝに使用ください。

10月の常任理事会は1日(土)

〒545

大阪府阿倍野区三軒町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所 川柳塔社

電話 (六六六) 六九一四番
振替口座大阪 8-333326八番

定価 五百円 (送料50円)

半年分 三千二百円 (送料共)
一年分 六千三百円 (送料共)
昭和五十八年九月二十五日印刷
昭和五十八年十月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎
印刷所 藤原 童心社

本社11月句会

日時 十一月七日(月) 午後六時
会場 なにわ会館

兼題

席題
会費 五百円

「おはなし」
「収入」
「個展」
「帯」
「運」

当日発表

阿部 柳太 選
高橋 操子 選
塩満 敏彦 選
那須 鎮彦 選
西田 柳宏子 選

天王寺区石ヶ辻町19-12
地下鉄谷町九丁目・近鉄上本町下車東南
電話 06・772・1441番

★投句は柳箋に一葉一題、郵券200円同封のこと。

川 柳 塔 社

10月の兼題と選者は表紙裏参照

お 願 い

誌代その他本社へのご送金は必ず左記
会計室へお願い致します。

★郵便振替(大阪8-333368川柳塔社宛)
をご利用下さるのが安くて便利です。
用紙は郵便局にあります。

〒581 八尾市中田二一三〇二 高杉鬼遊方

川柳塔社会計室

編集後記

☆香川酔々さんが脳溢血で倒れた。九月三日のことである。十九日現在、人工呼吸の装置は外されたものの意識はなお不明である。私の父は、脳溢血で死んだのだが、二度まで意識不明から甦って、身心障害もなく長く過したことを思い、彼の意識も一日も早くケロッと戻って来てほしい。

☆NHKの全国放映のスタジオの様子を書いて貰った。具体性に乏しいのは短い文章では致し方ないことだった。川柳番組の放映の予告がテレビガイドに出た時点から、全国の書店では川柳入門書の売れ行きが倍増したそうで、NHKに古川柳の解釈に関する質問が来たりしたのも一般の関心を示すものだった。お祭は、その後始末に草臥れるもの。句集編集の応募句を削る作業に、厳しい残暑の数日を悪戦苦闘した。当日の発表句が少なかったお詫びの気持ちで頑張った次第、

お手元に届けられるのも近いうちと思う。

☆十月に入ると各地の川柳大会が目白押しに控えている。さし当って二日の同人総会と二賞発表の句会にお誘い合せの上ご来会下さり、地方の柳人との交歓をお願いします。(薫)

☆般若心経を開くと、次のような文章にお目にかかると。舍利子色不異空空不異色色即是空空即是色受想行識亦復如是

舍利子は、実在の人物で仏陀の弟子の中の長老であった。この舍利子に呼び掛けてこの言葉がある。人口に膾炙している言葉は、色即是空空即是色である。色は、形または形としてあらわれることであり、変化をこれに加えたものである。空は、本来、空虚、空無であり、実有でないことを意味する。われわれ日本人が古来尊んだ、わび、さびの境地に通じるものであろう。眼に見えるものが実有でないものであり、実有でないものが眼に見えるものである。このように心経は指示する。古今和歌集巻四に、「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」という藤原敏行朝臣の和歌がある。これも心経の言葉に通じるものがあるようだ。

☆路郎作品「水溜り 飛びそこねても一人かな」もよく考えると、この心経の言葉に通じるものがあるようだ。(酔)

▼この欄を担当している一人、香川酔々氏が斃れ入院した。九月六日夕、見舞いに行く。国鉄関西線王寺駅下車、長い陸橋を渡る。右前方の線路ぎわに恵王病院が見える。医療器械の種々のパイプが彼をガリガリのようにはつらつと縛りつけている。電気洗濯機くらいの人工呼吸機が彼の阿吽の呼吸を補っている。反応意識は既になく、吐く息、吸う息が器械の袋を伸縮させている。彼が今、生きている証は円筒の中を上下するこのアコーディオンの動き一つに懸っている。悲しいことである。人のいのちと対峙して、生きる価値感を考えさせられる。十八年前、私より一年後れて柳界に入ってきた彼は、同じ川村好郎氏門の私をライバル視した。私も彼をライバルと決めた。このことによつて十年の歳月は、彼をも育て私をも育ててくれたと思つてゐる。彼は学歴もあり多くの蔵書を持ち勉強家であり、俳句もやれば歌もうたう。彼に勝る何物もない私が、彼をライバルにしたのは何だったのか。川柳は情熱だと竹原の山内静水氏がよく口にされる。その情熱が彼を介して、私を燃え立たせてくれたのである。(き)

☆川柳塔賞の選考委員を仰せつかつている関係で「水煙抄」は毎号二度、三度と繰返し目を通しているが、宝さがしに似た作業の中で特に気づいたことは、最近下五終止形の句が非常に多いことである。

形が三十六句ある。他の月もこれほど極端ではないにしても多いことはたしか。単なる偶然とは思えるこの現象、一過性流行なのか、それとも他にわけがあるのか。

☆これは一つの推理だが、たまたまこの時期、女性誌友がふえており、これと因果関係があるのではと考えてみた。

☆男と女の思考方法の違いについて吉行淳之介は「男は頭と心臓をふくむ円周の内側で考える。ところが女の場合には、頭と心臓の円周の部分で考えることもあるし、子宮を中心にした円周で考えることもある」と言う。子宮思考の特徴は凡ての感覚を内へ内へと取り込んでゆくところにある。しからばこの思考形態の所産はどうしても自己主張が強く、閉鎖的になり易い。そこで「女性終止形がお好きか」——ちよつとコジツケかな。

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十八年九月二十五日 印刷
昭和五十八年十月一日発行 (毎月一日発行)

姉妹品大和錦印



柔道衣 剣道具

早川繊維工業株式会社

大 阪 支 店

大阪市天王寺区伶人町29番地の1
電 話 (779) 1690~2番

警察庁・警視庁
全国府県警察
大阪府警察本部
講道館・御指定

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ



ぶ た ま ん や き ぎ ょ う ざ
豚饅・焼餃子
し ゅ う ま い ち ゃ あ し ゅ う ま ん
焼売・叉焼饅

大 阪 ・ な ん ば



TEL (641) 0551

《支店・出張店》

なんば高島屋 心斎橋そごう 梅田阪神百貨店 天満橋松坂屋
中之島サン・ストア なんば新川店・新川売店 ドーゾマ地下支店
ミナミ 地下虹のまち鹿鳴 京阪ショッピングモール 淀屋橋サン・ストア
南海難波駅構内店 近鉄百貨店(アペノ店・上本町店・奈良店・東大阪店)